

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成12年度 —

楠見遺跡発掘調査
岩橋Ⅱ遺跡発掘調査
太田・黒田遺跡第46次調査
西庄遺跡第2次調査

2002

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山県の県庁所在地である和歌山市は、紀ノ川河口に広がる和歌山平野に立地しています。当市内には、旧石器時代から江戸時代に至るおよそ 400ヶ所にも
のぼる遺跡が確認されており、その数は年々増加しつつあります。

一方、市内における開発行為も増加しており、遺跡は様々な工事等によって消滅の危機にさらされています。そのため当市としましては、平成 7 年度から個人による開発行為等に対処するために、国庫補助金・県費補助金による市内遺跡の発掘調査事業を実施してまいりました。

本書には、平成 12 年度に実施した楠見遺跡、岩橋Ⅱ遺跡、太田・黒田遺跡、西庄遺跡の発掘調査で得られた貴重な成果を収めています。ここに報告する調査概要が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。

なお、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成 14 年 3 月 31 日

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎

例 言

- 1 本書は、平成12年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は400万円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
楠見遺跡発掘調査	和歌山市大谷285番地	平成12年6月15日～平成12年6月22日	35㎡	藤藪勝則
岩橋Ⅱ遺跡発掘調査	和歌山市岩橋1380-7番地	平成12年8月21日～平成12年8月31日	36㎡	藤藪勝則
太田・黒田遺跡第46次調査	和歌山市太田514-2番地	平成12年11月7日～平成12年12月14日	90㎡	井馬好英
西庄遺跡第2次調査	和歌山市西庄575-6番地	平成12年11月8日～平成12年11月24日	35㎡	藤藪勝則

- 4 発掘調査に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
 文化財室長 榎本 直樹
 文化財班長 小原 保誠
 学芸員 益田 雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 喜多 誠一
 総務室長 藤田 光彦
 事務員 山口 美二（調査庶務担当）
 学芸員 井馬 好英（発掘調査担当）
 学芸員 藤藪 勝則（ ）

- 5 報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
 文化財室長 榎本 直樹
 文化財班長 田中 郁次
 学芸員 益田 雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 喜多 誠一
 総務室長 高野真次郎
 総務室班長 久保 雅英
 事務員 山口 美二（調査庶務担当）
 学芸員 井馬 好英（報告書担当）
 学芸員 藤藪 勝則（ ）
 学芸員 川口 修実（ ）

- 6 本書のうち発掘調査の概要部分については井馬好英はじめそれぞれの調査担当である財団法人和歌山市文化体育振興事業団学芸員が担当した他、「太田・黒田遺跡第46次調査5. 遺物(2)(3)(6)」については同財団学芸員川口修実が分担し、本書の構成については益田雅司が行った。
- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 8 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

楠見遺跡発掘調査

1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	2
3. 既往の調査	4
4. 調査の方法と経過	5
(1) 調査の方法	5
(2) 基本層序	5
5. 遺構	7
(1) 第2遺構面検出の遺構	7
(2) 第1遺構面検出の遺構	8
6. 遺物	8
(1) 初期須恵器・陶質土器	9
(2) 石器	9
7. まとめ	9

岩橋Ⅱ遺跡発掘調査

1. 調査の契機と経過	11
2. 位置と環境	12
3. 調査の方法と経過	14
(1) 調査の方法	14
(2) 調査の概要	14
4. 遺構	15
5. 遺物	16
(1) 土器	16
(2) 金属器	17
6. まとめ	18

太田・黒田遺跡第46次調査

1. 調査の契機と経過	19
2. 位置と環境	20
3. 調査の方法と経過	22
(1) 調査の方法	22
(2) 調査の概要	22
4. 遺構	24
(1) 第4遺構面検出の遺構	24

(2) 第3遺構面検出の遺構	25
(3) 第2遺構面検出の遺構	26
(4) 第1遺構面検出の遺構	29
5. 遺物	30
(1) 弥生時代の土器	30
(2) 古墳時代の土器	34
(3) 奈良～室町時代の土器	37
(4) カマド	38
(5) 土錘	38
(6) 石器	39
(7) 自然遺物	41
6. まとめ	41

西庄遺跡第2次調査

1. 調査の契機と経過	43
2. 位置と環境	44
3. 既往の調査	46
4. 調査の方法と経過	47
(1) 調査の方法	47
(2) 調査の概要	48
5. 遺構	49
(1) 第3遺構面検出の遺構	50
(2) 第1遺構面検出の遺構	52
6. 遺物	53
(1) 古墳時代の土器	53
(2) 鎌倉・室町時代の土器	54
7. まとめ	55
報告書抄録	57

図版目次

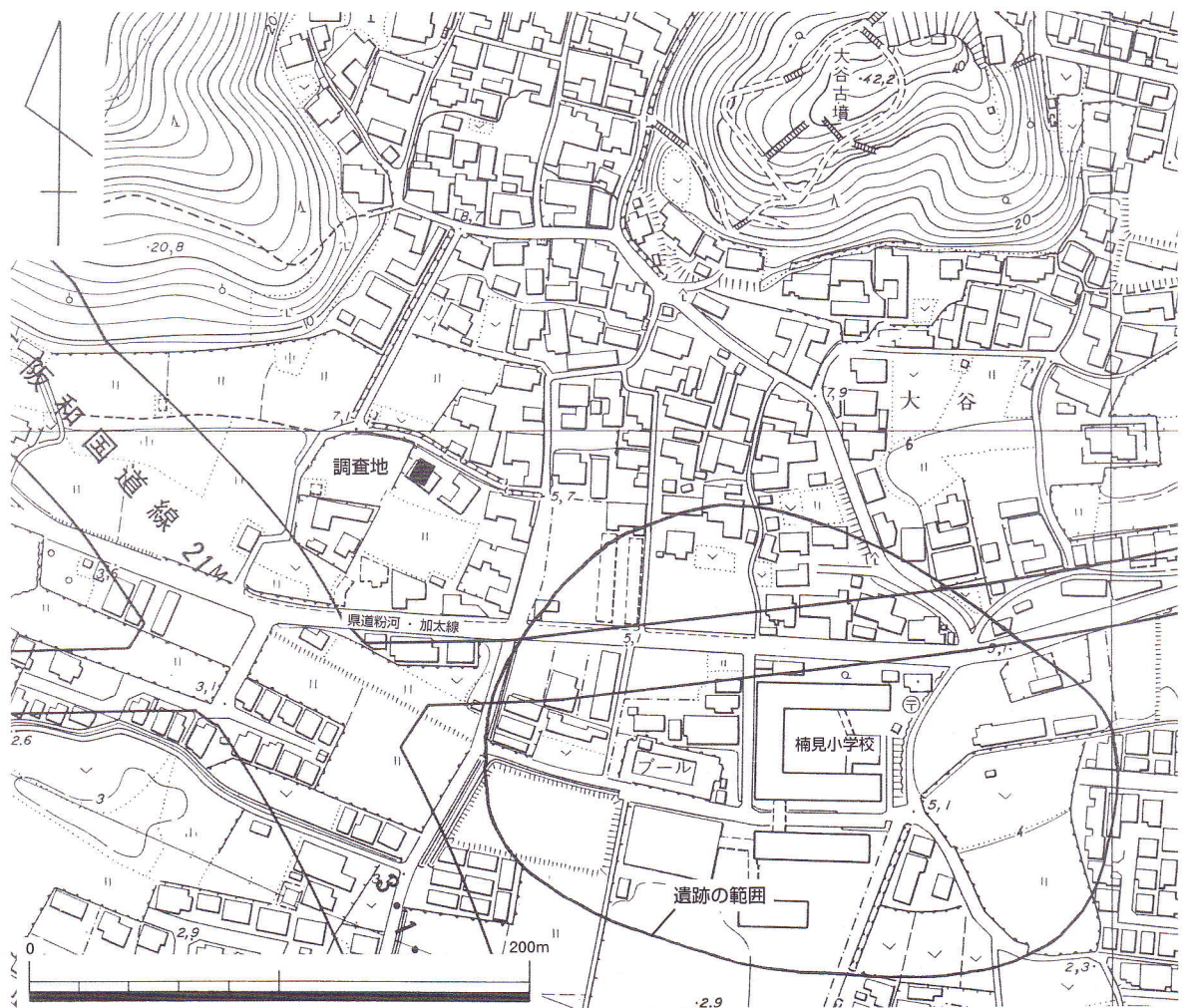
- 図版 1 楠見遺跡遺構 調査地遠景(大谷古墳から)、調査前の状況(南東から)
- 図版 2 楠見遺跡遺構 第2遺構面全景(南から)、第2遺構面全景(北から)
- 図版 3 楠見遺跡遺構 SK-2(北から)、SK-2土層堆積状況(北から)
- 図版 4 楠見遺跡遺構 調査区西壁土層堆積状況(東から)、調査区南壁土層堆積状況(北から)
- 図版 5 楠見遺跡遺物 初期須恵器、陶質土器、石器
- 図版 6 岩橋Ⅱ遺跡遺構 調査地遠景(南東から)、調査前の状況(北東から)
- 図版 7 岩橋Ⅱ遺跡遺構 調査区全景(東から)、調査区全景(西から)
- 図版 8 岩橋Ⅱ遺跡遺構 SX-1・2(北から)、SX-2(北西から)
- 図版 9 岩橋Ⅱ遺跡遺構 調査区北壁土層堆積状況(南から)、調査区南壁土層堆積状況(北から)
- 図版 10 岩橋Ⅱ遺跡遺物 第3層出土土器、第2層出土遺物
- 図版 11 太田・黒田遺跡遺構 調査地近景(北東から)、調査前の状況(南東から)
- 図版 12 太田・黒田遺跡遺構 第2遺構面全景(東から)、第1区第2遺構面全景(東から)
- 図版 13 太田・黒田遺跡遺構 第2区第2遺構面全景(北から)、第3区第2遺構面全景(西から)
- 図版 14 太田・黒田遺跡遺構 SK-23(西から)、SK-25(北東から)
- 図版 15 太田・黒田遺跡遺構 SK-20(南西から)、SK-20土層堆積状況(北西から)
- 図版 16 太田・黒田遺跡遺構 SB-2(南東から)、P-96(東から)
- 図版 17 太田・黒田遺跡遺構 SK-8・15(南西から)、SB-1(北から)
- 図版 18 太田・黒田遺跡遺構 SK-5(西から)、SK-7土層堆積状況(南東から)
- 図版 19 太田・黒田遺跡遺構 第1区北壁 Y=-73934m付近土層堆積状況(南から)、第3区南壁
Y=-73920m付近土層堆積状況(北から)
- 図版 20 太田・黒田遺跡遺物 SK-23・25出土土器
- 図版 21 太田・黒田遺跡遺物 SK-3・15・20・24・P-96出土土器
- 図版 22 太田・黒田遺跡遺物 SK-8出土土器
- 図版 23 太田・黒田遺跡遺物 SK-2・5・7・第2層・第3層出土土器
- 図版 24 太田・黒田遺跡遺物 黒色土器、土師器、中国製磁器、カマド、土錘
- 図版 25 太田・黒田遺跡遺物 石器
- 図版 26 西庄遺跡遺構 調査前の状況(南から)、第1区第3遺構面全景(東から)
- 図版 27 西庄遺跡遺構 第1区第3遺構面全景(西から)、第2区第3遺構面全景(南から)
- 図版 28 西庄遺跡遺構 第1区第1遺構面全景(西から)、第2区第1遺構面全景(北から)
- 図版 29 西庄遺跡遺構 SX-2(北から)、SX-2(南東から)
- 図版 30 西庄遺跡遺構 SX-2西側壁石積状況(北東から)、SX-2遺物出土状況(南から)
- 図版 31 西庄遺跡遺構 SX-1(北から)、SX-1(東から)
- 図版 32 西庄遺跡遺構 第1区北壁土層堆積状況(南から)、第2区西壁土層堆積状況(東から)
- 図版 33 西庄遺跡遺物 SX-2・SK-3出土土器
- 図版 34 西庄遺跡遺物 土師器、瓦器、中国製磁器

楠見遺跡 発掘調査

1. 調査に至る契機と経過

楠見遺跡は和歌山市の北部、現在の紀ノ川河口から約5 kmあまり遡った北岸に位置し、背見山山塊から南流する小河川によって形成された扇状地の中央末端部に立地する(第1図)。本遺跡は楠見小学校を中心として南北約150 m、東西約200 mに広がる遺跡であり、背後の丘陵上には馬冑・馬甲など朝鮮半島との交流を示す遺物が出土した大谷古墳が築造されている。本遺跡は、昭和44(1969)年、和歌山市教育委員会の委託を受けて関西大学考古学研究室が楠見小学校内庭において発掘調査を実施した際、装飾性の強い陶質土器が多量に出土したことから全国的に注目を集めた遺跡である。また近年では、財団法人和歌山県文化財センター(以下、県文化財センター)が県道粉河・加太線の改良工事に伴い楠見小学校の隣接地を調査しており、縄文時代から室町時代にかけての遺構・遺物を検出しているが、遺跡の範囲や性格についてはまだ不明な部分が多いとされている。

今回の調査は、和歌山市大谷285番地に個人住宅が建築されることとなり、この場所が縄文時代から室町時代の複合遺跡として周知されている楠見遺跡(遺跡番号70)の範囲に近接するため、遺跡の範囲確認とその性格を把握する目的で実施することとなった。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山県文化体育振興事業団が同市教育委員会から委託を受けて実施したものである。また、現地調査は平成12年6月15日から6月22日までの約1週間を要した。



第1図 調査地位置図

2. 位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。和歌山市の地形は、紀ノ川の北岸と南岸でその様相が異なる。まず北岸では、和泉山脈と紀ノ川の間に約3kmの幅で段丘及び扇状地が形成されている。また南岸では、紀ノ川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がり、平野の南端を竜門山系から派生したいくつかの丘陵が断続的に取り囲んでいる(第2図)。

今回調査を行った楠見遺跡の周辺には、まず縄文時代の遺跡として府中Ⅲ遺跡や直川遺跡、六十谷遺跡などがあげられる。これらの遺跡は、すべて紀ノ川北岸の河岸段丘及び小規模河川によって形成された扇状地上に営まれたものであり、六十谷遺跡で縄文土器が採集されているほかは、その様相が明らかにされていない。また弥生時代の遺跡については平井遺跡(3)、六十谷遺跡(17)、西辻遺跡(18)などがあげられる。六十谷遺跡からは弥生土器・石庖丁なども採集されており、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡であることが知られている。平井遺跡と西辻遺跡からは、ともに弥生土器が採集されている。楠見遺跡の周辺では古墳時代中期以降、渡来系文化の要素をもつ遺物を出土する遺跡が数多く確認されている。しかしながら、古墳時代の集落跡の確認された例は少なく、その様相もあまり知られていないのが現状である。そのなかで、鳴滝遺跡(15)は大型の掘立柱建物や陶質土器が検出され、紀ノ川を用いた水運の物資集積地としての性格が考えられている。そのほか榎原遺跡(11)、中野遺跡(5)では、土師器・須恵器が採集されている。古墳では、和泉山脈から派生する丘陵上に数多くの古墳が築かれている。古墳時代中期から後期にかけてのものとしては前方後円墳を含む晒山古墳群(12)、古墳時代後期のものとしては雨が谷古墳群(13)、鳴滝古墳群(14)がある。雨が谷古墳群や鳴滝古墳群については、おもに円墳で構成される古墳群である。楠見遺跡周辺において大型の前方後円墳が出現するのは、古墳時代中期以降である。楠見遺跡から西に約3km離れた木之本地区では、古墳時代中期に大型前方後円墳が出現する。車駕之古址古墳(9)はその一例で、造り出しと盾形の周濠をもつ前方後円墳である。墳丘は2段築成で2段目はすでに削平されていたが、造り出し及び周濠の中から淡輪技法をもつ円筒形埴輪や、円形埴輪などの形象埴輪及び墳丘盛土内から金製勾玉が出土した。また楠見遺跡の北約100mには、全長約70mの前方後円墳である大谷古墳(2)が築造されている。大谷古墳からは、朝鮮半島製の馬冑・馬甲が出土しており、供伴した馬具・装飾品とともに渡来系文化を示す貴重な資料である。

紀ノ川北岸の古墳時代以降の遺跡については、奈良・平安時代のものとして石櫃に納められた金銅製蔵骨器が出土した大同寺墳墓(19)や紀伊国府跡と考えられる府中遺跡、その関連施設と考えられる府中Ⅳ遺跡などがある。紀ノ川北岸は律令期以降、推定南海道とされる現県道粉河・加太線沿いに遺跡が多数立地し隆盛をみた地域と言える。奈良・平安時代以降では、当財団が平成10年に発掘調査を行った中野遺跡において、雑賀衆の中野城に関連すると考えられる大溝が検出され、そこから輸入陶磁器・国産陶磁器をはじめ大量に室町時代の遺物が出土した。また、室町時代の砂堆に掘られた井戸が多数検出された木ノ本Ⅲ遺跡(7)などがある。

【参考文献】

和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』考古資料 和歌山県 1983年

和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	橘見遺跡	先土器・古墳	10	茶臼山古墳	古墳	19	大同寺墳墓	奈良	28	津秦遺跡	弥生
2	大谷古墳	古墳	11	榎原遺跡	古墳	20	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	29	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良
3	平井遺跡	弥生～奈良	12	晒山古墳群	古墳	21	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	30	井辺遺跡	弥生
4	高芝遺跡		13	雨が谷古墳群	古墳	22	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	31	神前遺跡	弥生
5	中野遺跡	古墳～中世	14	鳴滝古墳群	古墳	23	秋月遺跡	弥生～平安	32	有本銅鐸出土地	弥生
6	木ノ本Ⅱ遺跡		15	鳴滝遺跡	古墳	24	太田・黒田遺跡	弥生～近世	33	国本遺跡	弥生～古墳
7	木ノ本Ⅲ遺跡	中世	16	有功遺跡	奈良～鎌倉	25	太田城跡	安土・桃山	34	山咲丁遺跡	弥生～古墳
8	釜山古墳	古墳	17	六十谷遺跡	縄文～弥生	26	友田町遺跡	弥生～平安	35	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
9	車駕之古址古墳	古墳	18	西辻遺跡	弥生	27	木広町遺跡	弥生	36	和歌山城跡	近世

第2図 橘見遺跡周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

楠見遺跡の調査は昭和44年、和歌山市立楠見小学校校地内において鉄筋校舎増築の際、鉄筋校舎と木造校舎によって囲まれた内庭を関西大学考古学研究室が発掘調査を実施した(第3図)。その結果、現地地表下約1mで黒色の遺物包含層を確認した。また遺構については、調査区の南側で浅い溝状の落ち込みと、北側において幅約3m、深さ約0.7mの南北方向の溝が検出された。この調査では、黒色土層中から多数の陶質土器が出土した。これらは器形別に分類すると、甕、壺、器台、異形台付鉢などがあり、突帯を多用することや器台の装飾性が強い点から「楠見式土器」の名称が与えられている。



第3図 既往の調査位置図

その後、平成10年度から平成11年度にかけて、県文化財センターが都市計画道路西脇山口線改良工事のため、現県道粉河・加太線の南側において継続的に発掘調査を行っている。平成10年度の調査では、鎌倉時代から室町時代の集落跡が検出された。検出遺構には、縄文時代晩期の土坑数基、縄文時代晩期から弥生時代前期の溝2条、弥生時代前期の土坑1基、鎌倉時代前期の土坑墓2基、木棺墓1基、柱穴多数、屋敷地を区画する溝2条、鎌倉時代後期の井戸1基、大形の土坑3基、柱穴多数、屋敷地を区画する溝1条、室町時代前期の石組溜め枿・大形の土坑数基などがある。この調査では、弥生時代中期から平安時代の遺構は見つかっておらず、昭和44年に行われた調査で検出した古墳時代の遺構は確認できなかった。また、出土遺物についても鎌倉時代前期から室町時代前期のものが大半をしめる状況である。

県文化財センターの実施した平成11年度の調査では、前年度に検出した鎌倉時代から室町時代の集落の東側を調査するもので、自然流路の痕跡が検出され集落の東端の様相が明らかとなった。

以上、関西大学考古学研究室と県文化財センターが行った3次の調査では、全く様相の異なる遺構が検出され、楠見遺跡の性格についてはいまだ明らかにされていないと言える。また、昭和44年の調査において検出された遺構・遺物が特別な在り方を示すものとも考えられている。

【参考文献】

蘭田香融『和歌山市における古墳文化』和歌山市教育委員会 1972年

『楠見遺跡の発掘調査現地説明会資料』（財）和歌山県文化財センター 2000年

4. 調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査地は、両側を丘陵に挟まれた谷部の扇状地端に位置するため、谷筋に平行する東西5m、南北7mの調査区を設定した。また、調査地の現況が宅地であるため、上層に堆積した整地土及び旧耕作土(第1層)、旧床土(第2層)、江戸時代の遺物包含層(第3層)の一部を重機によって掘削し、第3層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。遺物の取り上げについては、調査区北端から南へ3.5mの位置に調査区を南北に2等分するラインを設定し、そのラインの北と南で取り分けた。また土坑などの遺構掘削については、土層観察用のベルトを直行するライン上に設け、写真撮影後、2層以上の堆積が認められる場合には実測図等の記録保存を行った。

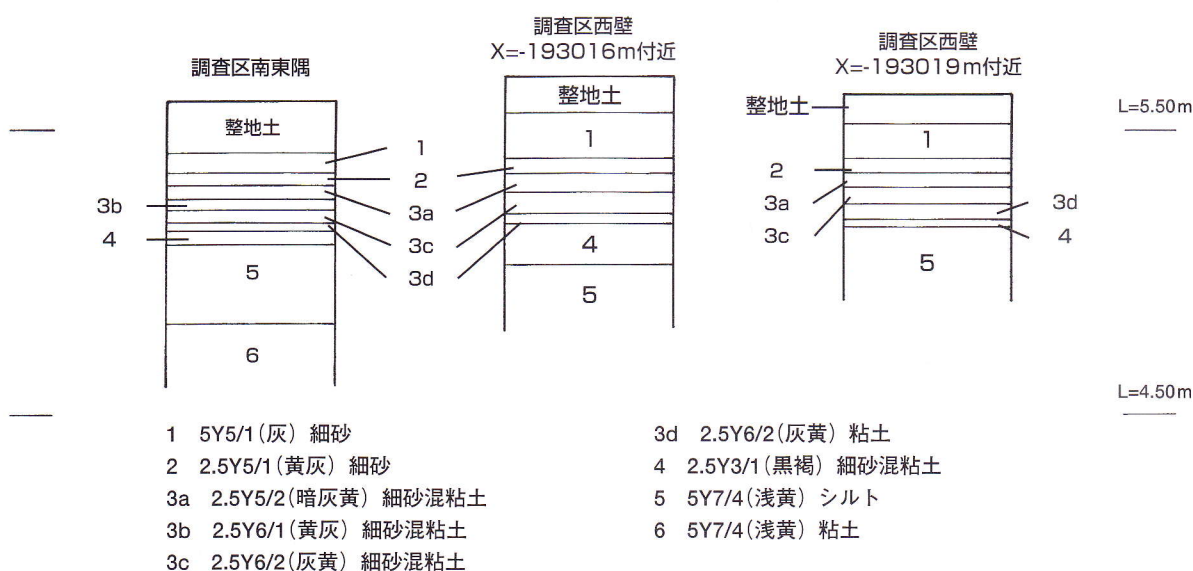
図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準に1/20の縮尺を用い手実測で行った。また、壁面土層断面図や主要な遺構の土層堆積状況図についても、同じ縮尺を用い手実測で行った。土層の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。さらに、遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

（2）調査の概要

調査区の基本層序については、第4図に示したとおりである。まず、調査地の現況が宅地であるため、調査区の全面には宅地造成に伴う整地土が10～15cmの厚さで堆積している。この整地層下については、

旧耕作土である灰色の細砂(第1層)が5～10cmの厚さで堆積しており、第1層下には、旧床土である黄灰色の細砂(第2層)が5～10cmの厚さでみられた。この第2層上位には鉄分の沈着がみられる。第3層については、黄灰色の細砂混粘土の堆積が主体となるが、鉄分の沈着面及び土質の変化から4単位に分けられる。第3a層は暗灰黄色の細砂混粘土で、厚さ約5cmを測る。第3b層は黄灰色の細砂混粘土で、厚さ約4cmを測る。この第3b層は、調査区の南端のみにみられた。第3c層は、灰黄色の細砂混粘土で厚さ約6cmを測る。また第3d層は、灰黄色の粘土であり、厚さ約5cmを測るものである。以上、3a～3d層はそれぞれ3～6cmと薄く、赤褐色の鉄分の沈着面によって分層されることや、包含されている遺物に肥前系磁器染付がみられることから、江戸時代の水田耕作に伴う遺物包含層と判断した。第3層下については、黒褐色の細砂混粘土で古墳時代の土師器・初期須恵器を多数含む遺物包含層(第4層)が堆積している。この第4層は、厚さ5～20cmを測るもので調査区の南半部のみに堆積している。さらにこの包含層下は、浅黄色のシルト(第5層)が調査区全体においてみられ、また第5層下には同じく浅黄色の粘土(第6層)が堆積している。これらはともに遺物を含まない無遺物層で、自然堆積によるものと考えられる。

遺構検出面については、第5層上面(第2遺構面)と第4層上面(第1遺構面)の2面を確認した。第5層上面では古墳時代の遺構を、第4層上面では古墳時代と江戸時代とみられる遺構を検出した。第5層上面の標高は、調査区北端部分においては約5.1m、南端部分においては約5mを測り、北から南にかけて次第に低くなる。



第4図 調査地土層柱状模式図

5. 遺構

遺構は、第5層上面において遺構検出を行った結果、P-1～3、SK-2を検出した。これらは古墳時代中期前半のものである。第4層上面ではSK-1、SD-1・2を検出した。SK-1は古墳時代中期中頃のものであり、SD-1・2については、土層観察から江戸時代のものと考えられる。以下、古い時期のものから各遺構検出面ごとに主要な遺構を説明する(第5図)。

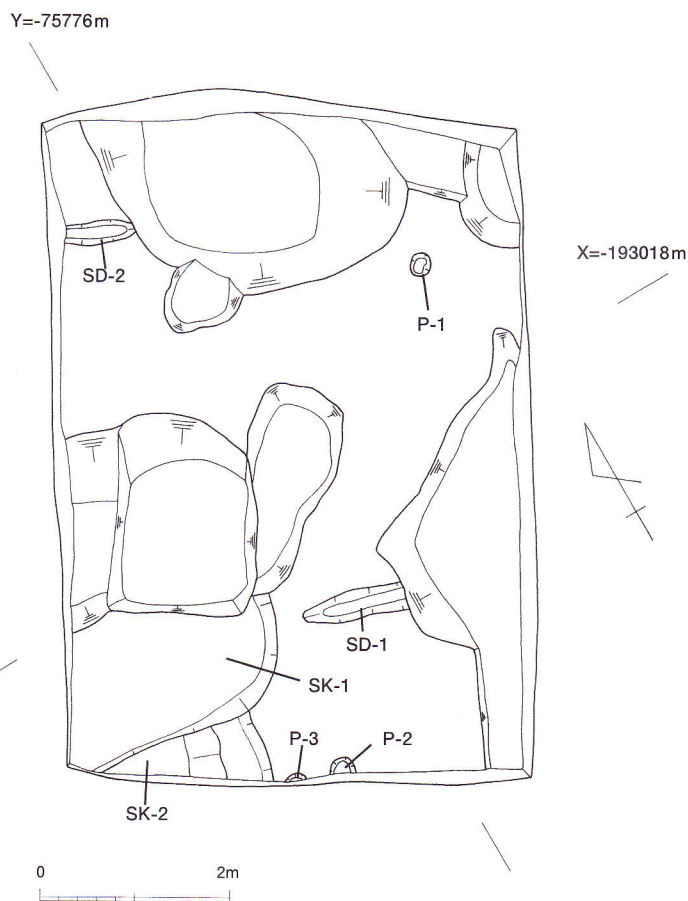
(1) 第2遺構面検出の遺構

[SK-2] (第6図、図版3)

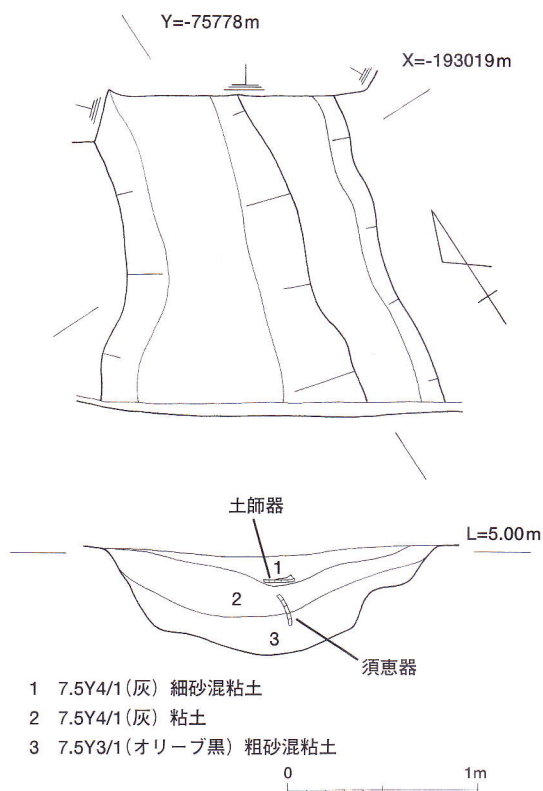
SK-2は、調査区の南西隅において検出したもので、検出時は土坑として認識したが掘削した結果、溝になるものと考えられる。規模は検出長1.8m、幅1.4～1.8m、深さは最深部で約50cmを測る。覆土は、第1層が灰色の細砂混粘土、第2層が灰色の粘土、第3層がオリーブ黒色の粘土の3単位に分けられ、レンズ状の堆積がみられる。各層には、古墳時代中期前半の土師器・初期須恵器が含まれていた。

[P-1～3]

P-1は調査区の北東部、P-2・3は南端部において検出したもので、それぞれ径約20cm、深さ10～20cmを測るものである。覆土は、黒褐色の細砂混シルトである。時期については、覆土の土色・土質が、SK-2の覆土と類似することなどから判断して古墳時代のものと考えられる。



第5図 遺構全体平面図



第6図 SK-2 遺構平面図及び土層断面図

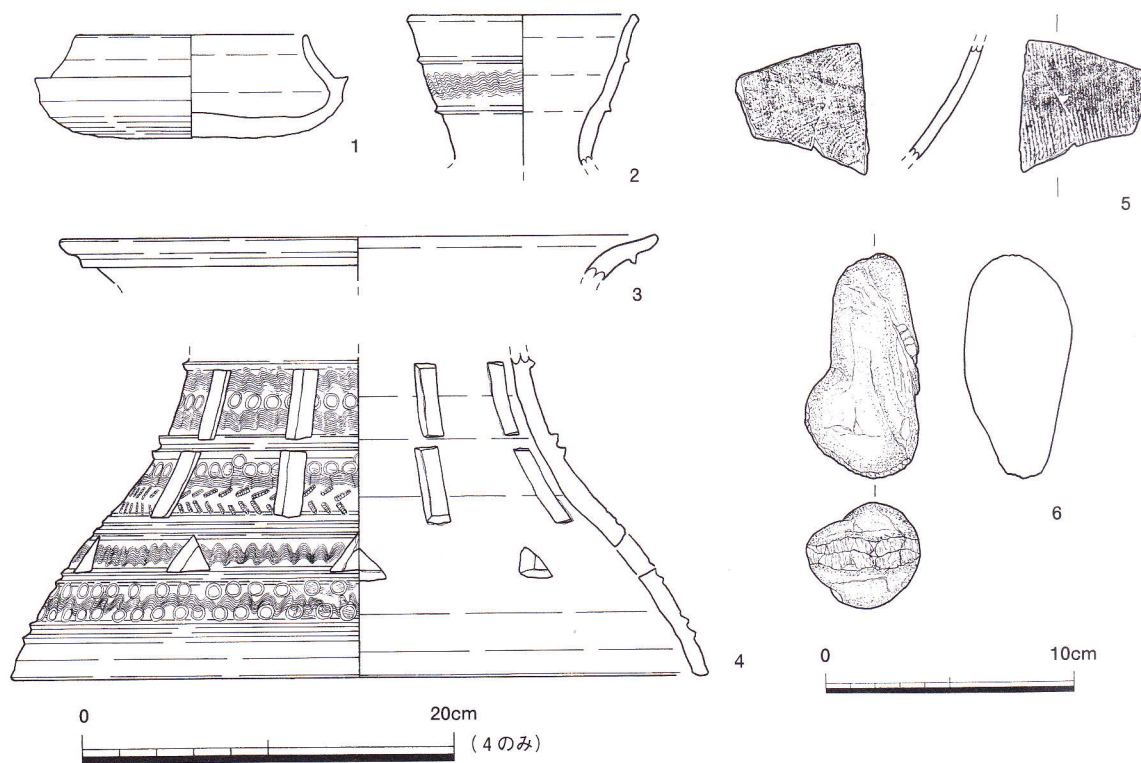
- 1 7.5Y4/1(灰) 細砂混粘土
- 2 7.5Y4/1(灰) 粘土
- 3 7.5Y3/1(オリーブ黒) 粗砂混粘土

[SK-1]

[SD- 1 · 2]

SD-1・2は、ともに同じ方向性をもつ小溝で、SD-1は検出長約1.1m、幅約30cm、深さ約5cm、SD-2は検出長約0.8m、幅約30cm、深さ約5cmを測る。覆土は、SD-1・2ともに暗灰黄色の細砂混シルトである。遺物が出土していないため時期については不明であるが、第3層掘削後に検出したものであること、また、覆土の土色・土質が第3層と類似することなどから判断して江戸時代のものである可能性がある。

遺物は、土師器、初期須恵器、陶質土器、国産陶器・磁器、石器などがある。これらの遺物は、主に江戸時代の水田耕土と考えられる第3a～3b層や、古墳時代の遺物包含層である第4層、またSK-2などの古墳時代の遺構から出土したものである。これらの時期は、古墳時代中期前半と江戸時代のものである。以上の遺物は、総数コンテナ2箱を数える。以下、主要な遺物について説明する。



第7図 遺物実測図 1

(1) 初期須恵器・陶質土器 (第7図1～5、図版5)

1～4は初期須恵器である。1は杯身で、口径9.2cm、器高4.1cmを測る。口径に比べ器高が低いもので、受け部は斜め上方へのび、口縁部は内傾する。外面の調整は、受け部付近にヨコナデが施されるほかはすべて回転ヘラケズリによって仕上げられ、内面には全面にヨコナデが施される。色調は明灰色で、胎土には長石・黒色粒を含む。2は、直口壺である。口径9.3cm、器高5.9cmを測る。ほぼ直線的にのびる口縁部に2条の突帯をもつもので、突帯間には11本を一単位とする波状文が施される。内外面の調整にはヨコナデが施され、内面には自然釉の付着がみられる。色調は明灰色から淡灰色を呈し、胎土は精良で僅かに砂粒の混入がみられる程度である。3は甕の口縁部と考えられ、口径24.0cmを測る。口縁部直下に1条の突帯をもつもので、端部は丸くおさめる。色調は暗灰褐色で、断面は暗赤褐色を呈する。4は器台の脚部である。脚部径37.8cm、残存高17.3cmを測る。外面には突帯と凹線・沈線によって区画さらた文様帯が4帯みられ、それぞれ下から波状文と竹管文、波状文のみ、波状文と竹管文及び刺突文、波状文と竹管文という組み合わせとなっている。文様を施す順序は、最初に波状文が施され、その後竹管文及び刺突文が施される。また文様がすべて施された後に、突帯間に三角形と長方形のスカシがそれぞれ8方向に穿たれている。調整は、内外面にヨコナデが施される。色調は淡灰色から暗灰色で、断面は暗赤褐色を呈する。以上1～4の時期は、TK-73型式に併行するものと考えられ、5世紀前半のものとみられる。5は陶質土器の甕になると考えられる。外面に縄蓆文、内面に幅の狭い当て具痕がみられる。色調は淡褐色を呈し、焼成は須恵質である。

これらの遺物は、1がSK-1、2・3・5が第4層、4がSK-2から出土した。

(2) 石器 (第7図6、図版5)

6は砂岩を用いた叩石である。全長8.0cm、最大幅4.3cmを測り、重さ220gである。長軸の両端部に敲打痕がみられるもので、その他の部分には使用痕は観察できなかった。この叩石は、SK-1から出土した。

7. まとめ

今回の調査では、遺構については江戸時代の溝以外はすべて古墳時代の土坑・ピットであり、遺物についても古墳時代のものが主体をしめる。県文化財センターが調査を行った楠見小学校周辺部の調査では、縄文時代晩期から弥生時代前期の溝や弥生時代前期の土坑、鎌倉時代前期の土坑墓や木棺墓、鎌倉時代後期の井戸や土坑、室町時代の石組溜め枿や土坑など、縄文時代から中世にかけての遺構、遺物が検出されている。今回調査を行った地点は楠見遺跡の西側範囲外の近接地にあたるが、調査で確認した遺構はおもに古墳時代の遺構であり、遺跡範囲内における調査地点ごとで遺構の時期や密集度にばらつきが認められると言える。また今回の調査で検出した古墳時代中期前半の初期須恵器や土師器、陶質土器を含む黒褐色土(第4層)は、昭和44年の関西大学考古学研究室の調査や、近年継続的に行われている県文化財センターの調査でも類似した遺物包含層が確認され

ている。よって、遺跡の広がりには現在の遺跡範囲よりもさらに北西に広がり、大谷地区の集落が立地する扇状地の先端部に遺跡範囲がのびる可能性がある。また今回検出した SK-2は、その埋没状況から溝になる可能性があり、さらに南に調査区外へと続くことから今後の調査でその性格が明らかになるものと考えられる。

今回出土した初期須恵器については、昭和44年に出土したものと比較すると焼成が良く胎土が精選されていることから、搬入された陶質土器というよりはむしろ国内で生産された須恵器と考えられる。特に、器台については外面の装飾文様に竹管文を施しており、これは鳴滝遺跡出土の須恵器器台と類似するもので、また装飾性が強いことから昭和44年に提唱された「楠見式土器」の影響を受けたものと考えられる。

以上のように今回の調査では、主に古墳時代の遺構・遺物を検出し、楠見遺跡の遺跡範囲についてさらに北西に広がりをもつことが明確となった。また、同遺跡の古墳時代中期前半の性格についても僅かではあるがその検討資料を提供できたものと考えられる。

【参考文献】

蘭田香融『和歌山市における古墳文化』 和歌山市教育委員会 1972年

『楠見遺跡の発掘調査現地説明会資料』（財）和歌山県文化財センター 2000年

岩橋Ⅱ遺跡 発掘調査

1. 調査に至る契機と経過

岩橋Ⅱ遺跡は、和歌山市の東部、龍門山系より西に派生する岩橋丘陵の北裾部に位置し、北西に花山丘陵を望む北東に開けた微高地上に立地する(第1図)。本遺跡は、東西約500m、南北約300mの範囲に広がり、古墳時代から室町時代の遺物が散布する状況から、当該時期の遺構が存在する遺跡と考えられてきた。

今回の調査地は、遺跡範囲の南端に位置し、すぐ背後に岩橋丘陵を望むことができる。よって岩橋千塚古墳群と本遺跡の関連について注目されるところであるが、現在までそれを示すような遺物は出土していない。また遺跡の西約1kmには、平成8年に当財団が調査した岩橋Ⅲ遺跡がある。この岩橋Ⅲ遺跡は、岩橋丘陵と花山丘陵の鞍部に立地するもので、平安時代のピット・土坑・溝、奈良時代から江戸時代の遺物などが出土している。

今回の調査は、和歌山市岩橋1380-7番地に個人住宅が建築されることになり、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載され、古墳時代から室町時代の遺物散布地として周知されている岩橋Ⅱ遺跡(遺跡番号381)の範囲内に位置するため、遺跡の範囲確認とその性格を把握する目的で実施することになった。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同市教育委員会から委託を受けて行った。また現地における調査の期間は、平成12年8月21日から同年8月31日までの約10日間を要した。



第1図 調査地位置図

2. 位置と環境

岩橋Ⅱ遺跡周辺の遺跡を概観すると、岩橋丘陵の西側に広がる平野部において、弥生時代後期末から古墳時代にかけての集落遺跡が数多く立地している(第2図)。まず縄文時代の遺跡としては、西約1.5kmに所在する鳴神貝塚(18)がある。この貝塚は、国の史跡に指定されているもので、縄文時代中期から晩期にかけての土器が多数発見されており、晩期の土器に伴って弥生時代前期の土器が出土していることは縄文時代から弥生時代への土器変遷を考える上でも注目される遺跡である。またこの貝塚が、現在の海岸線から約7kmほど内陸にはいったところに立地していることから、縄文時代晩期の海岸線を復原する上で貴重な遺跡であると考えられている。

弥生時代には遺跡の数が大幅に増し、平野部に集落が営まれるようになる。弥生時代前期の集落としては、太田・黒田遺跡(24)があげられる。この遺跡は、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模の集落跡で、竪穴住居や土坑及び井戸などの遺構、銅鐸や多量の壺・甕などの弥生土器、石器が検出されている。また平成11年に当財団が発掘調査を実施した秋月遺跡(23)では、遺跡の南東を北東から南西方向に流れる弥生時代前期の幅9m以上の旧河川を検出した。よって、この鳴神・秋月遺跡周辺は、小河川や自然堤防が複雑にいくつんだ地形を呈していたものと考えられる。このほか、井辺Ⅰ・Ⅱ遺跡(11・12)は、弥生時代末から古墳時代にかけてのもので土器列・井戸などが検出された。

古墳時代においても、引き続き平野部に集落が展開する。古墳時代の集落としては、多数の方形プランをもつ竪穴住居や土坑及び溝が検出された鳴神遺跡群がある。平成6年に当財団が調査した鳴神Ⅴ遺跡(20)では、古墳時代前期から後期の方墳7基が検出され、微高地上に展開する集落の墓域の一端が明らかにされた。また秋月遺跡では、埋没した古墳時代前期の前方後円墳が検出され、さらに庄内式から布留式併行期の土器が多数出土し、今後の古式土器編年の基準資料となろう。奈良時代から平安時代にかけては、鳴神Ⅴ遺跡において掘立柱建物、円面硯や緑釉・灰釉陶器などが検出され官衙的な施設が存在した可能性が指摘されている。

以上、平野部における遺跡をみてきたが、岩橋Ⅱ遺跡の近隣では、主に古墳が主体となって立地している。遺跡の北西約1kmの花山丘陵には、4世紀後半～6世紀にかけての大型前方後円墳を中心とした花山古墳群(15)が、また南にせまる岩橋丘陵には、天王塚・將軍塚・知事塚・郡長塚などの大型前方後円墳を中心に方墳・円墳が多数分布する岩橋千塚古墳群(2)が立地する。岩橋千塚古墳群は、結晶片岩を用いたいわゆる「岩橋型石室」を採用していることで特徴づけられる古墳群であり、築造時期については、5世紀中頃～7世紀にかけての長期にわたり造墓活動がみられるものである。また、出土した力士形埴輪や双脚輪状文形埴輪に代表される多種多様な形象埴輪群は、他地域に例を見ないものである。さらに岩橋丘陵と花山丘陵の鞍部に立地する岩橋Ⅲ遺跡は、平成8年に当財団が発掘調査を行った遺跡であり、平安時代のピット・土坑・溝、奈良時代から江戸時代までの遺物が検出されている。

【参考文献】

- 和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』考古資料 和歌山県 1983年
和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	岩橋Ⅱ遺跡		12	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳	23	秋月遺跡	弥生～平安	34	北田井遺跡	弥生～古墳
2	岩橋千塚古墳群	古墳	13	大谷山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	24	太田・黒田遺跡	弥生～近世	35	宇田森遺跡	弥生
3	山東古墳群	古墳	14	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	25	太田城跡	中世	36	上野古墳群	古墳
4	寺内古墳群	古墳	15	花山古墳群	古墳	26	有本銅鐸出土地	弥生	37	藤田遺跡	弥生
5	井辺前山古墳群	古墳	16	岩橋Ⅲ遺跡		27	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	38	山口古墳群	古墳
6	神前遺跡	弥生	17	音浦遺跡	古墳	28	北山古墳群	古墳	39	山口遺跡	弥生～平安
7	和田古墳群	古墳	18	鳴神貝塚	縄文～弥生	29	直川八幡山古墳群	古墳	40	川辺遺跡	縄文～中世
8	井辺遺跡	弥生	19	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	30	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	41	城ヶ峰城跡	中世
9	津秦遺跡	弥生	20	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	31	田屋遺跡	弥生～古墳	42	塩谷古墳群	古墳
10	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良	21	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	32	府中遺跡	奈良	43	河南中学校北方遺跡	
11	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳	22	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	33	西田井遺跡	弥生～中世	44	和佐中遺跡	

第2図 岩橋Ⅱ遺跡周辺の遺跡分布図

3. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

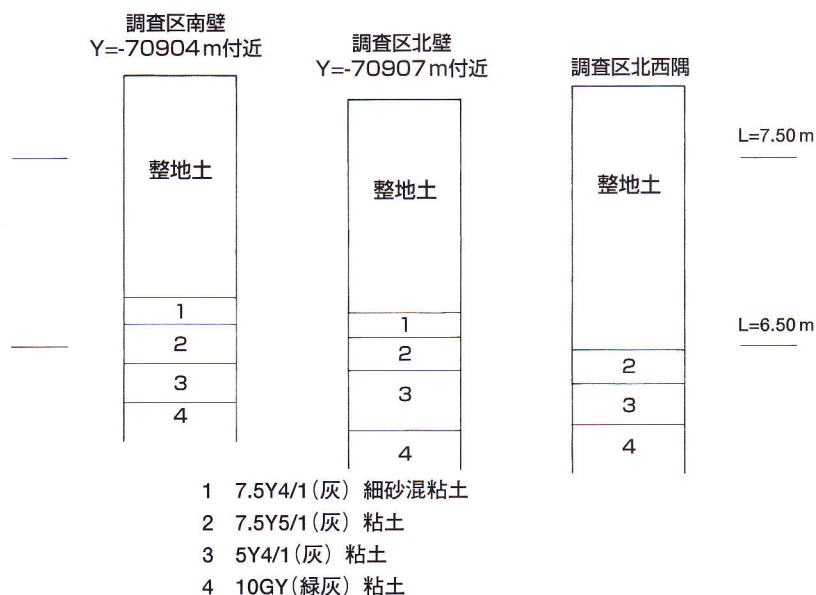
調査地の現況は、造成された宅地である（図版6下）。現地表の標高が約8 mを測り、周辺の水田面の標高が約7 mであることから判断して、宅地造成に伴い盛土を1 m以上行っていることが予想された。よって、土置場等を考慮に入れ、住宅建築範囲内に東西9 m、南北4 mの調査区を設定した。

重機による掘削は、上層に堆積した整地土、及び旧耕作土(第1層)の一部までとし、第1層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。遺物の取り上げについては、調査区東端から西へ4.5 mの位置に調査区を東西に2等分するラインを設定し、そのラインの東と西で取り分けた。石敷き遺構については、ホリカタの有無等を確認し、写真撮影後、1/10の縮尺で平面図及び断面図等の記録保存を行った。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準に1/20の縮尺を用い手実測で行った。また、壁面土層断面図についても、同じ縮尺を用い手実測で行った。土層の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。さらに遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

(2) 調査の概要

調査区の基本層序については、第3図に示したとおりである。まず、調査地の現況が宅地であるため、調査区の全面には宅地造成に伴う整地土が1.1～1.5 mの厚さで堆積している。この整地層下については、現代の耕作土である灰色の細砂混粘土(第1層)が10～15 cmの厚さでみられ、さらに第1層下には、江戸時代の遺物包含層である灰色の粘土(第2層)が15～25 cmの厚さで堆積している。この第2層には、肥前系陶器・磁器、瀬戸美濃系陶器などが含まれ、また褐色の鉄分の沈着がみられ



第3図 調査地土層柱状模式図

ることから、江戸時代の水田耕土と考えられる。第3層は、暗灰色の粘土で厚さ15～30cmを測る。包含されている遺物には、瓦器・中国製青磁などが含まれていることから、室町時代の水田耕土と判断した。第3層下については、緑灰色の粘土(第4層)が堆積しており、調査区南西隅において確認した結果、深さ30cm以上を測る。この第4層は、遺物を全く含まない無遺物層であることから自然堆積によるものと考えられる。

遺構については、第3層上面において石列2条を検出した。第3層上面の遺構検出面の標高は、調査区東端部分においては約5.4m、西端部分においては約5.3mを測り、東から西にかけて次第に低くなる。また、調査区南面の土層堆積状況の観察では、第4層の堆積は南から北にかけて約10cmほどの傾斜をもつことから、旧地形も南東から北西に傾斜するものであったと考えられる。

4. 遺構

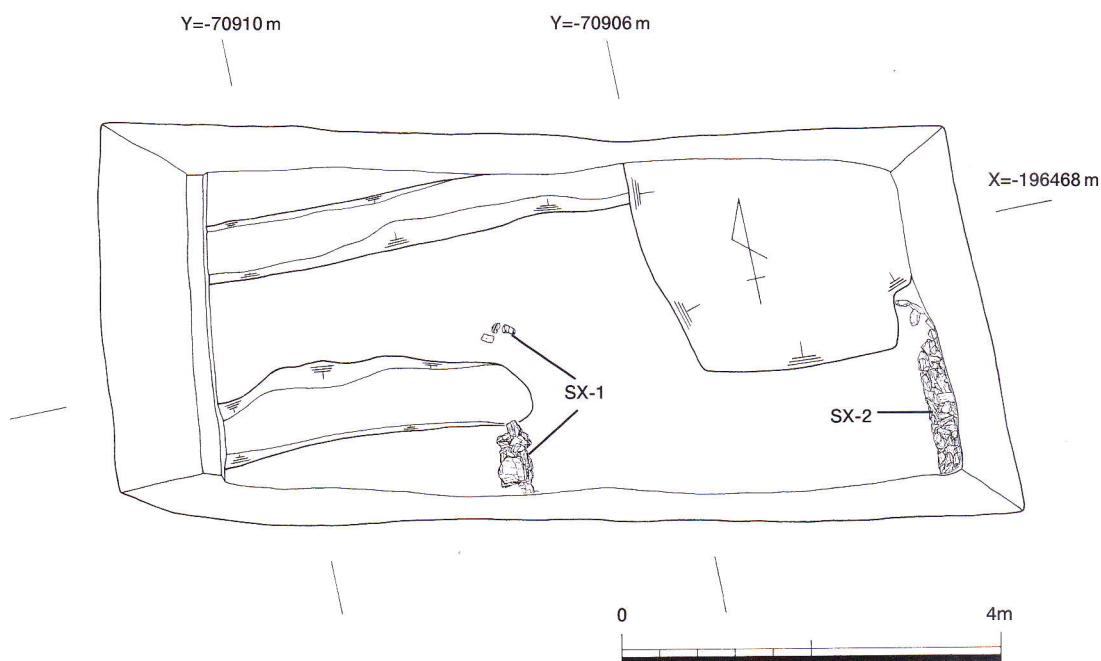
遺構は、第2層除去後の第3層上面において遺構検出を行った結果、調査区東壁際及び調査区のほぼ中央でともに平行する2条の石敷き遺構を検出した(第4図、図版8上)。

[SX-1]

SX-1は、調査区の中央部において検出したもので、後世の攪乱により北半分を欠失するが、検出長は1.8m、幅約35cmを測り、またN-5°-Eの方向性をもつ。使用されている石材は、長さ10～20cm、幅約19cm、厚さ3～5cmの結晶片岩で、その構造は、扁平な石を2～3段ほど積み上げるもので、上部には25cm大の石もみられた。

[SX-2](第5図、図版8下)

SX-2は、調査区東壁際において検出したもので、検出長1.8mを測る。これも後世の攪乱により



第4図 遺構全体平面図

北半分を欠失しており、東端については調査区外へと続くため検出できなかったが、SX-1との比較から復原すると幅約35cm前後を測るものであろう。またその方向性は、 $N-2^{\circ}-E$ である。使用されている石材は、長さ10~20cm、幅約10cm、厚さ3~5cmの結晶片岩である。SX-1と同様2~3段ほど無造作に積み上げたものであるが、西面は直線的に構築されている。

これら SX-1・2の間隔は、それぞれの中軸線で計測した結果4.3mを測る。またその時期については、第2層上面での遺構検出時にホリカタ等を確認できなかったこと、第3層直上から積み上げられていることから判断して、室町時代後期から江戸時代までの間と考えられる。

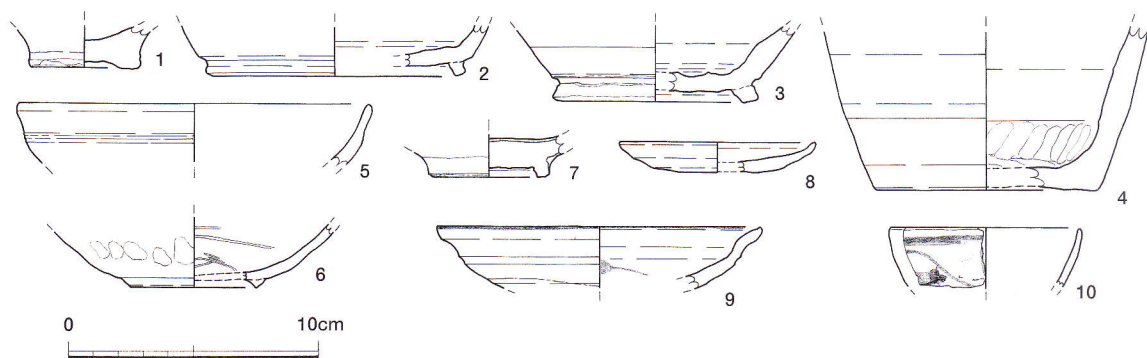
5. 遺物

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、木製品、金属製品などがある。これらの遺物は主に室町時代の水田耕土と考えられる第3層や、同じく江戸時代の水田耕土と考えられる第2層から出土した。以上の遺物は、総数コンテナ3箱を数える。以下、主要な遺物について説明する。

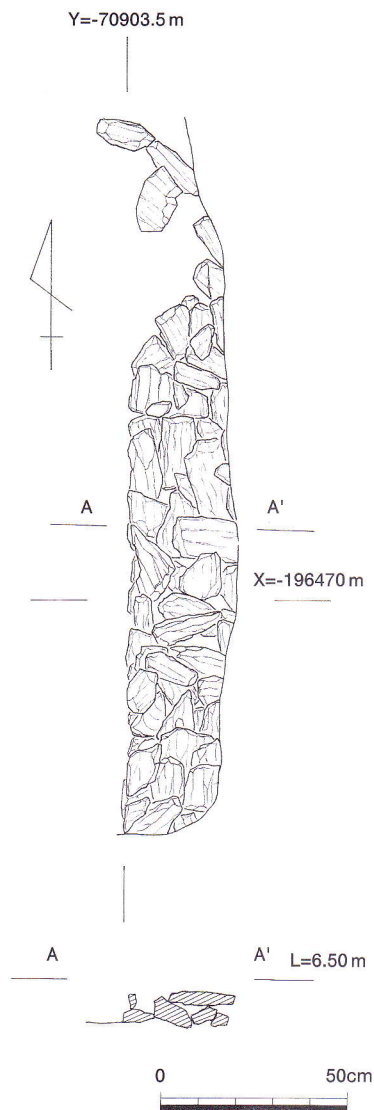
(1) 土器(第6図、図版10)

1は弥生土器で、甕か鉢の底部とみられ、底径は4.4cmを測る。第5図 SX-2道構平面図及び断面図底面はやや上げ底状を呈する。底部内面には、クモの巣状のハケメが施される。色調は淡褐色で、胎土には結晶片岩・赤色軟質粒を含む。

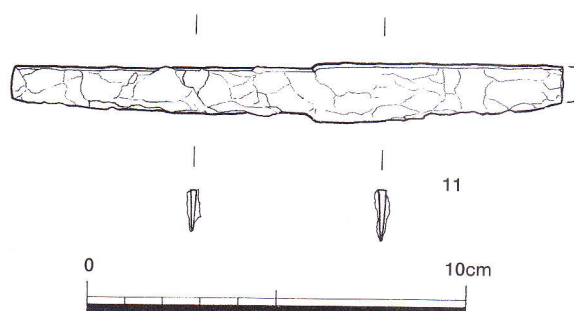
2~4は須恵器である。2は杯身で、高台径10.4cmを測る。高台脇から鋭く屈曲して立ち上がる体部をもつものと考えられ、高台は外側に張り出す逆台形の貼付高台である。色調は灰褐色を呈し、



第6図 遺物実測図1



焼成はやや軟質焼成である。8世紀末～9世紀初頭のものであろう。3・4は壺の底部である。3は、高台径8.2cmを測る。高台脇からやや斜め方向にのびる体部をもつもので、高台は、2と同様外側に張り出す逆台形の貼付高台である。外面の調整は、底端部から上に約2cmまでをヘラケズリによって成形し、体部上半にはナデ調整を施す。また高台脇付近



第7図 遺物実測図2

は、高台を貼り付けた後にナデ調整が丁寧に施され、高台裏面はヘラ切りの後ナデ調整が施される。内面の調整については、外面と同様にヨコナデがみられる。色調は明灰色を呈する。4は、底径9.0cmを測り、平らな底部から鋭く屈曲する体部をもつものである。外面の調整は、底部端から上に約3cmまでをヘラケズリによって成形し、その後体部下半から上半にかけてヨコナデを施す。また内面は、底部と体部の境に指押さえ及びヨコナデが施され、内底面には自然釉が付着している。色調は内外面ともに明灰色を呈し、断面は赤褐色である。これら3・4は、9世紀中頃のものと考えられる。

5は、黒色土器B類の碗である。口径14.0cmを測る。口縁部は緩やかに内彎しながら立ち上がるもので、強いナデ調整が施される。色調は、内外面ともに黒褐色を呈する。

6は瓦器の碗で、高台径は5.0cmを測る。高台は逆三角形の貼付高台で、内面には不明瞭ながら暗文がみられる。13世紀中頃のものと考えられる。

7は、龍泉窯系青磁の碗で、高台径は4.8cmを測る。釉厚は1～2mmを測り、高台裏面には施釉しない。15世紀後半のものと考えられる。

8は土師器皿で、口径7.9cmを測る。口縁端部をやや内側に屈曲させるものである。色調は暗褐色を呈し、胎土には結晶片岩を含む。

9・10は、肥前系陶磁器である。9は、鉄絵がみられる唐津の皿である。口径は13.0cmを測り、口縁部を「く」の字状に屈曲させるもので、端部はやや上方につまみ上げている。口縁端部及び見込み部分には、黒褐色の釉で文様が描かれ、内面及び外面体部上半には藁灰釉が施される。また外面体部下半はヘラケズリがみられ、露胎である。17世紀中頃のものと考えられる。10は、肥前系磁器染付の小碗で、口径8.0cmを測る。ゆるやかに内彎しながら立ち上がる口縁部をもち、外面には呉須で草花文が描かれるものである。18世紀代のものと考えられる。

以上の遺物は、1～5・7が第3層から、6・8～10が第2層から出土した。

(2) 金属器(第7図、図版10)

11は、鉄製の刀子である。鋒部分を欠くが、残存長14.5cm、残存幅は最大1.5cm、柄部は長さ8.0cm、背部の厚さは2mmを測る。全体に錆による腐食がみられ、釘穴などは確認できなかった。出土位置は、第3層である。

6. まとめ

今回の調査では、遺構については室町時代後期から江戸時代中期の間に位置づけられる石敷き状遺構2条を確認することができた。これらの性格については、調査地周辺は室町時代後期以降、水田として利用されていた可能性があり、SX-1の蓋石状の板石やその無造作な敷き詰め方から判断して、溝状遺構に拳石大の結晶片岩を充填した暗渠排水施設である可能性が高い。しかしながら、ホリカタが確認できなかったことに若干の疑問が残る。また、その方向性について条里制土地区画との関係を考えてみると、調査地が所在する下和佐集落一帯は広義の河南条里のなかに含まれ、宮井用水の方向性が条里制土地区画の方向性を踏襲している可能性があると認識されている。しかしながら、宮井用水を東西の方向性として条里方向を復原すると、その方向性は真北からやや西に傾くのに対し、今回検出した石列は、SX-1がN-5°-E、SX-2がN-2°-Eを示すように東に傾くことから、条里制土地区画とかかわるものとはやや考えにくく、どちらかと言えば現行の地割に沿ったものである。よって、今回検出したSX-1・2は、室町時代後期以降の水田開発に伴う土地区画の方向性を示す遺構と理解したい。また現在の地割はその方向性を踏襲しているものと考えられる。

遺物については、弥生時代から江戸時代にかけての各時代の遺物が出土した。よって、室町時代に水田開発される以前は、調査地周辺にこれら各時代の集落が存在していた可能性がある。また、第2層からは10~15cm大の砂岩の河原石が多数出土した。本来、調査地周辺に存在しないものであることから、持ち込まれたものと考えられ注目される。以上のように今回の調査では、室町時代後期以降の水田開発に伴う土地区画の方向性を示す石列と、室町時代以前の遺構の存在を示唆する遺物が出土した。今後、調査地周辺で集落遺跡の調査が進めば、比較検討の資料として今回の調査が役立つものと考えられる。

【参考文献】

和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻 1993年

『和歌山市埋蔵文化財年報5—平成7(1995)年度—』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1998年

太田・黒田遺跡 第46次調査

1. 調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市太田514-2番地他において個人住宅が建築されることになり、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡(遺跡番号327)及び太田城跡(遺跡番号356)の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が届け出を行い、この工事に先立つ遺跡確認のための発掘調査を行うこととなった。この調査は、同市教育委員会が国庫補助金を得て実施したもので、同市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて行った。

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野ほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点であり、数多くの遺跡が分布する地域に所在する。この遺跡ではこれまで45次にわたる発掘調査が行われ、竪穴住居や井戸などの遺構、銅鐸や多量の弥生土器などの遺物が発見されており、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模をほこる集落跡であることが知られている。また、弥生時代以外では古墳時代から江戸時代にかけての遺構、遺物が多数出土し、羽柴秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地が重複するなど、複合遺跡としても周知されている。

今回の調査地は、太田・黒田遺跡中央部のやや南側、太田城跡のほぼ中央部に位置し、弥生時代前期の2条の環濠を検出した第45次調査地の北東側隣接地にあたる(第1図)。この第45次調査で検出した環濠は、1995年に調査を行った第26次調査で検出した大溝の延長部であることが判明し、この弥生時代前期環濠が前期集落の西側を取りまくものと考えられた。このことから、当調査地は前期環濠集落の内側に位置し、弥生時代前期の遺構・遺物が検出されるものと推定された。

現地における調査は、平成12年11月7日に機械掘削を行い、翌日から人力による掘削を開始した。部分的に検出した第1遺構面の写真撮影を11月16日に、第2遺構面の全景写真撮影を11月29日に、また部分的に検出した第3・4遺構面の写真撮影を12月12日にそれぞれ行い、同年12月14日にすべての作業を終了した。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

太田・黒田遺跡(1)は、和歌山市のほぼ中央部にあたる紀ノ川南岸の沖積平野上に立地する遺跡である。当遺跡が所在する和歌山市太田及び黒田周辺から南東方向にあたる同市秋月・鳴神地域にかけては、標高4m前後を測る平野部のなかでも比較的高い微高地上にあたる地点であり、紀ノ川の沖積作用による陸化が比較的早く進んだ地域といえる。またこの周辺の平野部には、集中して遺跡が形成されたことで注目できる地点である(第2図)。

周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡として東側約1.6kmに国の史跡に指定されている鳴神貝塚(27)が位置する。鳴神貝塚は、近畿地方で最初に発見された貝塚として知られ、土坑墓や甕棺が検出され、縄文時代中期から晩期の土器とともに弥生時代前期の土器も出土している。また縄文晩期の土坑墓から猿の橈骨で作った耳栓を供伴した若い女性の伸展葬人骨が発見され、上下の門歯を抜歯していたことなどから、この女性がシャーマンではなかったかと考えられている。

弥生時代には当遺跡を初めとして平野部を中心に多くの遺跡が営まれている。当遺跡の南東側に隣接する秋月遺跡(23)の東部における近年の調査では、前期の土坑や自然河道が検出され、太田・黒田遺跡に最も近接する前期集落の存在が明らかとなった。また南側約2.5kmに位置する神前遺跡(42)では当遺跡と類似する中期初頭頃の水田が検出され、当遺跡西部で検出された水田とともに県内最古級の水田遺構として注目できる。

古墳時代では、弥生時代と同様に平野部を中心として集落が形成されている。当遺跡の西側約500mに位置する友田町遺跡(3)では前期から後期にかけての竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が検出され、これらの建物が溝の方向と平行関係に構築されていることが判明している。また先述の秋月遺跡やその東側の鳴神Ⅳ遺跡(24)音浦遺跡(28)などの鳴神遺跡群からは多数の竪穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出され、この周辺が古墳時代の集落の中心部であったものと考えられる。古墳の築造は、秋月遺跡において県内最古級の前方後円墳及び方墳群が築造され、その周辺部の鳴神Ⅴ遺跡(25)などにおいても円墳及び方墳群が造られる。そして、前期末には花山丘陵上に花山古墳群(29)が、中期後半から後期にかけて岩橋山塊に岩橋千塚古墳群(35)や寺内古墳群(41)などが形成された。

歴史時代になると、本遺跡の南東側に隣接する秋月の地に鎮座する日前・国懸宮が、『日本書記』にその名が記されている。その北東側に隣接する鳴神Ⅴ遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての土馬、陶硯、緑釉・灰釉陶器、初期貿易陶磁器などの特記すべき遺物が出土し、官衙的な施設が存在していたものと考えられている。秋月遺跡においても、奈良時代から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸などが検出され、大規模な集落跡が存在するものとみられる。この地域南方一帯は、県内最大規模の条里地割の痕跡が良好に残っている地域であり、河南条里と呼称されている。

室町時代には、当遺跡の南半部を中心として太田城の推定地が存在する。太田城は羽柴秀吉の紀州攻めの際の水攻めがよく知られるところであるが、その構造や規模は不明である。近年における当遺跡の調査では、幅10m、深さ3mを測る中世の大溝が発掘され、太田城に関わりをもつ遺構として注目される。また水攻めに関するとされる遺構では、太田城水攻め堤跡(22)として同市出水の地にわずかに残るのみである。

江戸時代の遺跡としては、史跡和歌山城とその三の丸にあたる和歌山城跡(5)や町屋に相当する鷺ノ森遺跡(7)などがあり、数多くの遺構・遺物が出土している。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	太田・黒田遺跡	弥生～近世	15	高井遺跡	縄文～鎌倉	29	花山古墳群	古墳
2	太田城跡	安土・桃山	16	府中Ⅱ遺跡	弥生	30	津奈遺跡	弥生
3	友田町遺跡	弥生～平安	17	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	31	津奈Ⅱ遺跡	古墳～奈良
4	木広町遺跡	弥生	18	田屋遺跡	弥生～古墳	32	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安
5	和歌山城跡	近世	19	西田井遺跡	弥生～中世	33	栗栖Ⅰ遺跡	古墳
6	本願寺跡	中世～	20	有本銅鐸出土地	弥生	34	岩橋Ⅱ遺跡	古墳～室町
7	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸	21	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	35	岩橋千塚古墳群	古墳
8	山吹丁遺跡	弥生～古墳	22	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	36	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良
9	国有本遺跡	弥生～古墳	23	秋月遺跡	弥生～平安	37	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
10	鳴滝遺跡	古墳	24	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	38	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
11	鳴滝古墳群	古墳	25	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	39	井辺遺跡	弥生
12	法然寺遺跡	弥生	26	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	40	井辺前山古墳群	古墳
13	六十谷遺跡	縄文～弥生	27	鳴神貝塚	縄文～弥生	41	寺内古墳群	古墳
14	西辻遺跡	弥生	28	音浦遺跡	古墳	42	神前遺跡	弥生

第2図 太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図

3. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査区は、深掘される建物の基礎部分にあたる地点に設定した。各区の名称は第3図に示したとおりであり、従来どおり北東側に位置するものから第1区と定め、以下順次に番号を付した(第3図)。第1区は、南北幅2m、東西長18mを測る調査区であり、中間部の約4m間は既存建物の基礎が残存していたため調査区から除いた。第2区は東西幅2m、南北長6.5mの調査区であり、第1区と第3区の東端を縦断する。また第3区は、南北幅2.5m、東西長18mの調査区である。

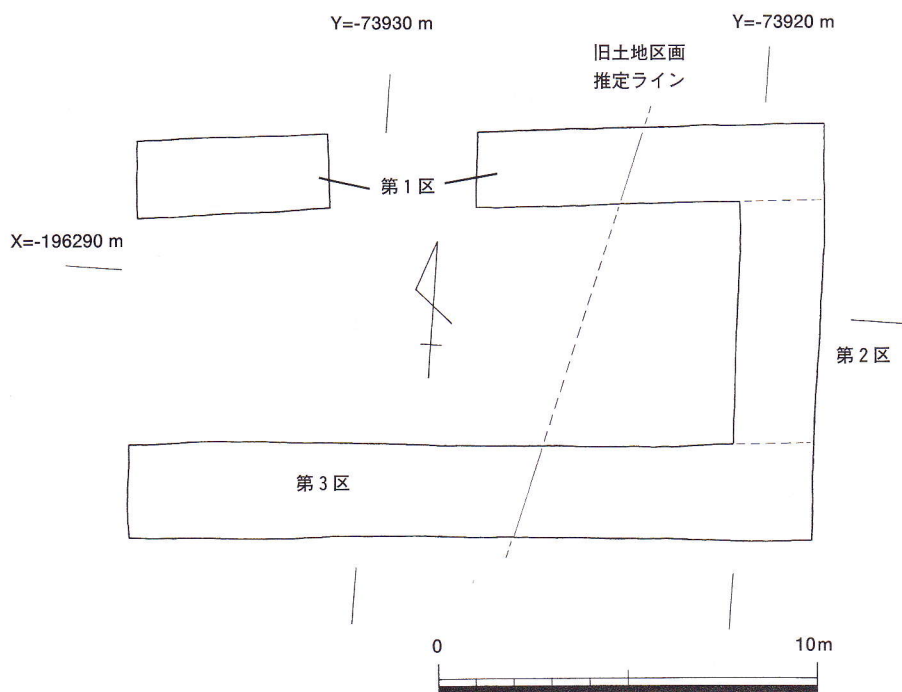
調査の方法は、当地が整地を施した宅地(図版1下)であったことから、上層の整地土を重機によって掘削を行い、第3層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。竪穴住居や溝等の遺構掘削については、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け、写真撮影を行い、2層以上の堆積が確認できたものについては実測図等の記録保存を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準に1/20の縮尺を用い手実測で行った。重要な遺物出土状況図や特殊遺構については1/10の縮尺を用いた。また遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

(2) 調査の概要

調査地の基本層序は第4図に示したとおりである。

調査地の現況が宅地であるため、表土は厚さ50~60cmを測る近代以降の整地土である。この整地土の状況も含めて、第3図に示したN-14°-Eの方向性をもつ旧土地区画による堆積が第4層まで



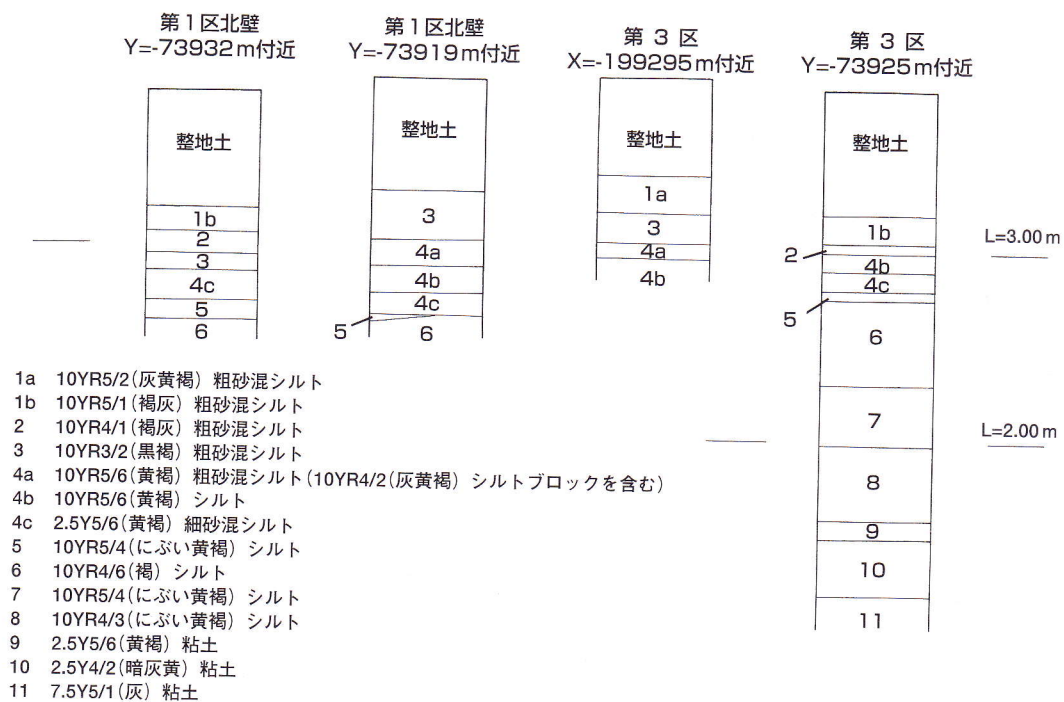
第3図 調査地区割図

影響を及ぼし、上層の堆積がこの区画ラインを境に東西で全く異なることが明らかとなった。

まず第4層までの状況は、旧土地区画ライン東側では、整地土下の第1a層が江戸時代頃の堆積とみられる。第1a層の下には黒褐色系の第3層があり、鎌倉時代の遺物を含む。この第3層の上面が第1遺構面であり、第2・3区において室町時代から江戸時代にかけての遺構を検出した。また土地区画ライン西側では、第45次調査地と同様の山土による整地が行われ、この整地土下の第1b層が褐色系の旧水田耕土であり、第2層がその床土にあたる。第3層は東側に比べ10cm程度低く堆積した土層であるが、包含する遺物の時期や土層の観察から東側の第3層に対応する土層と考えられる。また西側の第3層上面の検出では、遺構は確認できなかったが、第3層が削平を受け存在しない第3区西端部において室町時代の土坑を検出した。

次に、第4層は黄褐色系のシルト層であり、5～10cm程度の厚みで3単位に細分できる。第4層下の状況は、西側に厚く堆積する第5層とその下層に褐色系のシルト(第6層)が堆積する。このなかで最も多くの遺構を検出したのは、第4a層の上面であり、弥生時代中期中頃から鎌倉時代にかけての竪穴住居や井戸、土坑、ピットなどがある。また第4b層の上面では弥生時代中期古段階の竪穴住居や土坑などを、さらに第6層上面では弥生時代前期新段階の土坑などを検出した。

第6層下は、第3区の弥生時代中期末の土坑(SK-15)の壁面において観察したもので、標高約1mの深さ(第11層)まで確認した。この壁面観察の結果、第7層の上面において炭の堆積を検出したことから、この第7層上面にも遺構面が存在するものと考えられる。また第8層以下の土層からは遺物が出土しなかったため、無遺物層と考えられる。



第4図 調査地土層柱状模式図

4. 遺構

遺構は、調査区のほぼ全体において弥生時代から江戸時代にかけての様々な時期のものを多数検出した。以下、古い時期のものから各遺構面ごとに記述を行い、なかでも重要と考えられるものについては個別に説明を行う。

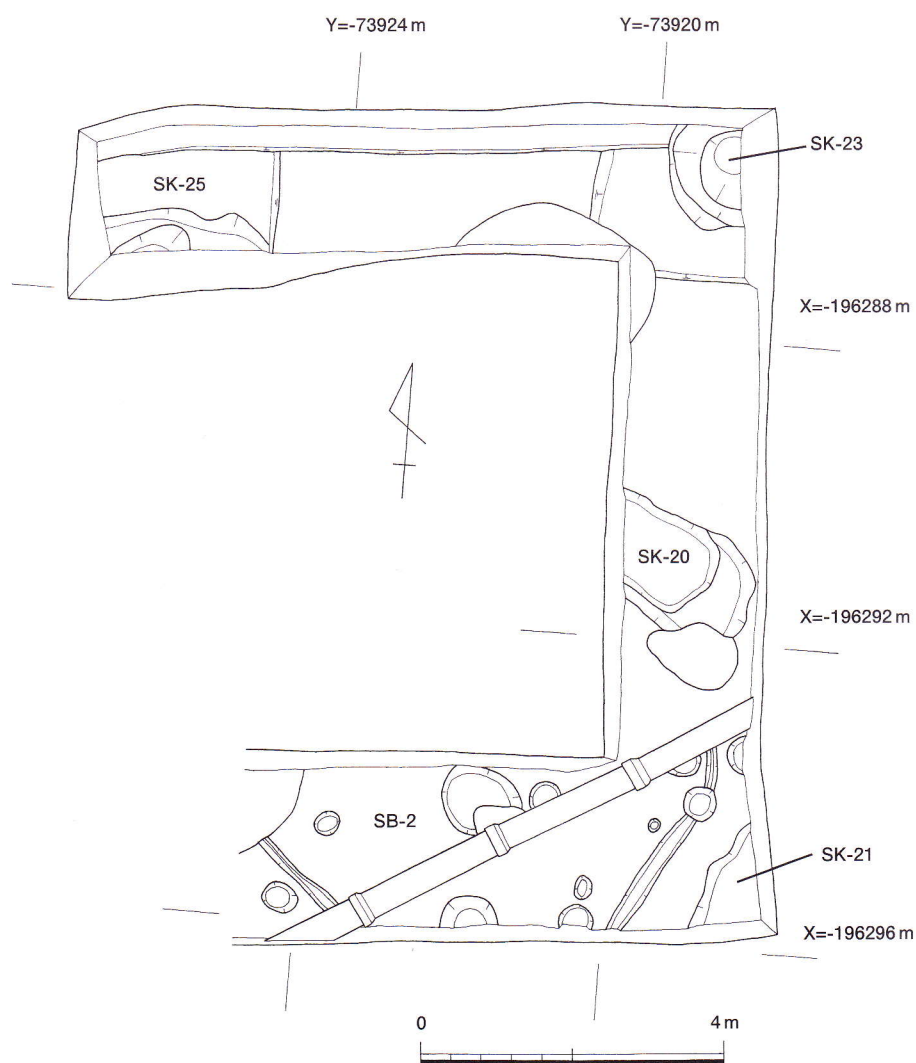
なお、第3遺構面以下は、第1区の北壁直下、第2区の東壁直下及び第3区の南壁直下に設定したサブトレンチ調査によって検出した遺構の部分を拡張して調査を行ったもので、今回の調査区全面を対象にしたものではない。

(1) 第4遺構面検出の遺構(第5図)

第4遺構面の遺構は、第1区の中央から東側の2ヶ所の深掘調査区内の第6層上面(標高2.6m前後)において検出したもので、土坑2基(SK-23・25)がある。

[SK-23] (第6図、図版14上)

SK-23は第1区東端で検出したもので、東西0.9m以上、南北1.3m以上を測り、検出面からの深さ



第5図 第3・4遺構面遺構平面図

が60cmである。この土坑の覆土は、数単位に分けられるが、全体的に上層には赤褐色の色調をもつ焼土が、下層には黒褐色の色調をもつ炭が多く含まれ、炉の可能性が高いとみられる遺構である。遺物は、ヘラ描文を主体とする壺・甕が出土し、畿内第Ⅰ様式の新段階に併行する時期に比定できる。

[SK-25] (図版14下)

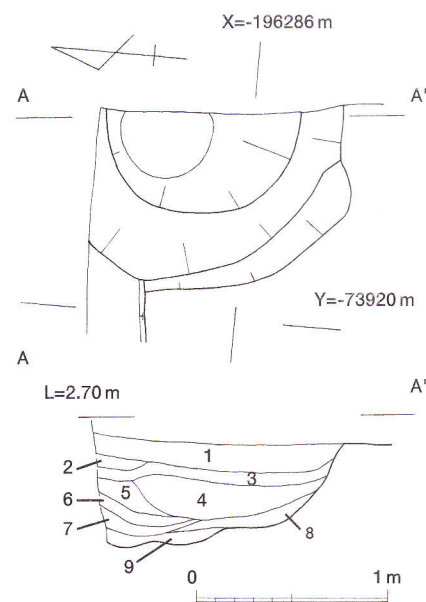
第1区中央部において検出したSK-25は、東西2.2m以上、南北1.3m以上を測り、検出面からの深さが45cm程度の土坑である。この土坑の覆土は、4単位に分けられ、上層の3単位は黄褐色系のシルト層であるが、最下層にのみ多量に炭が含まれる。また、時期的にはSK-23に併行するものとみられる。この土坑の上面には第3遺構面から検出できたSK-24が重なりをもつ。このSK-24については、便宜的に第2遺構面において位置を示した。

(2) 第3遺構面検出の遺構(第5図)

第3遺構面の遺構は、第2区及び第3区東端の第4b層上面(標高2.9m前後)において検出したもので、弥生時代中期初頭の竪穴住居1棟(SB-2)、土坑3基(SK-20・21・24)やピットなどを検出した。

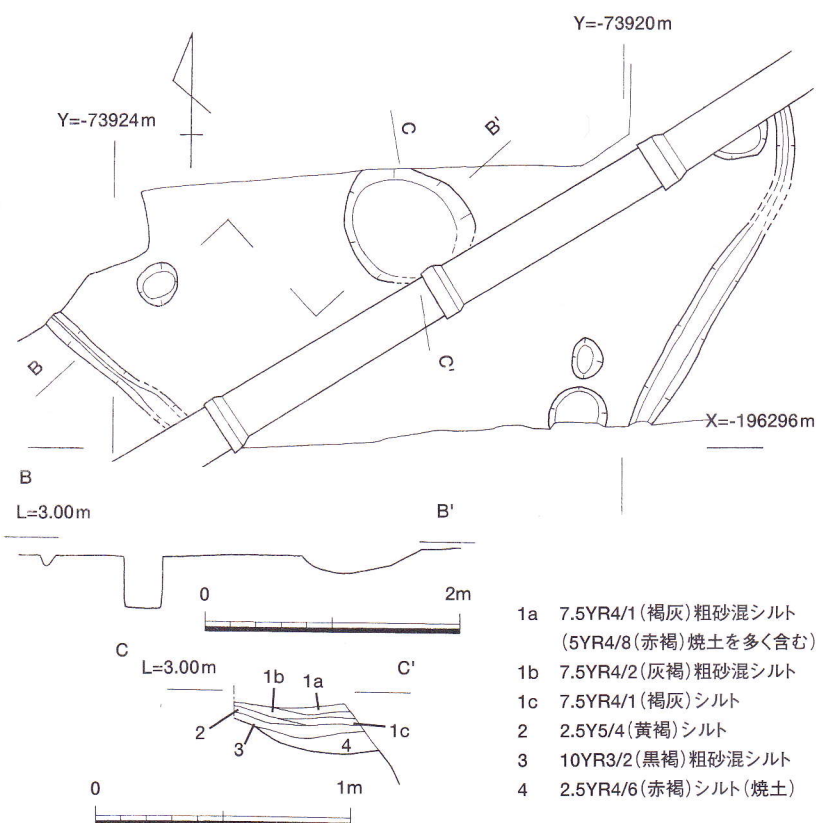
[SB-2] (第7図、図版16上)

SB-2は、第3区東端において検出した竪穴住居であり、壁溝、支柱穴、炉を検出した。壁溝の状況からこの住居は、直径約6.3mを測るとみられ、不正円形の平面プランをもつものである。また、検出した3基の支柱穴から5本柱の住居が復原できる。この住居の炉は、中央からやや南側に位置する直径90cmの円形のもので、20cm程度の深さをもつ。



- 1 2.5Y4/4(オリーブ褐) 粗砂混シルト
- 2 5YR5/6(明赤褐) 粗砂(焼土)
- 3 10YR5/6(黄褐) シルト
- 4 10YR4/4(褐) 粘土
- 5 2.5Y4/2(暗灰黄) 細砂混粘土(炭を含む)
- 6 2.5Y4/4(オリーブ褐) 粘土(炭を含む)
- 7 10YR3/2(黒褐) 粘土(炭を多く含む)
- 8 10YR4/3(にぶい黄褐) 粘土
- 9 2.5Y5/2(暗灰黄) 粘土(2.5Y5/6(黄褐) シルトブロックを含む)

第6図 SK-23遺構平面図及び土層断面図



- 1a 7.5YR4/1(褐灰) 粗砂混シルト(5YR4/8(赤褐) 焼土を多く含む)
- 1b 7.5YR4/2(灰褐) 粗砂混シルト
- 1c 7.5YR4/1(褐灰) シルト
- 2 2.5Y5/4(黄褐) シルト
- 3 10YR3/2(黒褐) 粗砂混シルト
- 4 2.5YR4/6(赤褐) シルト(焼土)

第7図 SB-2遺構平面図及び土層断面図

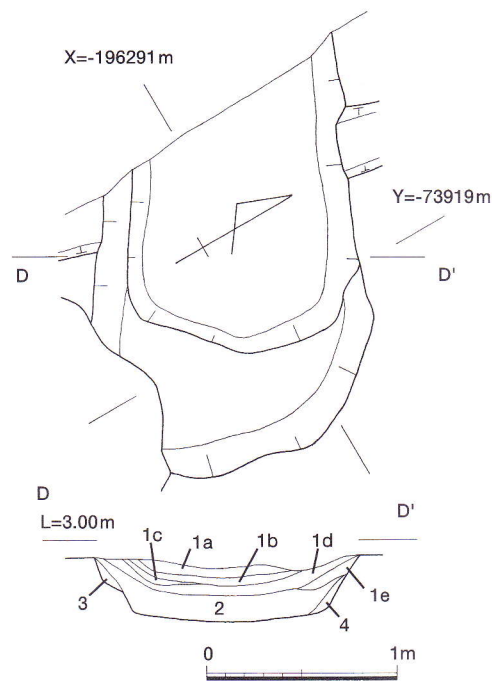
炉内部の覆土は6単位に分けられ、最上層と最下層に赤褐色の焼土が多く含まれていた。出土した土器は、櫛描き直線文を主体とする壺で、畿内第Ⅱ様式に併行する時期のものである。

[SK-20] (第8図、図版15)

SK-20は、SB-2の北側の第2区で検出した土坑である。この土坑は長辺2.9m以上、短辺1.4mを測るもので、二段に落ち込む最深部で検出面から37cmの深さをもつ。覆土は細かく細分できるが、大きくは上下2単位に分けられ、その上位層が黄褐色系のシルトを主体とする土層であり、また下位層には多量の炭が含まれた黒褐色系の細砂混粘土である。遺物は覆土内の下位層に多量に含まれ、畿内第Ⅱ様式に併行する壺・甕とともに石鏃・石庖丁などの石器が出土した。

[SK-24] (第9図)

第1区中央部において検出したSK-24は、第4遺構面検出のSK-25と重なりをもつことから、正確な位置を示すために第2遺構面(第9図)において図示したが、本来第3遺構面に対応する遺構である。遺構の規模は、東西1.45m以上、南北1.2m以上を測り、検出面からの深さが20cm程度の土坑である。この土坑の覆土は、全体的に黒褐色系のシルトであり、3単位に分けられ、最上層には炭が、最下層には炭と焼土が多く含まれていた。また、時期的にはSK-20に併行するものとみられる。



- 1a 10YR5/4(にぶい黄褐) 細砂混シルト
- 1b 2.5Y5/2(暗灰褐) 細砂混シルト
- 1c 2.5Y5/4(黄褐) シルト
- 1d 10YR5/2(灰黄褐) 細砂混シルト
- 1e 2.5Y5/4(黄褐) シルト(焼土を含む)
- 2 10YR2/1(黒) 細砂混粘土(炭を多量に含む)
- 3 10YR3/1(黒褐) シルト(炭を含む)
- 4 10YR5/4(にぶい黄褐) シルト

第8図 SK-20遺構平面図及び土層断面図

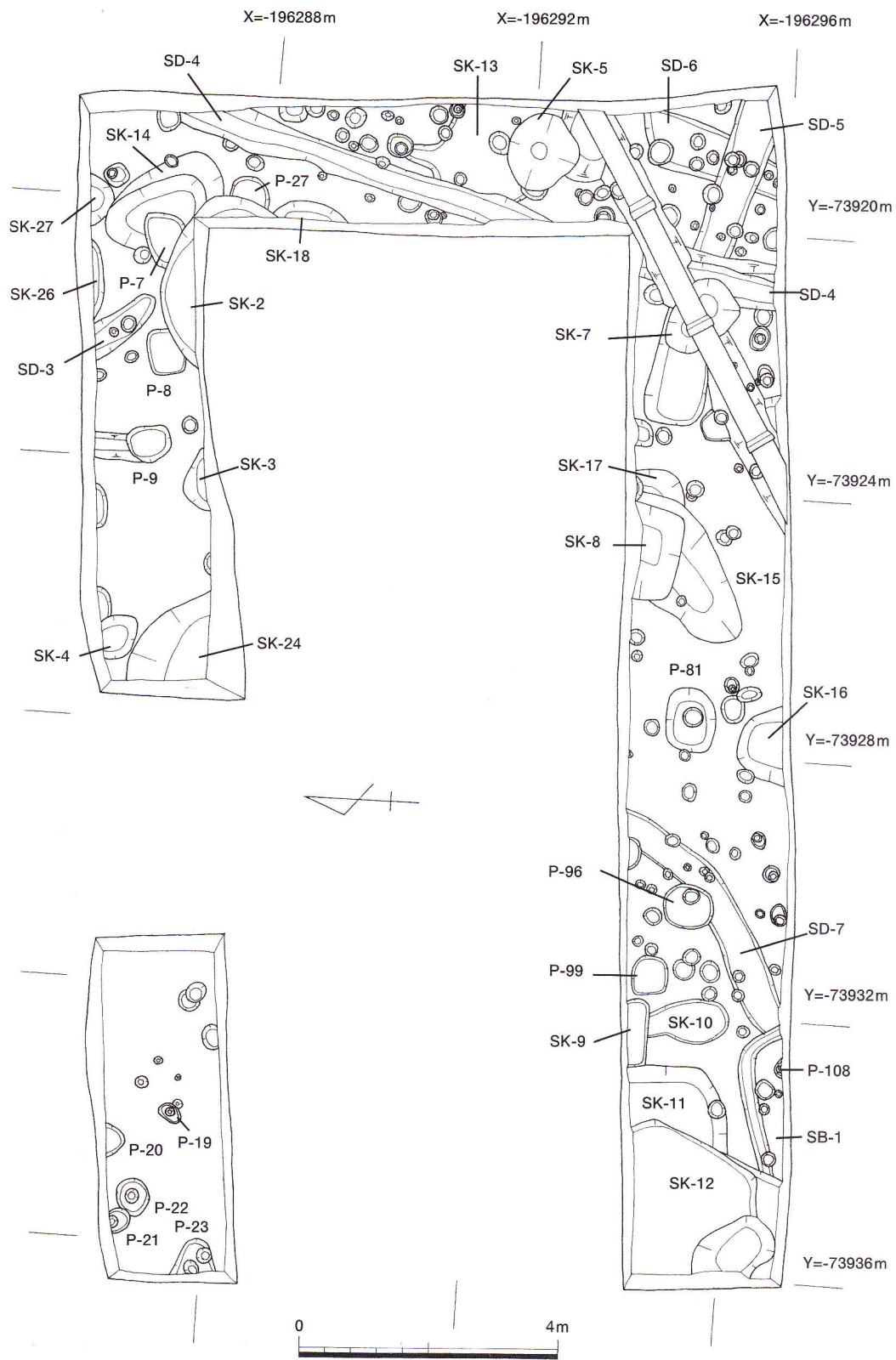
(3) 第2遺構面検出の遺構(第9図、図版11・12)

第2遺構面は、調査区全面の第4a層上面(標高3.0m前後)において検出したもので、弥生時代中期の溝3条(SD-3・6・7)、土坑10基(SK-3・4・10・14～18・26・27)やピット15基、古墳時代前期の竪穴住居1棟(SB-1)、土坑5基(SK-2・5・7～9)やピット16基、鎌倉時代の溝2条(SD-4・5)やピット数基などを検出した。なお、第3区西端で検出した一連の土坑と考えられるSK-11・12については、上層の第3層が削平されていたことと、出土遺物からみて室町時代に比定できるものであり、本来第1遺構面に対応する遺構と判断できた。このほか、弥生・古墳・平安・鎌倉各時代の時期判定が困難なピット多数を検出した。

【弥生時代の遺構】

[SD-7]

SD-7は第3区の西半部において検出したやや彎曲する溝で、幅50～60cm、深さ5～10cm、検出長4.0mを測る。この遺構は弥生時代中期の範疇におさまるものとみられ、畿内第Ⅲ様式併行期に比定できるP-96に切られていることから、畿内第Ⅲ様式併行期でもやや古い段階のものと考えられる。



第9図 第2遺構面遺構全体平面図

[P-96] (第10図、図版16下)

P-96は第3区の西半部で検出した遺構である。東西70cm、南北80cmを測るほぼ円形を呈するもので、深さ10cmを測る。この遺構の底面には横位の弥生土器壺(第15図、18・19)や石斧(第21図、71)が出土し、壺の出土状況などからみて土器棺の可能性もある。また検出状況から上部がかなり削平を受けているものと判断された。東側約3.0mに位置するP-81もP-96と同じ畿内第Ⅲ様式併行期に比定できるもので、何らかの関係があるものと考えられる。

[SK-3・4] (第9図)

SK-3・4はともに第1区の中央部分で検出した土坑である。SK-3は東西1.0m以上、南北0.4m以上、深さ80cmを測るもので、覆土は3単位に分けられ、上層が黒褐色系のシルト質、下層がにぶい黄褐色系の粘土質となる。またSK-4は東西70cm、南北50cm以上、深さ約20cmを測るもので、覆土はにぶい黄褐色の粗砂を含むシルト質の単層である。遺物からみて、SK-3・4はともに畿内第Ⅲ様式併行期に比定できる。

[SK-15] (第11図、図版17上)

SK-15は、第3区のほぼ中央部において検出した遺構である。この遺構は、古墳時代前期の井戸(SK-8)に北半部が切られている。規模は長径2.4m以上、短径1.4mを測る長楕円形のもので、最深部は検出面から2.1mの深さをもつ。この状況から木杵等は検出できなかったが、井戸の可能性が高いものとみられる。覆土は6単位に分けられ、全体的に灰褐色系の色調をもち、上位層がシルト質、下位層が粘土質である。遺物は凹線文を主体とする畿内第Ⅳ様式併行期の土器が出土した。

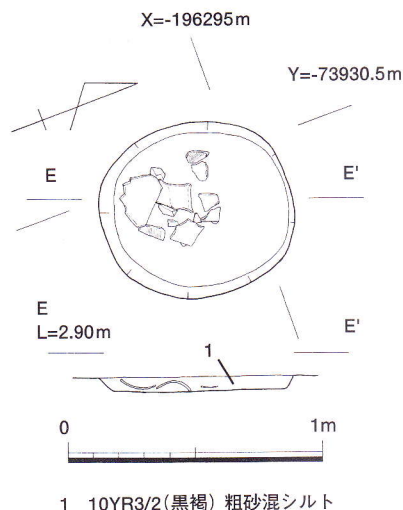
【古墳時代の遺構】

[SB-1] (第12図、図版17下)

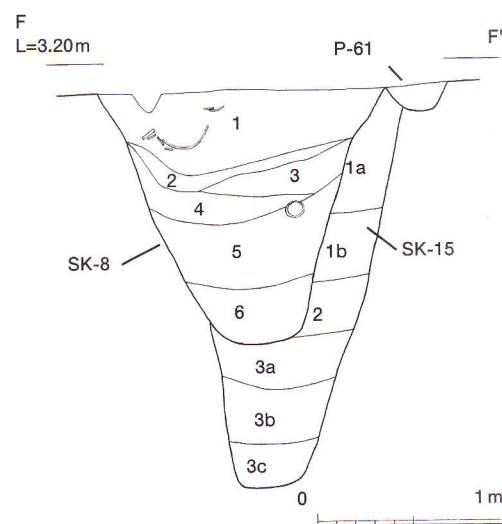
SB-1は第3区西端で検出した竪穴住居である。この竪穴住居は上部の削平と室町時代の土坑(SK-12)などとの重なりから全形は明らかでないが、検出した壁溝の状況から隅円方形の平面プランをもつものとみられ、東西2.4m以上、南北0.7m以上を測る。この住居の支柱穴とみられる深さ40cmのP-108を調査区南壁際において検出した。壁溝などから出土した土器からみて古墳時代前期の布留式併行期のものと考えられる。

[SK-8] (第11図、図版17上)

SK-8は、東西1.4m、南北0.9mの平面形が方形の



第10図 P-96遺構平面図及び土層断面図



- | | |
|---|--|
| SK-8 | SK-15 |
| 1 10YR3/3(暗褐)粗砂混シルト | 1a 10YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルト(10YR5/6(黄褐)シルトブロックを含む) |
| 2 10YR4/1(褐灰)粗砂混シルト | 1b 10YR4/3(にぶい黄褐)細砂混シルト(10YR5/6(黄褐)シルトブロックを含む) |
| 3 10YR5/4(にぶい黄褐)粗砂混シルト(10YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルトブロックを含む) | 2 10YR4/1(褐灰)シルト混細砂(10YR5/6(黄褐)シルトブロックを少量含む) |
| 4 10YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルト | 3a 2.5Y4/3(オリーブ褐)シルト混細砂 |
| 5 10YR3/2(黒褐)粗砂混粘土 | 3b 2.5Y4/2(暗灰黄)粘土 |
| 6 2.5Y4/2(暗灰黄)細砂混粘土 | 3c 5Y4/1(灰)粘土 |

第11図 SK-8・15土層断面図(第3区北壁ライン)

もので、検出面からの深さ1.3mを測る。検出した状況から井戸の可能性が考えられる。覆土は6単位に分けられ、上位層が暗褐色系のシルト質を主体とし、下位層が黒褐色から暗灰黄色の粘土質となり、下層ほど粘性が強い。これらの覆土内には布留式併行期の土器を多量に含み、特に最上層から製塩土器が多量に出土したことで注目できる遺構である。

[SK-5・7] (第9図、図版18)

SK-5は、第2区南半部のほぼ中央部で検出した遺構で、東西1.2m、南北1.1mのほぼ円形のもので、検出面から1.1m前後の深さですり鉢状に大きく落ち込む。覆土は黒褐色系の粗砂混シルトで、部分的に炭が多く含まれていた。覆土内から壺・甕・高杯などの土師器が多量に出土し、なかでもSK-8出土の製塩土器に類似するもの(第17図、44)が1点出土した。

またSK-7は第3区の東端における土管直下において検出したもので、長径1.25m、短径0.9mの楕円形のもので、約1.2mの深さをもつ。覆土は上下2単位に分けられ、ともに黒褐色系のシルト質土層である。遺物では、ほぼ底面から完形の土師器鉢(第17図、45)が1点出土した。

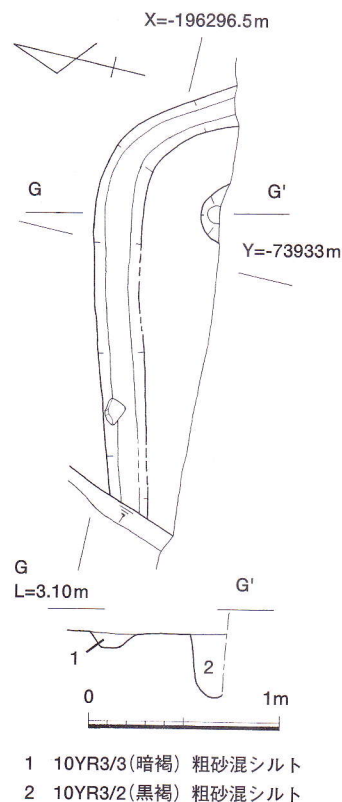
【鎌倉時代の遺構】

[SD-4] (第9図)

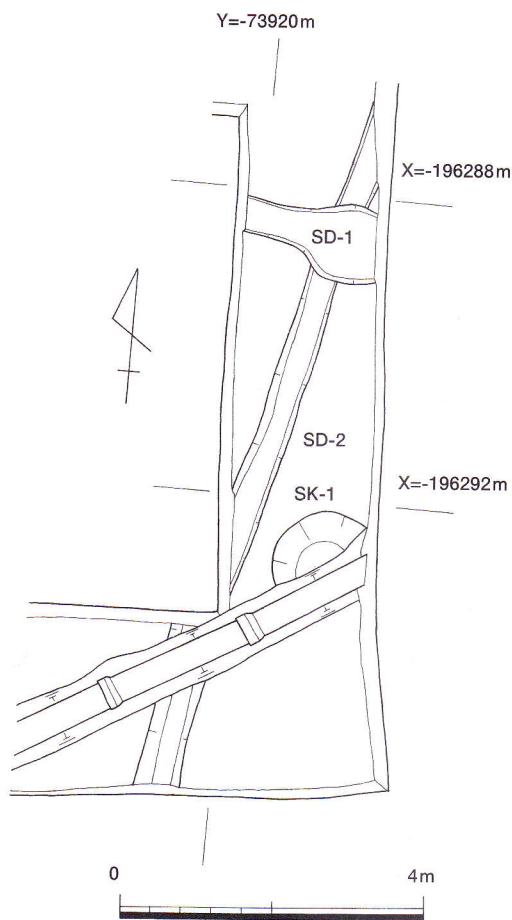
SD-4は第2区北端から第3区東端にかけて調査区をN-14°-Eの方向性で直線的に貫く溝である。この溝は幅40~60cm、深さ20cm程度のもので、底面の比高差がほとんどなくその流路方向が確認できない。覆土は上下2単位に分けられ、上層が黒褐色の色調をもつ粗砂混シルト、下層が灰褐色のシルト質土層である。

(4) 第1遺構面検出の遺構(第13図)

第1遺構面は、第2区を中心とした調査区東側の第3層上面(標高約3.3m)において検出したもので、室町時代の溝1条(SD-2)及び土坑1基(SK-1)、江戸時代の溝1条(SD-1)を検出した。また第2遺構面で示したが、第3区の西端で検出した一連の土坑と考えられるSK-11・12については、上層の第3層が削平されていたことと、出土遺物からみて室町時代に比定できるものであり、この遺構面に対応する遺構である。



第12図 SB-1遺構平面図及び土層断面図



第13図 第1遺構面遺構平面図

[SD-2] (第13図)

SD-2は、幅50～60cm、深さ20cm程度を測り、第2区を南北に貫くN-14°-Eの方向性の溝である。位置的には第2遺構面で検出したSD-4に対してやや西にずれるがほとんど同じ位置に当たり、その方向性も一致する。また先にふれた旧土地区画の方向性とも一致することで注目できる。このことから、鎌倉時代のSD-4が埋没した後もその方向性が踏襲され、ほとんど同じ位置にSD-2が掘削されたものと考えられる。

5. 遺物

遺物は、各時代の遺構の覆土や第3～6層の遺物包含層から遺物収納コンテナ約30箱分が出土した。これら遺物の内容は、多量に出土した弥生時代前期から中期の土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品などがある。なかでも、弥生時代の土器では前期の土坑SK-23・25や中期の土坑SK-20・24などが、また古墳時代の土器では前期の土坑SK-5・8などにおいて一括性が高い重要視される遺物群があり、また特筆されるものに第1区第3層から出土した平安時代に比定できる須恵器円面硯がある。

本調査では、これらの遺物を遺構出土の一括性が高いものを中心として、大きく各時代に分類してふれ、その後にカマド、土鍾や石器、自然遺物を個別に説明する。

(1) 弥生時代の土器

[SK-23 出土土器] (第14図1～8、図版20)

1は口径28.0cmの広口壺の口縁部である。大きくラッパ状に開く口縁上端部に断面形が三角形の貼付突帯がめぐる。この壺は外面をタテ方向、内面をヨコ方向のハケ調整が行われ、突帯を含めた口縁端部は強いヨコナデによってハケをナデ消す。

2～5は甕である。2は口径23.0cmを測るもので、外面体部上位に断面形が三角形の貼付突帯がめぐる。調整は、突帯から上方はヨコナデ、下方は粗いヘラケズリが施されており、いわゆる紀伊型甕の一種とみられる。3・4はともに外面にヨコ及びナナメ方向のハケ調整が密に施された、遠賀川系の甕である。口径は3が23.1cm、4が26.4cmである。5は口縁端部が大きく外側に折れ曲がりやや垂下するもので、外端面に刻み目を施したものである。体部上位の外面にはナナメ方向のハケ調整を施した後、5条を1単位としたヘラ描沈線を2段に入れ、その沈線間に刺突文を施したものである。

6は口径32.6cmを測る大型の鉢で、大きく開く口縁端部をやや上方に肥厚させるものである。調整は、外面にヨコ方向を主体とするハケ調整を施した後、頸部下に断面形が三角形の貼付突帯を1条めぐらせ、その上位をヨコナデするもので、貼付突帯を用いてその上下の調整を区別している。

7・8は底部である。7は底径12.0cmを測る壺の底部で、外面にタテ方向のハケ調整が密に施され、内面にはヘラケズリの後、部分的にヘラミガキ調整が観察できる。また底面はヘラケズリの後ヘラミガキ調整が丁寧に施されている。8は底径7.0cmを測り、そのほぼ中央部に直径1.6cmの円孔が穿たれた甗の底部である。

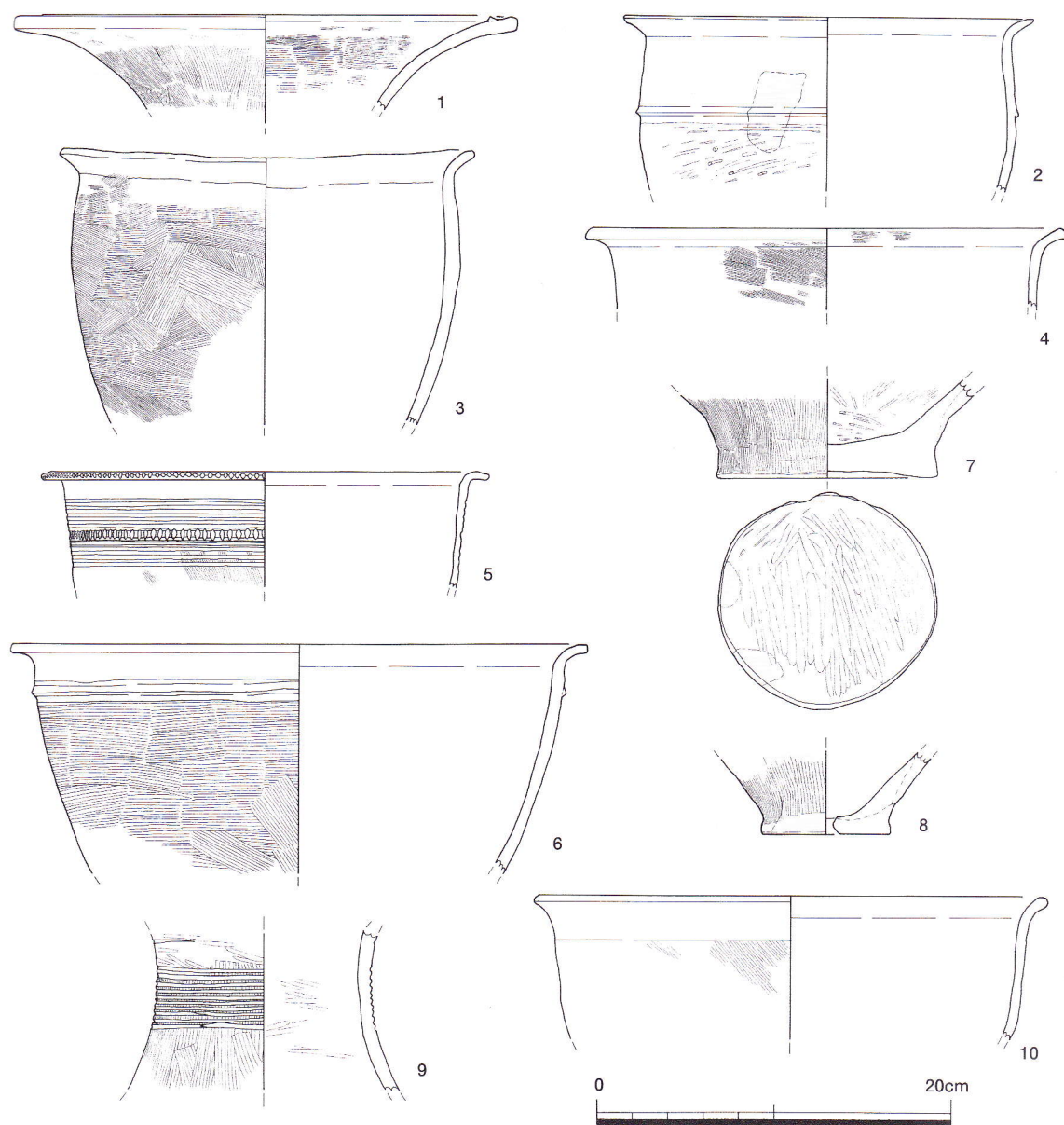
これらの胎土は比較的粗く、石英・結晶片岩などを含むことからすべて在地系の土器とみられ、時期的には畿内第Ⅰ様式の新段階に併行するものと考えられる。

〔SK-25 出土土器〕（第14図9・10、図版20）

9は広口壺の頸部とみられる。外面は、まずタテ方向のハケ調整を施し、上部をナデ消した後、ヘラミガキを行い、最終的にヘラ描沈線10条によって加飾している。ヘラ描沈線は頸部上位にも1条観察できる。内面は、磨滅のため不明瞭であるが、部分的にヘラミガキ調整が確認できる。

10は口径28.6cmの体部がやや張る大型の鉢で、大きく開く口縁端部を丸くおさめている。調整は、外面にナナメ方向を主体とするハケ調整、内面にはナデ調整を施す。

これらの胎土にも比較的粗い砂粒に石英・結晶片岩などを含むことから在地系の土器とみられ、時期的にはSK-23に併行する時期のものと思われる。



第14図 遺物実測図 1

[SK-24 出土土器] (第15図11～13、図版21)

11・12はともに口縁部と底部が欠失しているが、体部下方に最大径をもつ壺である。11は、体部最大径が25.6cmを測るもので、頸部から肩部にかけてクシ描による直線文と流水文を組み合わせた装飾を施したものである。この壺の外表面調整は、ハケ調整の後、ヘラミガキを行い、部分的にナデ消している。12は、体部最大径が23.3cmを測るもので、頸部から肩部にかけてクシ描による直線文と波長の短い波状文を組み合わせ、最下段にのみヘラ描沈線を1条施したものである。この壺の外表面調整は不明瞭で、一部にナデ調整が観察できる程度であり、また内面は全面にナデ調整が施されている。

13は口径20.0cmを測るいわゆる紀伊型甕である。口縁部は強いヨコナデによって外側に大きく突出する。体部外面の下方にはヨコ方向のヘラケズリが、上方にはナデ調整が施され、この境目には稜線がめぐる。

これらの胎土は比較的粗く、石英・結晶片岩・赤色軟質粒などを含むことからすべて在地系の土器とみられ、特に13は焼成が良好である。また時期的には畿内第Ⅱ様式の前段階に併行するものと考えられる。

[SK-20 出土土器] (第15図14～17、図版21)

14は口径28.8cmを測るいわゆる紀伊型甕の口縁部である。口縁端部はシャープに作られ、強いヨコナデによって外端面を形成する。

15～17は底部である。15・16はともに肉厚に作られた壺の底部で、両者ともタテハケが行われた後、強いナデによってハケ調整が消されている。17は底径7.8cmを測る紀伊型甕の底部で、調整は磨滅のため不明瞭であるが、外面の一部にタテ方向のヘラケズリが観察できる。

これらの胎土もSK-24出土土器と同じく比較的粗い在地系のもので、時期的にもほぼ併行するものと考えられる。

[P-96 出土土器] (第15図18・19、図版21)

18・19は壺である。18は口径16.0cmの広口壺で、大きく開く口縁端部が肥厚し、垂下するものである。また上端面には径2.5mmの円孔が深さ2.0mmまで穿たれている。頸部には断面形が三角形の貼付突帯が3条めぐる。19は体部上位に最大径をもつもので、肩部にはクシ描による直線文と波長の長い波状文を組み合わせた装飾が施されている。この壺の調整は、外面にはタテ方向のハケ調整を施した後、一部をナデ消し、さらに下方にタテ方向の丁寧なヘラミガキ調整が施されている。また内面は全面にナデ調整が行われ、肩部付近に爪跡のような痕跡が二段に観察できる。

これらの胎土中には石英・結晶片岩・赤色軟質粒などが含まれるが、比較的緻密であり、時期的には畿内第Ⅲ様式に併行するものと考えられる。

[SK-3 出土土器] (第15図20・21、図版21)

20は直口壺の口縁部で、片口状の凹みをもつものである。頸部上位には断面形が三角形の貼付突帯2条とクシ描による波状文によって飾られ、また下位にはクシ描直線文が施されている。

21は口径17.8cmの比較的小形の甕である。「く」の字状にのびる口縁端部は上方に肥厚し、丸くおさまられている。頸部下の外面には比較的粗いタテハケ調整が行われ、それを一部ナデ消している。

これらの胎土も比較的細かく、結晶片岩・長石などが含まれた在地系のもので、時期的には畿内第Ⅲ様式でも比較的新しい様相をもつ。

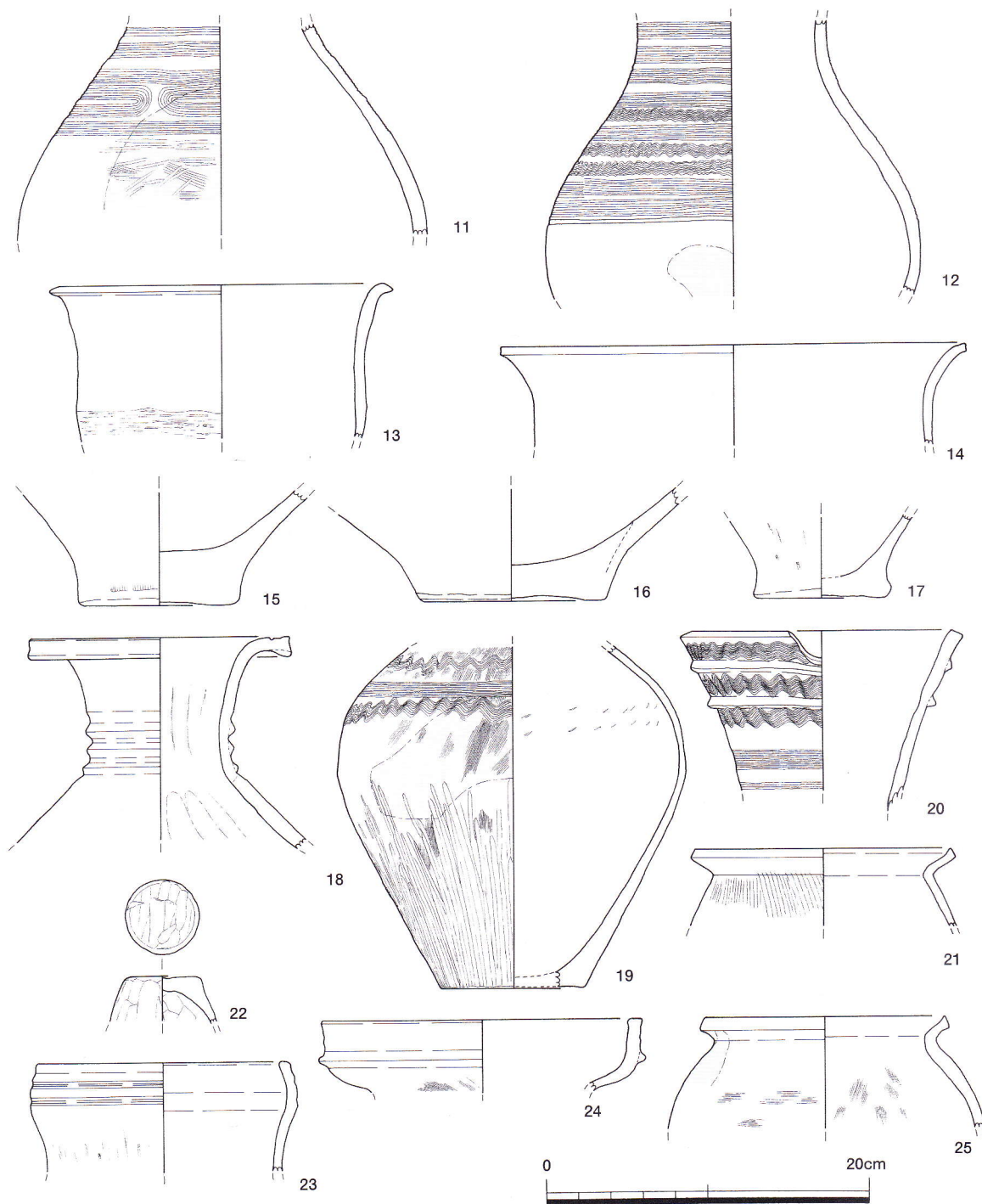
[SK-15 出土土器] (第15図22～25、図版21)

22は蓋の上端部とみられる。天井部には明瞭なヘラケズリがみられ、また内外面とも上方から下方にか

けてのヘラケズリが施されている。

23・24は、壺の口縁部である。23は口径15.4cmの直口壺で、やや内側に彎曲する口縁部を形成する。外面には2条の凹線文が施され、また頸部にかけて成形時のヘラケズリが観察できる。24は口径19.8cmの段状口縁部壺で、屈曲部の段を丸くおさめている。屈曲部上位には断面形がやや丸みを帯びた貼付突帯が1条めぐる。

25は「く」の字状にのびる口縁端部が比較的短い甕である。全体的に肉厚で、口縁端部を上下に肥厚させている。磨滅が著しいが、体部外面にはヨコ方向、内面にはタテ方向のハケ調整が観察できる。



第15図 遺物実測図 2

これらの胎土も比較的細かく、結晶片岩・赤色軟質粒などが含まれた在地系のもので、時期的には畿内第Ⅳ様式に比定できる。

このほか、第3区第4層とSK-13から生駒西麓産の壺破片各1点ずつが出土している。前者は、壺頸部の破片で多条のヘラ描沈線文が施されたものであり、また後者は広口壺の口縁部とみられる。

(2) 古墳時代の土器

[SK-8 出土土器] (第16図 26～38、図版 22)

26～38は、土師器である。

26～28は壺で、26は口径20.8cmを測る二重口縁壺である。口縁屈曲部には円形浮文を貼付けた後、竹管文を施す。外面はヨコナデによって調整を行うが、内面は頸部にタテ方向のヘラミガキを施した後、口縁部にはヨコ方向に粗いヘラミガキを施す。27は口径22.6cm、体部最大径43.8cmを測る大形の壺である。直口ぎみにひらく口縁部から肩部は丸みをもち、体部は大きくひらく形態を呈する。外面の調整は、まずタテハケを行った後、ヨコナデによって部分的にハケ目をナデ消し、最終的にタテ方向のヘラミガキを施すものであるが、ミガキは密ではない。内面はヨコハケをヨコナデによってナデ消し、体部上半は板ナデ調整を行う。28は小型丸底壺で、口径10.2cm、器高12.4cmを測る。全体的に厚手で、粗いつくりであり、内外面に粘土紐の接合痕を残す。また外面の調整については、体部は上方から下方へ、口頸部は上方から下方へ板状工具によって粘土を掻き取った後、全面をナデ調整する。

29・30は甕である。ともに「く」の字状を呈する口縁部をもつもので、29は直線的に外反し、30は内湾しながら立ち上がるものであり、29は体部の張りが強い形態を呈する。外面調整は、タテ及びヨコハケ調整を行い、体部上半から口縁部をヨコナデ調整によってナデ消す。内面はナナメ方向のヘラケズリ調整がみられるが、30の下半部はナデ調整が施される。

31・32は高杯である。31は杯部で、斜め上方に直線的にのびる形態を呈する。全面にヘラミガキ調整が認められ、特に外面全面には細かなヘラミガキ調整が施される。内面の調整順序は、まず下半部にヨコ方向の粗いヘラミガキを施し、放射状に細かなヘラミガキを行った後、上部にヨコ方向の粗いヘラミガキ調整を施す。また、胎土中には雲母を多量に含む。32は脚部で、裾部が大きくひらく形態を呈するもので、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整を行った後、外側からスカシ孔を穿つ。復原できるスカシ孔の数は、6箇所である。

33は脚台部をもつ小型の鉢で、口径6.8cm、器高5.5cm、脚部径4.4cmを測る。体部はヨコ方向のタタキによる成形の後、ヨコナデ調整によりナデ消す。脚部は短く外側にひらく形態で、指オサエによって形づくられる。

34～38は製塩土器である。34・35は口縁部で、体部から口縁部にむかってすぼまる形態を呈するものである。外面はヨコ方向のタタキによる成形の後、ナデ調整を行うが、35の内面には当て具の痕跡が残る。36～38は脚台部で、いずれも短くひらき、底部が上げ底状に窪むもので、体部は大きくひらく形態と考えられる。これらの形態は、底部が小さく窪み、底の厚いもの(36)、底部の窪みが大きいもの(37)、脚台部のひらきが小さく、直立ぎみに立ち上がるもの(38)があるが、出土量は36の形態が圧倒的に多い。いずれも外面はヨコ方向のタタキによる成形の後、ナデ調整を行い、脚台部はタテ方向の指ナデによって調整するもので、その際の指頭圧痕を残す。またこれらの製塩土器には、内外面に塩の結晶が付着する

が、35 の口縁端部には筋状に塩の結晶が付着する。

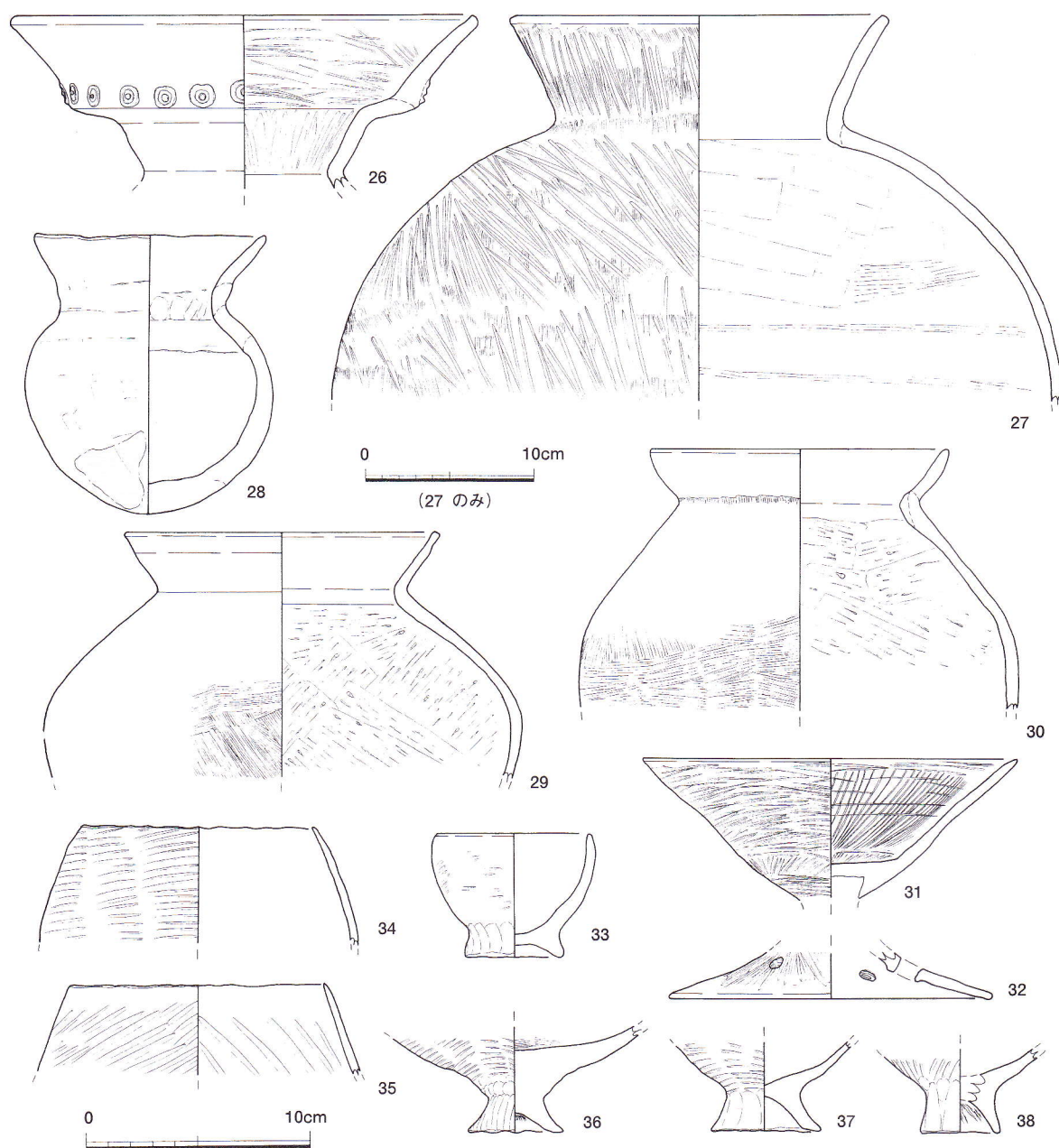
[SK-5 出土土器] (第 17 図 39 ~ 44、図版 23)

39 ~ 44 は、土師器である。

39 は口径 19.2cm を測る壺の口縁部で、「く」の字状に外反する口縁部は、端部をヨコナデ調整によって丸くおさめる。

40 は甕である。球形の体部に短く外反する口縁部をもち、口縁端部は強いヨコナデ調整によって内側に肥厚させる。体部は内外面をヘラケズリによって薄く仕上げ、外面は全面をナデ調整し、内面も体部上位から口縁部にかけて丁寧なナデ調整を施す。また体部下半は煤の付着がみられ、体部中央部には焼成後直径約 5 mm の円孔が外側から 1 箇所穿たれる。

41 ~ 43 は高杯である。41 の杯部は、屈曲部から口縁部が外反ぎみに大きくひらく形態のものである。



第16図 遺物実測図 3

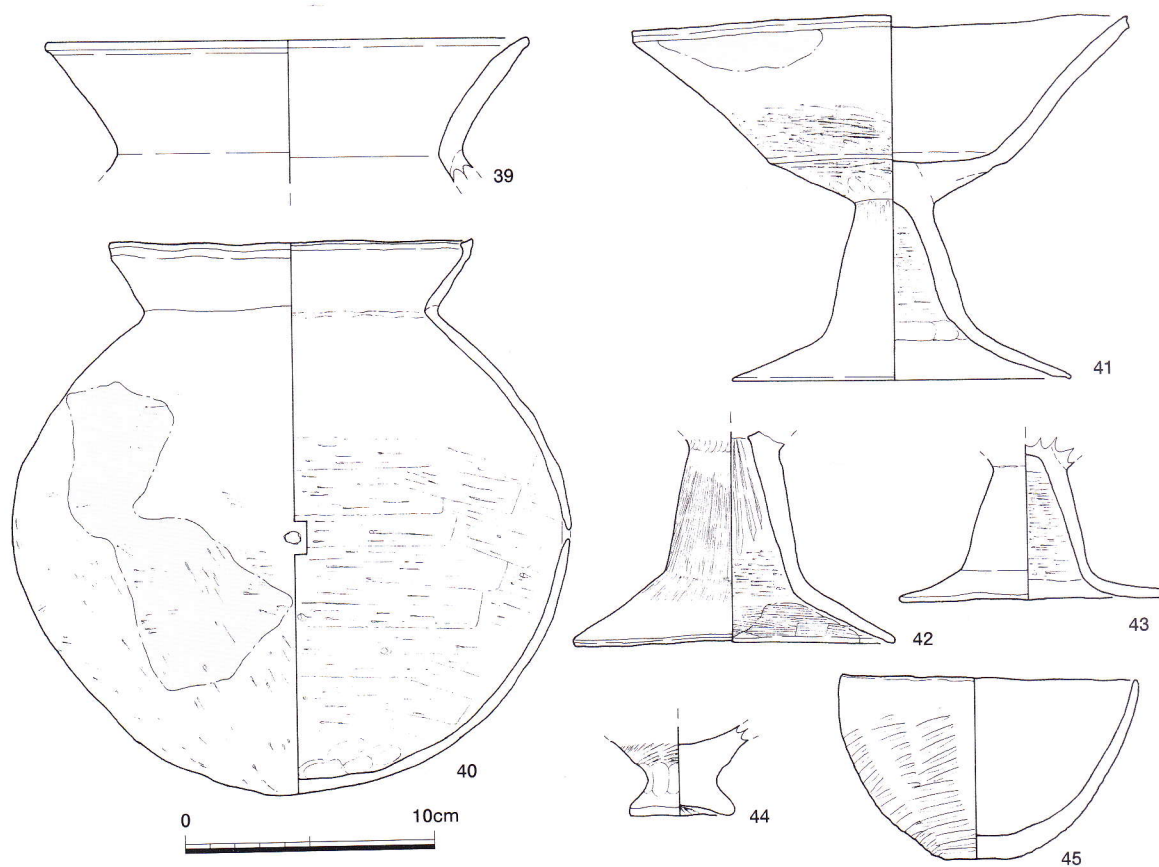
外面はヨコ方向のヘラミガキの後、口縁部をヨコナデ調整する。屈曲部には粘土補充時の指オサエの痕跡がみられる。脚部はラップ状にひらき、外面はタテ方向のヘラミガキ調整が僅かに観察でき、内面はヨコ方向のヘラ削りによって調整される。42・43は脚部である。42はラップ状にひらく形態のもので、外面はタテハケによる調整後、裾部をヨコナデ調整する。内面裾部はヨコハケ調整、内部はヨコ方向のヘラ削りによって調整される。また内面には黒斑が1箇所みられる。43は裾部がほぼ水平にのびる形態のものである。脚内部はヨコ方向のヘラケズリによって調整される。

44は製塩土器である。脚台端部は短くひらき、底部は僅かに窪む形態のもので、ナナメ方向のタタキによる成形後、ナデによる調整がみられる。

[SK-7出土土器] (第17図45、図版23)

45は土師器の鉢で、口径6.8cm、器高5.5cmを測る。半球状の形態を呈し、底部は小さく、平らなものである。外面はナナメ方向のタタキにより成形し、部分的にタテ方向のナデ調整によってナデ消す。内面はタテ方向のナデによる調整である。

以上、SK-5・7・8出土遺物は、古墳時代前期に位置づけられるもので、その中でもSK-5・8は近接した時期の土器群と考えられる。また、その他図示していないが、古墳時代後期の遺物としてP-23・27などから後期後半の須恵器杯身が出土している。



第17図 遺物実測図4

(3) 奈良～室町時代の土器 (第18図、図版23・24)

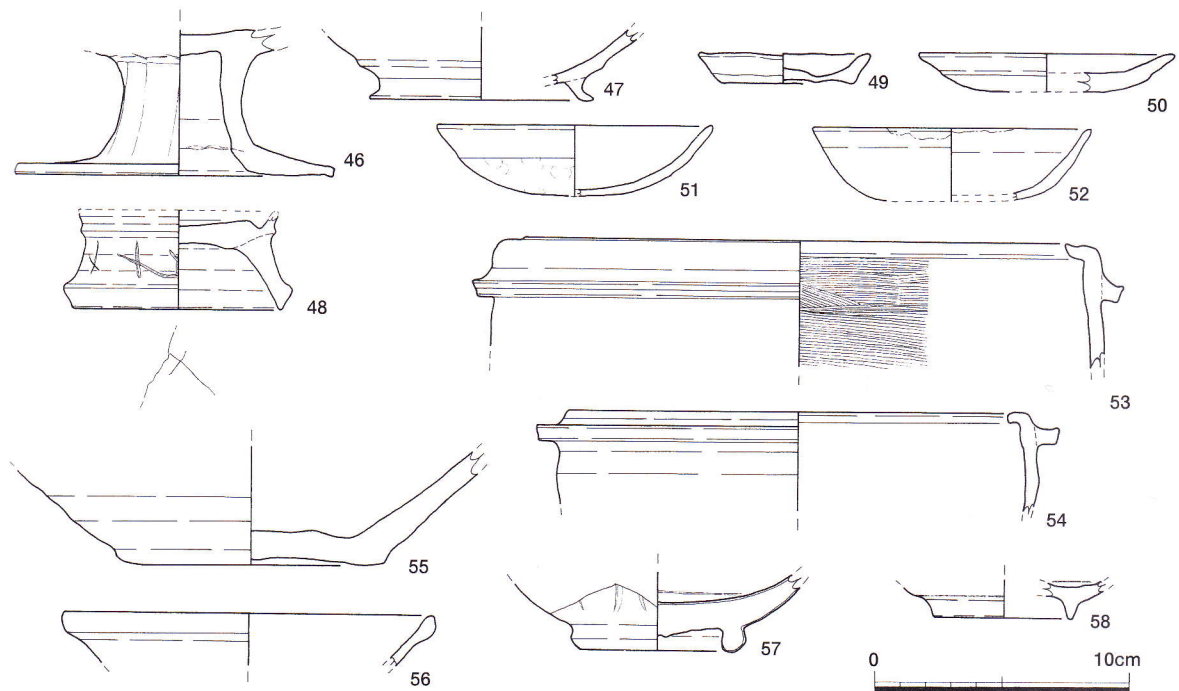
46は土師器の低脚高杯で、裾部がほぼ水平にのびる形態を呈する。脚部外面には、タテ方向のヘラケズリによって11面の面取り調整が施される。第2層から出土した。

47は回転台成形による黒色土器の椀で、外側にふんばる形態の高台を有する。内面のヘラミガキは、磨滅のため不明である。48は硯面部7.8cm、磨墨面5.6cm、器高3.9cmを測る小形の須恵器円面硯である。磨墨面は使用のため非常に平滑であり、硯面端部は欠損するが、短く直立するものと考えられ、脚台部との境には突線状に僅かな稜がめぐる。脚台部にはスカシ孔は認められないが、「×」字状のヘラ描きが認められ、脚台径から復原できるヘラ描き文様の数は12箇所である。また内面ほぼ中央部、磨墨面裏面にも彫りが非常に浅い「×」字状のヘラ記号が認められる。これらの出土位置は、47がSK-12、48が第2層からの出土である。

49～52は土師器の皿である。いずれもナデと指オサエによって成形し、口縁部をヨコナデによって短く外反させる形態のものである。49は口径6.7cm、器高1.2cmを測る扁平な小皿で、底部は平底である。50も扁平な器形を呈するもので、口径10.0cm、器高1.5cmを測る。全体的に厚手なつくりであり、口縁部と体部の境は強いヨコナデ調整によって段をなす。51は口径10.8cm、器高2.8cmを測り、49・50とは異なり、やや薄手で、器高も深いものである。52も口径に比して器高が深い形態を呈するもので、口径11.0cm、器高2.9cmを測る。口縁端部には煤の付着が認められることから、灯明皿としての用途が想定できる。これらの出土位置は、49～51がSK-2、52がSD-4である。

53・54は土師器の釜である。ともに体部から口縁部にむかって直立する形態を呈し、口縁端部に至って内側に屈曲させるものである。53は口径23.2cmを測り、口縁端部を上方につまみ上げるもので、内面にはヨコハケ調整がみられる。54は口径18.2cmとやや小形の釜で、全面をナデによって調整する。53・54ともに、鏝以下には煤の付着が認められる。SD-4から出土した。

55は、底径10.4cmを測る東播系須恵器のこね鉢である。全面ロクロ成形で、底部は糸切り未調整



第18図 遺物実測図5

である。内底面は、使用のためやや平滑である。SK-2から出土した。

56～58は、輸入陶磁器である。56は口径14.6cmを測る中国製の白磁碗であり、口縁部は玉縁状にやや肥厚する。57は、底径6.0cmを測る中国製の青磁碗である。釉は均一に施され、淡緑色に発色するものであり、外面には片切彫によって蓮弁を表現し、内面見込み部には直径7.4cmの圏線内に花文をスタンプする。58は、底径5.4cmを測る中国製の染付碗である。釉は高台内を除いて施されるが、内面は輪状に釉剥ぎが行われる。残存部においては、呉須によって圏線が描かれる。これらの出土位置は、56・57が第3層、58が第2層である。

この他図示したもの以外では、平安時代の土器としてSD-4から黒色土器碗、SK-12から土師器碗などが、鎌倉時代の土器では、SK-6、SK-12から瓦器碗・皿などが出土している。また、室町時代の土器としては、第2層から備前焼の搦鉢、第3層から瓦質土器の羽釜、SD-2から土師器釜、SK-12から瀬戸美濃系の天目茶碗などがある。

(4) カマド (第19図 59・60、図版24)

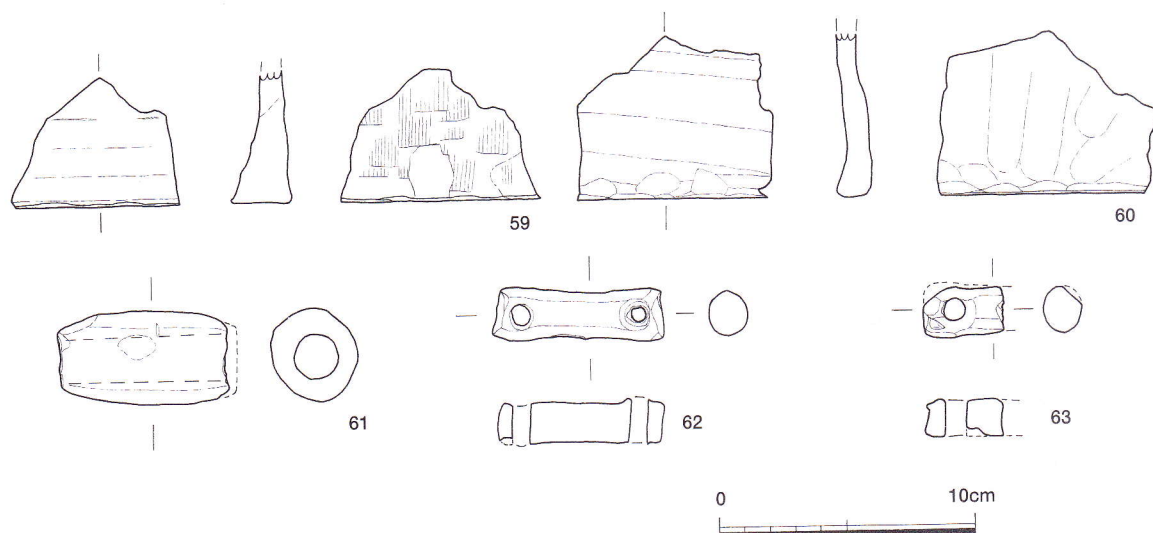
59・60はカマドの底部である。59は接地する下端面をほぼ水平に作られたもので、内外を大きく肥厚させ安定感をもたせている。外面の調整は比較的粗いタテ方向のハケを用い、また内面は強いヨコ方向のナデ調整によって仕上げている。60は下端部をやや内側に肥厚させて丸くおさめたもので、内外面ともに強いヨコナデと指頭圧痕が明瞭に残る。

これらの出土位置は、59が第2区の第3層、60がSK-12であり、ともに混入した遺物と考えられるもので、時期的には古墳時代の所産とみられる。

(5) 土錘 (第19図61～63、図版24)

61は、管状土錘で一部欠失しているが残存長6.4cm、最大径3.7cm、孔径1.8cmのもので、重量は70.1gである。色調は淡褐色で、胎土には結晶片岩が含まれている。

62・63は有孔土錘である。ともに両端面をへら状の工具によって切断した後、両側端に穿孔を施したものである。62は長さ6.5cm、中心部の最大径1.7cmのもので、重量は24.5gを量る。孔径は7mm



第19図 遺物実測図 6

を測り、左側は上端部から、右側は下端部からそれぞれ穿たれている。

これらの出土位置は、61が SD-4、62が SK-8の第1層、63が SK-12であり、また61の胎土には結晶片岩が、62・63には結晶片岩、石英、赤色軟質粒が含まれている。

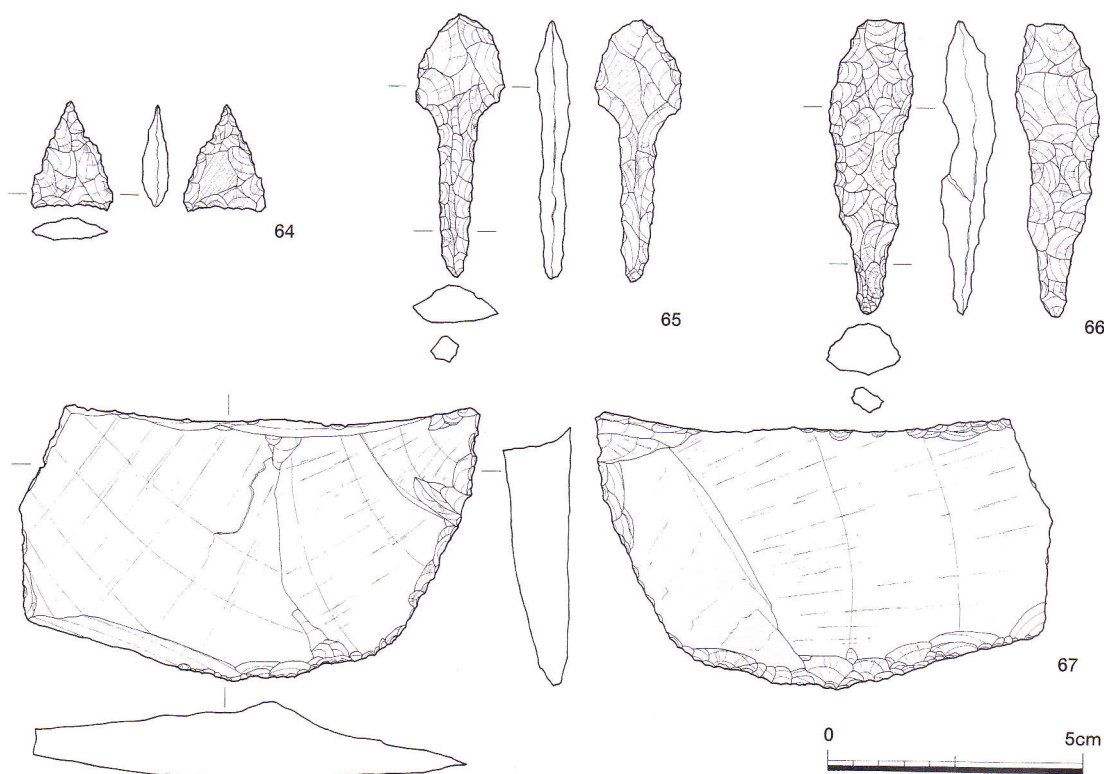
(6) 石器 (第20・21図、図版25)

64～67は、サヌカイト製の打製石器である。

64は平基式石鏃で、長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm を測り、重量は0.5gである。板状の素材剥片の周縁を、左面は先端から基部、右面は基部から先端に向けて細部調整する。第3層から出土した。

65・66 は、石錐である。65 は頭部と錐部の境が明瞭な形態のもので、長さ 5.2cm、幅は頭部が 1.7cm、錐部が0.5cm、厚さ0.7cm で、重量は3.2g を量る。66は頭部と錐部の境が不明瞭で、長さ5.9cm、幅は頭部が 1.6cm、錐部が 0.5cm、厚さ 1.0cm とやや厚みのある素材剥片からつくられたもので、重量は 7.2 g を量る。これらは頭部については比較的粗いが、錐部の調整は細かく、錐部から頭部にかけて細部調整が行われ、66の側縁部には刃潰しが行われている。また、使用による錐部の磨滅痕は顕著ではない。これらの出土位置は、65が第4層、66が SK-20である。

67は、第3層から出土したスクレイパーで、長さ9.2cm、幅5.5cm、厚さ1.3cm、重量は72.1g を量る。両面に大剥離面を残したやや厚みのある板状素材に、右側縁及び下縁部を中心に細部調整を施し、右側縁部に刃部をつくり出す。また、調整は両面ともに右から左に向けて施されており、下縁部は調整の後に刃潰しが行われる。

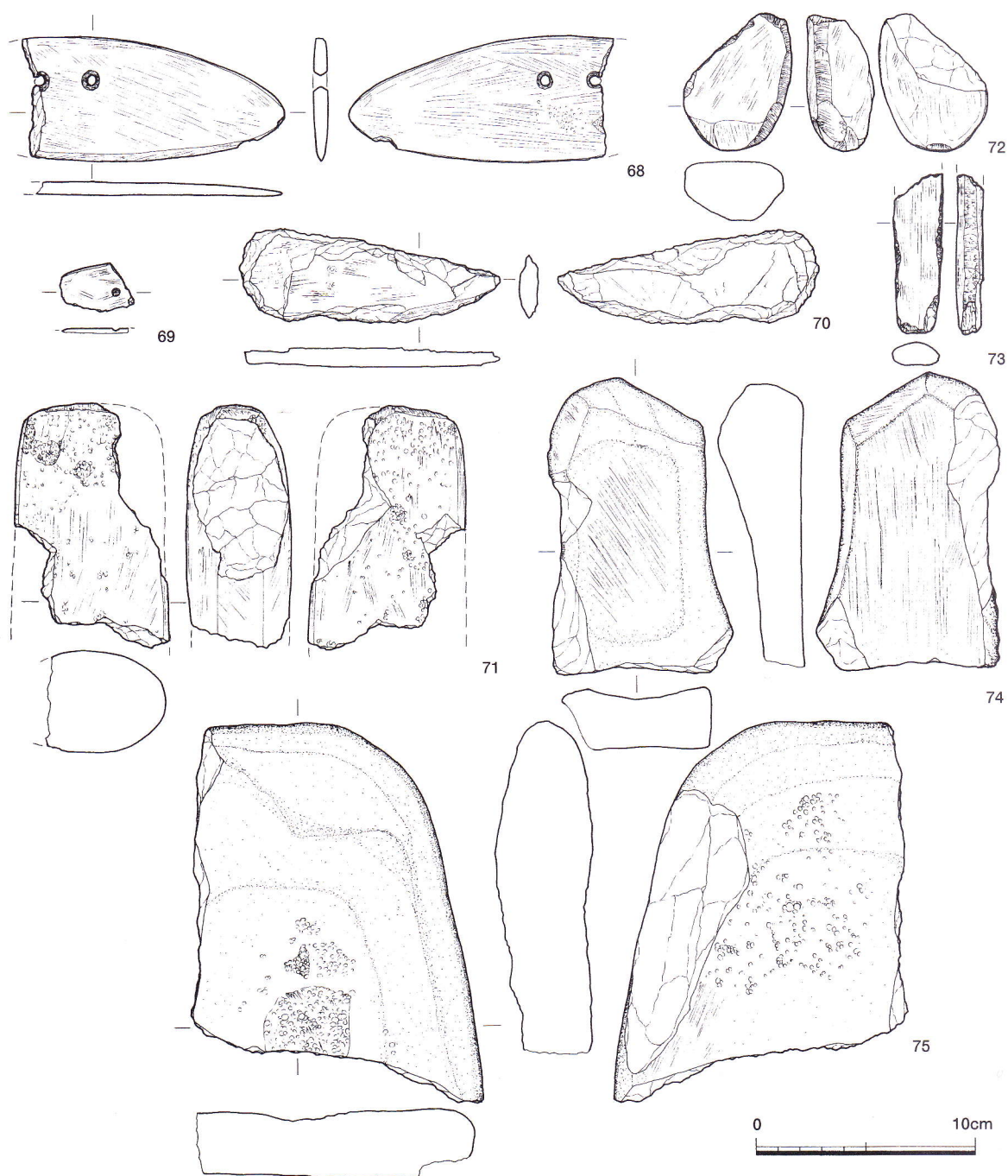


第20図 遺物実測図 7

68～71は、磨製石器である。

68は残存長12.0cm、幅5.7cm、厚さ0.6cm、重量69.0gを量る結晶片岩製の石庖丁である。形態は直線刃で半月形を呈するものと考えられ、刃部は片刃であり、片側から研磨が施され、明確な稜が認められる。紐孔の内径は0.5cm、外径は0.8cmと比較的小さなものである。69は石庖丁未製品の剥片で、直径4mmの紐孔が認められることから、穿孔中に破損したものと考えられる。これらの出土位置は、68が第2層、69がSK-15である。

70は結晶片岩製の石鎌で、長さ11.9cm、幅4.3cm、厚さ0.9cmを測る。多くは剥離面のままで、研磨痕は部分的であることから未製品と考えられる。刃部は一部に刃付けが行われており、片側から研磨が施さ



第21図 遺物実測図 8

れるが、その形態から直線刃と考えられる。第2層から出土した。

71は花崗岩系の太型蛤刃石斧で、刃部は欠損している。基端部には敲打痕が認められることから、叩石として転用された可能性があるが、製作時の調整敲打とも考えられる。P-96から出土した。

72～75は礫石器である。

72・73は叩石である。72は蛇紋岩系の河原石を用いたもので、側縁部を中心に線状の擦痕が認められる。73は棒状を呈する形態のもので、石材は結晶片岩である。側縁及び下端部には敲打痕がみられ、上面には擦痕もみられることから、磨石としての用途を合わせもつ複合石器と考えられる。これらの出土位置は、72・73ともに第3層である。

74・75は、砂岩を用いた台石である。74は、欠損部を除くほぼ全面に擦痕が認められ、上面中央部は凹むが、側縁・下面部は平滑で面をもち、右側縁部は使用により弧状を呈する。第4層から出土した。

75は、両面ともに中央部が敲打により凹む。

敲打痕は上面については中央部に局部的に施されるが、下面は広範囲に及び、一部には擦痕が認められることから、上下面で用途が異なる可能性がある。また、上縁部には二次焼成の痕跡が確認できる。第3層から出土した。

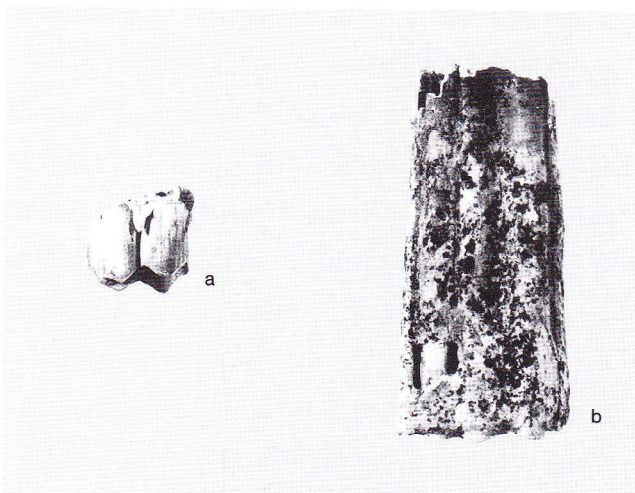


写真1 自然遺物（馬歯）

（7）自然遺物（写真1）

自然遺物の中で代表されるものに馬歯がある。馬歯はSD-4 (a)と第2区第3層 (b)からそれぞれ1点ずつ出土した。

7. まとめ

これまで、太田・黒田遺跡において弥生時代前期の明確な遺構を検出した調査例として、1980年から1981年にかけて和歌山県教育委員会が行った第15・16次調査があり、東側約150mに位置する。この調査では、前期末の竪穴住居1棟を検出し、太田・黒田遺跡において初めて弥生時代前期の遺構を検出したものである。1995年には北西側約220mの地点における当財団が行った第26次調査において前期の土坑2基と大溝1条が検出された。そして、当調査地の南側隣接地における当該年度の第45次調査において前期末の環濠を2条検出し、第26次調査検出の大溝の延長部であるものと判断された。これらの状況から、当遺跡は弥生時代前期末には既に環濠集落であったものと確認できた。そして、当地がこの前期集落の範囲内にあたることからその時期の様相確認がひとつの課題とされた。

今回の調査では、弥生時代の遺構面を3面検出した。まず畿内第Ⅰ様式の新段階に比定できる第4遺構面では、土坑2基を検出した。この第4遺構面で検出した遺構は、近接地という利点から層

位的にとらえて前期環濠と同一面上に検出されたものとみられ、遺物の時期からも併行関係にあるものと考えられる。しかしながら、これまでの調査において検出した前期の遺構は、畿内第Ⅰ様式の新段階に比定できるものであり、さらに古い段階の検出には至っていない。今回の調査のなかで、壁面土層観察から更に下層にあたる第7層上面において確認した炭の堆積状況などからみて、古い時期の生活面が存在する可能性が指摘できるものである。

弥生時代中期では、初頭にあたる第3遺構面で竪穴住居や土坑を、また後出する時期の遺構を第2遺構面においてそれぞれ検出したことから、集落中心部に推定できる旧土地区画の東側にあたる部分では、縁辺部に比べ遺構等の残存状態が良く、弥生時代中期においても生活面が2面存在することが明らかとなった。また今回検出したSB-2は、これまで検出されている竪穴住居のなかで最も南西部に位置するものとして注目できる。

次に古墳時代では、第2遺構面において前期の布留式併行期に比定できる竪穴住居や土坑を検出した。古墳時代の遺物量は弥生時代の遺物量に次いで多く、この点からもこれまでの調査地点と比べて特殊な様相であるものとみられる。当遺跡ではこれまで古墳時代を通して溝などの遺構が多数検出されていたが、竪穴住居の検出は本調査におけるSB-1が初例である。

古墳時代以降では、平安時代の所産と考えられる須恵器円面硯が1点出土した。平安時代の円面硯報告例は少なく、和歌山市内では紀ノ川北岸の平安時代の集落跡である高井遺跡などに出土例がある。このような状況から、今回出土した須恵器円面硯は重要視されるもののひとつとしてあげられる。

鎌倉時代から室町時代にかけては、室町時代のSD-2が鎌倉時代のSD-4を踏襲して掘削されていることや旧土地区画の方向性もこれらに踏襲されていることなどが明らかである。そして、当地が太田城の推定地にも含まれていることから、このN-14°-Eとやや東に振っている方向性が土地区画の方向性のひとつとして今後検討を要するものである。

以上のように、多数の遺構・遺物を検出し、当地が弥生時代を中心とした太田・黒田遺跡の中心部により近接することが明らかとなり、多数の遺構面や重要遺構などの多くの成果を得たものといえる。しかし、今回調査に至らなかった下層の状況確認や復原が困難であった掘立柱建物など様々な課題が残ることも事実であり、これらは今後の調査に期待したい。

【参考文献】

『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 1995年

『高井遺跡第2次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2000年

『太田・黒田遺跡第45次発掘調査現地説明会資料』和歌山市教育委員会・（財）和歌山市文化体育振興事業団 2000年

西庄遺跡 第2次調査

1. 調査に至る契機と経過

和歌山市西庄及び本脇周辺に所在する西庄遺跡は、標高4.5m前後の砂堆に位置する海浜集落である(第1図)。この遺跡の範囲は東西約900m、南北約400mに広がっており、古墳時代の大規模な製塩遺跡として知られている。

調査地周辺においては、近年、財団法人和歌山県文化財センター(以下、県文化財センター)が、県道西脇・山口線道路拡幅工事に伴う発掘調査を継続的に行っている。その結果、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などが確認されており、各調査地点における主体をなす遺構の相違から、遺跡の西部を作業域、中央部を居住域、東部を墓域として遺跡内の土地利用について復原されている。さらに、当財団が平成10年に行った第1次調査では、和歌山県内で6例目となる滑石製の子持勾玉が出土し、製塩遺跡としての性格に新たな一面を示唆するものとして注目されている。

今回の調査は、和歌山市西庄575-6番地に個人住宅が建築されることになり、この現場が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載され、古墳時代から平安時代の遺物散布地として周知されている西庄遺跡(遺跡番号38)の範囲内に位置するため、遺跡の範囲確認とその性格を把握する目的で実施することになった。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同市教育委員会から委託を受けて行った。また現地における調査は、平成12年11月8日から同年11月24日までの約2週間を要した。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

西庄遺跡周辺の海岸部は、県内でも製塩遺跡が多数分布する地域である(第2図)。本遺跡周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代のものとして調査地の北東約1 kmに位置する西庄Ⅱ遺跡(22)や、東約7 kmに位置する鳴滝遺跡及びその東に隣接する園部遺跡からナイフ形石器が採集されている。縄文時代以降、紀伊水道に面した海岸部に小規模ながら海浜集落が出現する。加太遺跡(14)、大谷川遺跡(17)はその一例で、大谷川遺跡は縄文時代から弥生時代までの海浜遺跡として知られており、周辺から銅鏃・銅製釣針などが出土している。その他、弥生時代に出現するものとして加太駅北方遺跡(16)などがある。この遺跡は、弥生時代から古墳・奈良時代まで続くと考えられ、立地など考え合わせ製塩を生業にしていた人々の集落と考えられている。古墳時代から奈良時代には、深山遺跡(19)において製塩炉が確認されるなど、西庄遺跡から西側の海岸部は縄文時代以降、海と深くかかわってきた遺跡が数多く分布する地域である。

次に、平野部に所在する遺跡については、縄文時代のものとして、木ノ本Ⅱ遺跡(24)がある。この遺跡からは晩期後半の突帯文土器が出土している。弥生時代のものとしては木ノ本Ⅰ遺跡(23)がある。この遺跡からは、弥生時代後期末から古墳時代前期の竪穴住居が数棟検出されている。古墳時代の遺跡については、まず集落遺跡としては榎原遺跡(29)、さらにその西約500 mに立地する中野遺跡(34)がある。これらの遺跡は、現県道粉河・加太線に沿うように立地しているが、土師器・須恵器が表採されているのみでその様相は明らかではない。また古墳については、本遺跡の西約2 kmに古墳時代中期の大型前方後円墳である車駕之古址古墳(32)が立地している。車駕之古址古墳は全長86 mを測り、造り出しと盾形の周濠をもつ前方後円墳である。周濠及び外堤まで含めた規模は、全長約120 mであり和歌山県内で最大規模を測るものである。墳丘は2段築成で2段目はすでに削平されていたが、造り出し及び周濠の中からいわゆる淡輪技法をもつ円筒形埴輪や、圀形埴輪などの形象埴輪が、また墳丘盛土内から金製勾玉が出土した。車駕之古址古墳の西約150 mには、前方後円墳の茶臼山古墳(31)や南東約100 mには直径約30 mの円墳である釜山古墳(33)が立地しており、これらを総称して木ノ本(釜山)古墳群と呼ばれている。また、古墳時代の集落遺跡としては、このような環境のなか古墳時代前期から奈良時代にかけて多数の製塩炉と多量の製塩土器を使用し、塩を生産していた西庄遺跡(1)がある。

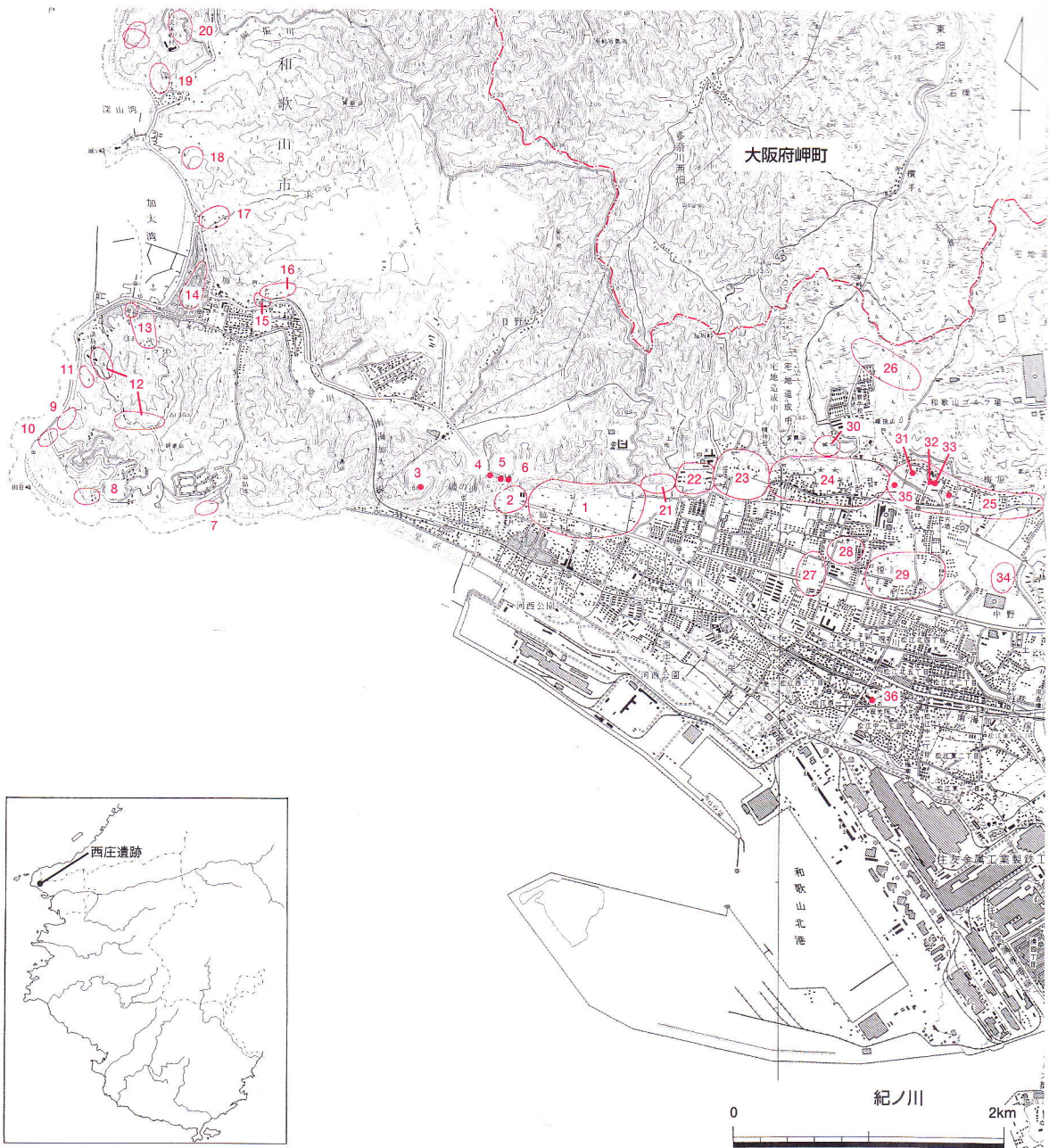
古代においては、海岸線に沿って大規模な砂堆が形成されていたために、古紀ノ川は現在のように直線的に西流していたのではなく、木ノ本古墳群の南東約2 kmの地点において屈曲して南流し、和歌山城のある岡山の東を流れていたとされている。よって西庄遺跡などが立地する山麓の南側は、現在のように陸地化されておらず、ラグーン(潟湖)が形成されていたと考えられており、車駕之古址古墳周辺の微地形を復原された額田雅裕氏によって、木ノ本古墳群は沿岸州をなしていた砂層を基盤に立地すると指摘されている。

奈良時代の西庄・加太地域は、平城京から海部郡可太郷(加太)の塩が調として都に納められたことを示す木簡が出土しており、中央に塩を納めていた地域とされている。この地域における平安時代以降の遺跡については、中野遺跡や木ノ本Ⅲ遺跡(25)などがある。中野遺跡は、従来から古墳時代の遺跡として知られていたが、当財団が平成10年に行った発掘調査において、雑賀衆の中野城と関連すると考えられる大溝が検出され、そこから輸入陶磁器、国産陶磁器をはじめ大量に室町時代

の遺物が出土した。また木ノ本Ⅲ遺跡は、砂堆に掘られた室町時代の石組井戸などを数多く検出したもので注目されるものである。

【参考文献】

額田雅裕「和歌山市木ノ本付近における微地形と遺跡の立地」『和歌山市立博物館研究紀要』5 1990年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	西庄遺跡	古墳～中世	10	田倉崎Ⅱ遺跡		19	深山遺跡	古墳～奈良	28	木ノ本小学校Ⅱ遺跡	古墳
2	磯脇遺跡	中世	11	平の谷遺跡		20	深山第2砲台跡	明治	29	榎原遺跡	古墳
3	磯の浦1号墳	古墳	12	田倉崎砲台跡	明治	21	平の下遺跡		30	城山遺跡	安土・桃山
4	磯の浦2号墳	古墳	13	加太南遺跡	古墳	22	西庄Ⅱ遺跡	旧石器	31	茶臼山古墳	古墳
5	磯の浦3号墳	古墳	14	加太遺跡	縄文～中世	23	木ノ本Ⅰ遺跡	弥生	32	車駕之古址古墳	古墳
6	磯の浦4号墳	古墳	15	加太Ⅱ遺跡	弥生	24	木ノ本Ⅱ遺跡	縄文	33	釜山古墳	古墳
7	浜遺跡		16	加太駅北方遺跡	弥生～奈良	25	木ノ本Ⅲ遺跡	中世	34	中野遺跡	古墳～中世
8	船出遺跡		17	大谷川遺跡	縄文～弥生	26	木ノ本Ⅳ遺跡	縄文・中世	35	木ノ本経塚	中世
9	田倉崎Ⅰ遺跡	縄文	18	加太砲台跡	明治	27	木ノ本小学校Ⅰ遺跡	古墳	36	松江経塚	近世

第2図 西庄遺跡周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

西庄遺跡では、遺跡の中央部を東西方向に横断する県道の拡幅工事が計画されたため、平成7年度から、県文化財センターによって県道西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査が第6次調査まで行われている。当財団による調査は、平成10年度に県文化財センター第4次調査地点の南側隣接地において個人住宅建築に伴い発掘調査を行っている(第3図)。これらの調査の結果、古墳時代から鎌倉時代の遺物包含層が確認され、遺跡の範囲が東西500mにも及ぶことや集落の東側エリアが居住域、西側エリアが作業域と2つに分かれること、また遺跡の性格として古墳時代を中心として漁撈と土器製塩を生業とした海浜集落であることなどが明らかとなってきた。

まず、県文化財センターの調査では、第2次調査において東西4.2m、南北4.5mの平面プランが方形で、東壁に竈をもつ5世紀後半から末頃の竪穴住居が検出されている。この住居は使われなくなった後ごみ捨て場として利用されたようで、土器の他、多量の獣骨・魚骨・貝殻が出土している。第3次調査では、5世紀前半から後半の竪穴住居が8棟、掘立柱建物9棟以上、古墳1基、さらに円形や隅丸長方形の土器製塩に用いられた石敷製塩炉が40基以上が検出されている。炉の周辺からは多量の製塩土器が廃棄された状態で出土し、土器類の分析から製塩は5世紀から6世紀にかけて最盛期をむかえることが明らかとなった。出土遺物には釣り針、擬似餌、土錘などの他、滑石製の子持ち勾玉・白玉・有孔円板・紡錘車、碧玉製の管玉、鹿角刀装具などの祭祀遺物がみられ、ハマグリやサザエ、カツオやマグロなどの動物遺体なども多量に発見されている。第4次調査では、24棟の竪穴住居が検出された。そのうち古墳時代前期の竪穴住居が2棟確認されているが、残り22棟の住居のうち5世紀から6世紀のものが過半数をしめる状況から、製塩炉と同様にこの時期が西庄遺跡の最盛期であったことが明らかとなった。この第4次調査では、13世紀代のものと考えられる土坑墓が8基検出されている。そのなかで、6号墓と呼ばれるものには瓦器碗と和鏡が副葬されていた。これらは、西庄遺跡の中世段階の状況を知る貴重な資料である。第5次調査では、古墳時代の竪穴住居3棟、石敷製塩炉2基、古墳4基、鎌倉時代の土坑墓が4基検出されている。古墳については、第3次調査において1基検出されていることから、合計5基の古墳が確認されたことになり、「西庄2～5号墳」の名称が与えられている。埋葬施設には3号墳が竪穴式石室を採用している他は、詳細が不明の5号墳を除き、すべて横穴式石室を採用している。墳形は2・4号墳が13m前後の円墳であり、3・5号墳が5m前後の円墳である。その中でも3号墳からは、20歳代の女性の人骨が検出され、頭蓋骨や大腿部などは遺存していたが、手足の指の小さい部位の骨がほとんど検出されなかったことから、再葬されたものと考えられている。また、4号墳は南に開口する横穴式石室であり、玄門部は袖石が内部に突出することや玄室前道基石を置くことから岩橋千塚古墳群の横穴式石室との類似性が指摘されている。この石室にも再葬の痕跡がみられるようで第1～3次床面の3面が確認され、それぞれ6世紀後半・7世紀前半・7世紀中頃の3時期の年代が与えられている。

当財団による平成10年度の調査では、製塩土器を多量に含む古墳時代後期の遺物包含層が確認され、それを除去した面において古墳時代の土坑などを検出した。この調査では、和歌山県内で6例目となる滑石製の子持ち勾玉が出土し、西庄遺跡では県文化財センター第3次調査で出土したものを合わせ2例目である。これらは西庄遺跡から出土する祭祀遺物として注目されるものである。

以上、これまでの調査によって西庄遺跡については、東側が墓域、中央部が居住域、西側が作業域と

いう遺跡内部の実態が明らかになりつつある。

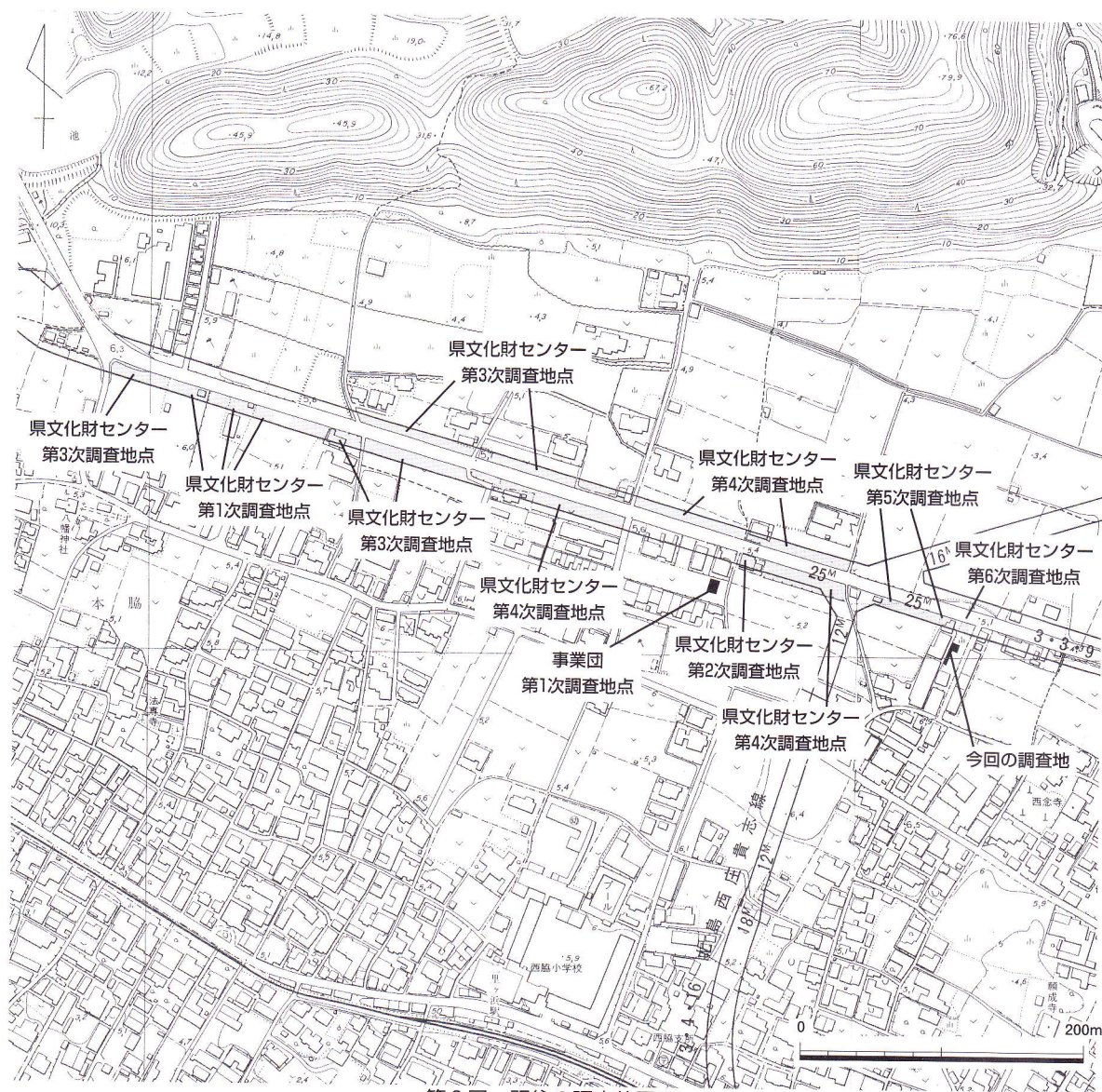
【参考文献】

『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1997年

『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1998年

『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1999年

『和歌山市内遺跡発掘調査概報一平成10年度一』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2000年



第3図 既往の調査位置図

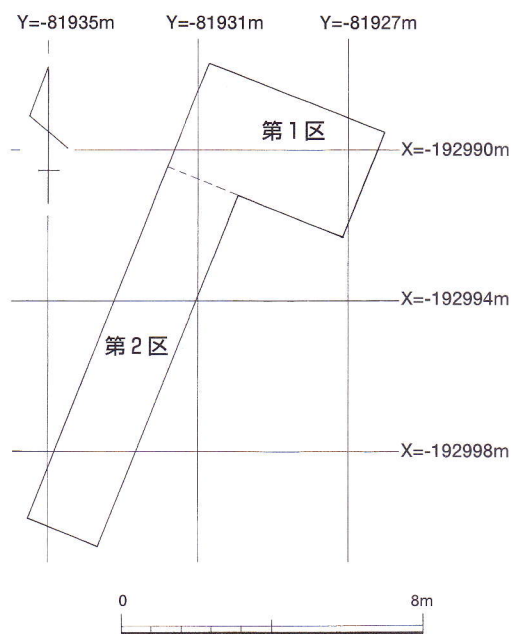
4. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査地の現況は、宅地である(図版 26 上)。今回の調査地は遺跡の南東部分に位置し、北隣は県文化財センターが調査した西庄遺跡第6次調査地点である。この調査では、古墳時代から鎌倉時代の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査地周辺は、西庄遺跡の東部に広がる古墳群の範囲内にあたり、横穴式石室をもつ古墳の存在が指摘されている地域である。よって、遺構の連続性と古墳群の南への広がりを確認する目的で逆L字状に調査区を設定した。また地区設定を行い、北から第1区、第2区とした(第4図)。

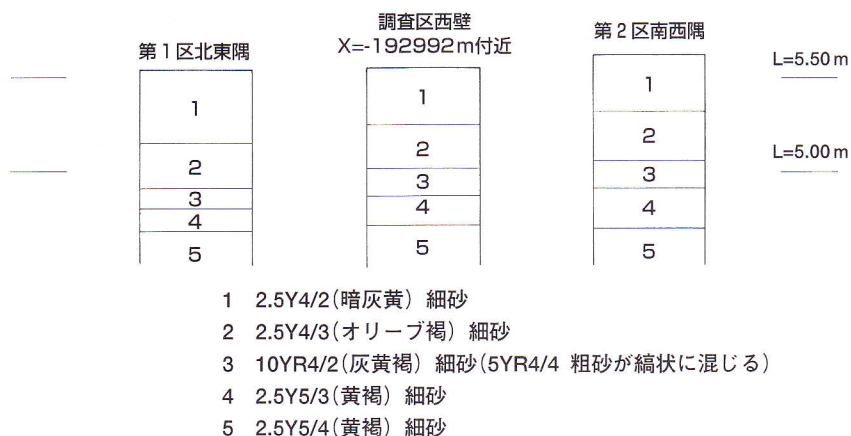
重機による掘削は、上層に堆積した整地土及び旧耕作土(第1層)と江戸時代の耕作土と考えられる第2層について行い、第2層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。遺物の取り上げについては、地区ごとに行い、また土坑などの遺構掘削については、土層観察用のベルトを直行するライン上に設け、写真撮影後、2層以上の堆積が認められる場合には実測図等の記録保存を行った。検出した横穴式石室については、盗掘坑及び石室ホリカタ掘削後、石室床面にサブレンチ1を設定し石室基底石を確認した。また石室内の遺物の取り上げについては、できるかぎり堆積土を篩にかけて取り上げた。図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準に1/20の縮尺を用い、手実測で行った。また壁面土層断面図についても、同じ縮尺を用い、手実測で行った。さらに横穴式石室や礫床などの主要な遺構の実測については1/10の縮尺を用い手実測で行った。土層の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。さらに遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。



第4図 調査地区割図

(2)調査の概要

調査区の基本層序については、第5図に示したとおりである。調査区一帯は砂堆に立地するため堆積土は砂である。まず、調査区の全面には現代の整地土及び旧耕作土(第1層)が30～40cmの厚さで堆積する。第1層下については、オリーブ褐色の細砂(第2層)が約25cmの厚さで堆積している。この第2層からは、遺物がほとんど出土しなかったため堆積の時期については分からないが、層位的にみて江戸時代の遺



第5図 調査値土層柱状模式図

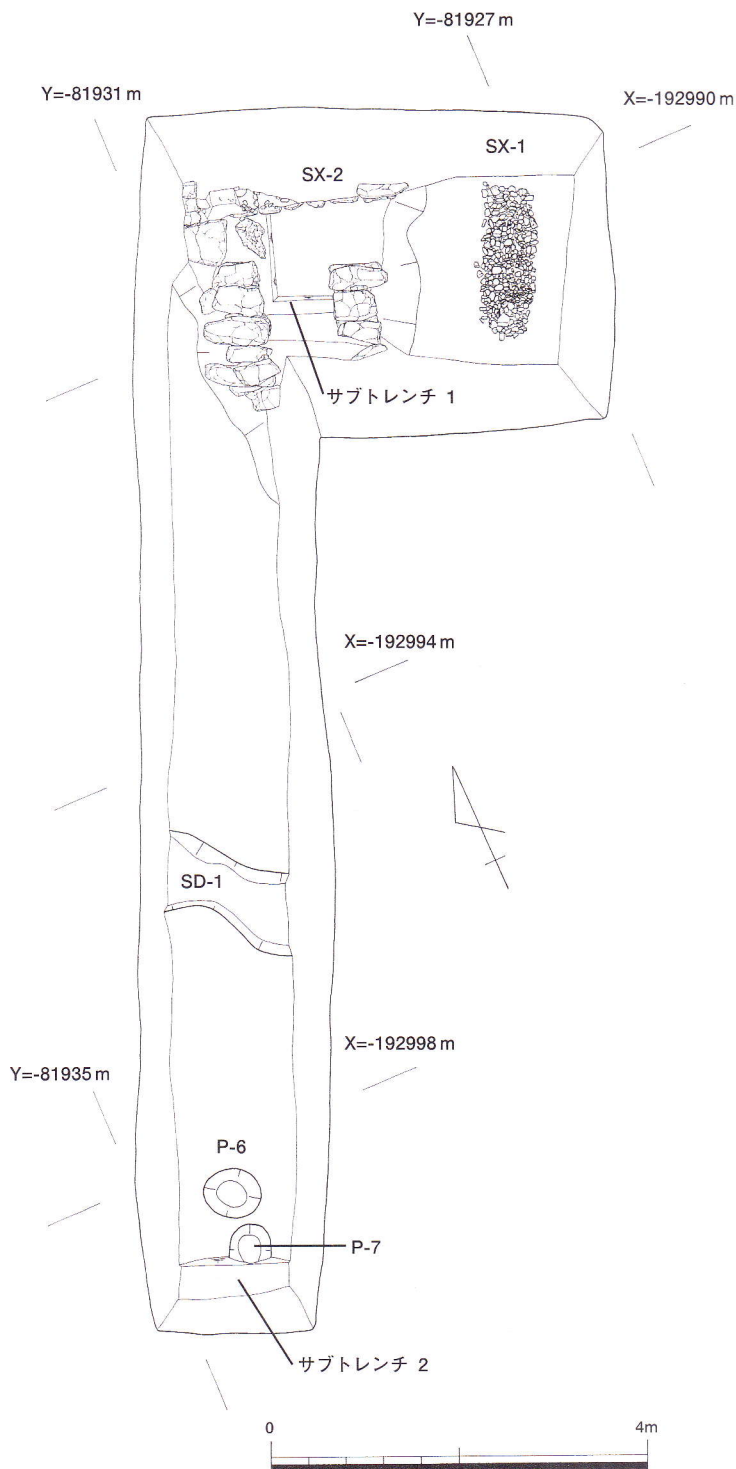
物包含層と考えられる。さらに第2層下には、灰黄褐色の細砂ににぶい赤褐色の粗砂が縞状に混じる第3層が10～15cmの厚さで堆積している。この第3層からは、土師器、瓦器などが出土したことから鎌倉時代の遺物包含層と判断した。第4層は、黄褐色の細砂で15～20cmの厚さで堆積している。第4層は、遺物をほとんど含まず堆積の時期については分からないが、次に述べる第5層上面において古墳時代の遺構が確認できたことから古墳時代から平安時代にかけての範疇におさまる遺物包含層と考えられる。第4層下については、第1・2区全面において黄褐色の細砂である第5層が堆積している。第5層は一部を深さ約30cmまで掘り下げたが、遺物が出土しないことなどから自然堆積による無遺物層と判断した。

遺構面については、第5層上面(第3遺構面)と第3層上面(第1遺構面)、また、平面的には検出できなかったが、第2区南壁面土層観察において第4層上面(第2遺構面)から掘削された遺構を確認した。よって遺構面は、合計3面となる。また遺構は、第5層上面では古墳時代後期の遺構を検出し、第3層上面においては鎌倉時代から江戸時代の遺構がみられた。

各遺構面は、第1・2区の壁面土層堆積状況の観察から、第5層上面では標高約4.7m前後を測りほぼ平坦であるのに対し、第4層上面、第3層上面では10～15cmの比高差で南から北にかけて次第に低くなる。

5. 遺構

遺構は、第5層上面において遺構検出を行った結果、古墳時代後期の埋葬施設であるSX-1・2やP-6・7、SD-1を検出し、第3層上面では鎌倉時代のP-1～5、SK-1～3を検出した。以下、古い時期のものから各遺構面ごとに主要な遺構について説明を行う。また、SX-1・2については、SX-1がSX-2に従属する埋葬施設と考



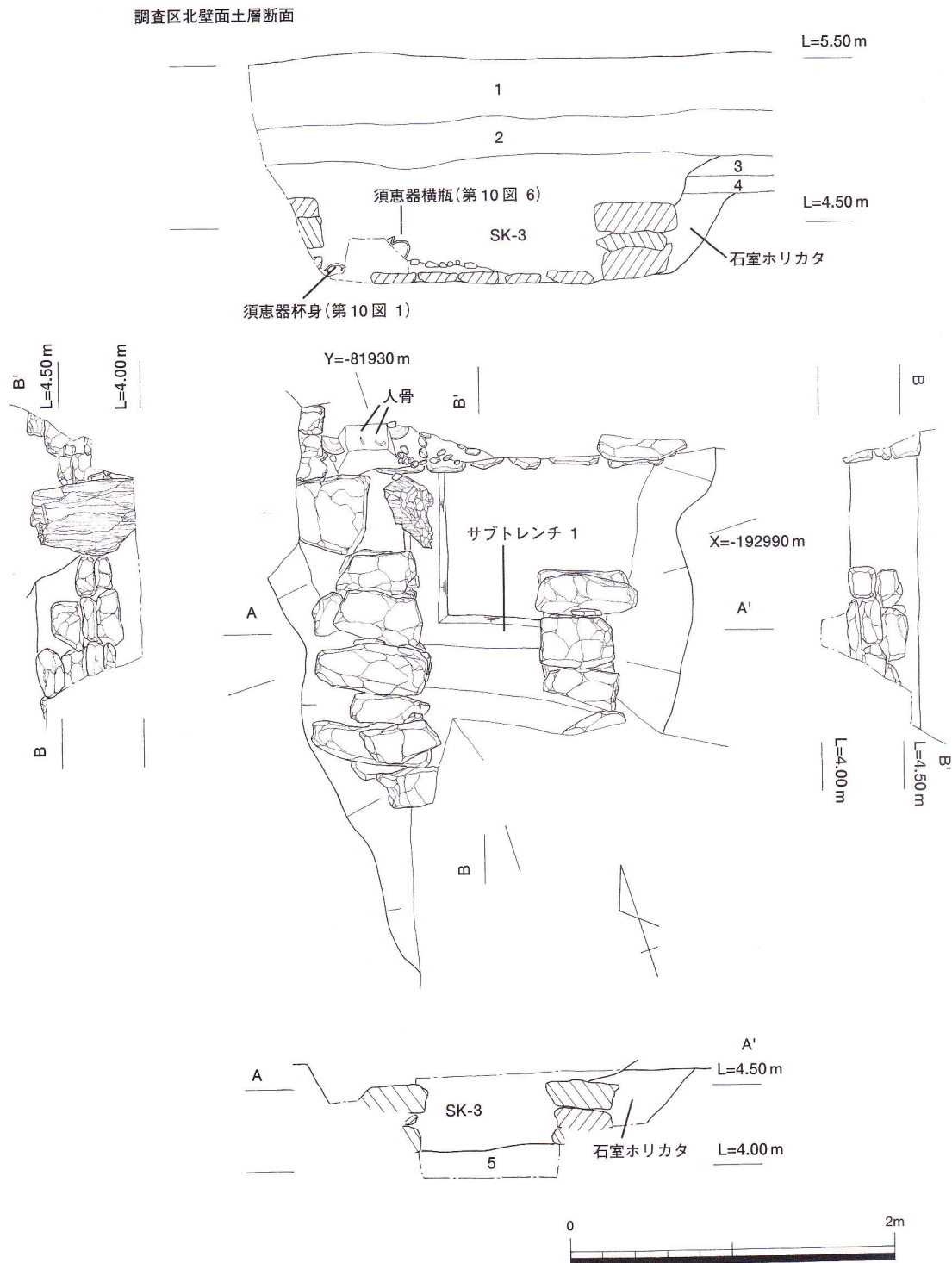
第6図 第3遺構面遺構全体平面図

えられるため、ここでは便宜上 SX-2から説明する。

(1) 第3遺構面検出遺構 (第6図、図版26下、27)

[SX-2] (第7図、図版29、30)

SX-2は、第1区の西側において検出した横穴式石室で羨道、玄門、玄室の一部を確認した。この



第7図 SX-2 遺構平面図及び断面図

石室は第3層上面から掘削されたSK-3によって削平を受けており、玄室から羨道に向かって左側の側壁は、袖石部分の石材がすべて抜き取られている。また両側壁は石室床面から2～4段を残すのみである。羨道の南側については、調査区外へと続くため今回の調査では確認できなかった。玄室の側壁については、第1区北西隅において右側壁を検出し、そこから西へ約2.4m付近で左側壁を検出した。さらに第1区北壁土層断面の観察から玄室床面には板状の石材を用いた敷石が確認できた。石室の平面プランについては、左袖石が欠失しているため復元を要するが、玄室と羨道の位置関係から南に開口する両袖式の横穴式石室になることは明らかである。ただ、羨道右側壁の玄門部には結晶片岩の袖石が用いられ、側壁ラインから幅約10cm、玄室南端まで約50cm程度内側に突出した構造になっている。よって、石室の中軸線で反転させ復元すると、この石室は玄室前道を有することになる。以上の検出状況から石室規模は、羨道検出長1.6m、羨道幅約70cm、玄門幅約55cm、玄室前道長約50cm、玄室幅約1.7mを測り、また石室主軸の方向性は、N-17°-Eである。石室石材については、玄門部の袖石を除き、すべて和泉砂岩である。

玄室内については調査区外に続くため、第1区北壁土層断面において観察した結果、敷石直上にはTK-43型式の須恵器杯身(第10図、1)が逆位の状態で出土し、その上部には3～5cm大の玉石が約8cmの厚さで堆積しており、さらに玉石の直上にはTK-209型式の横瓶(第10図、6)が正位の状態で、また人骨が出土した。よって、SX-2は少なくとも2回の埋葬行為が行われていると考えられ、追葬時には、玉石を用いて玄室床面を再構築した可能性がある。

築造時期については、敷石直上出土の須恵器杯身の型式から6世紀後半の築造とみられる。

[SX-1] (第8図、図版31)

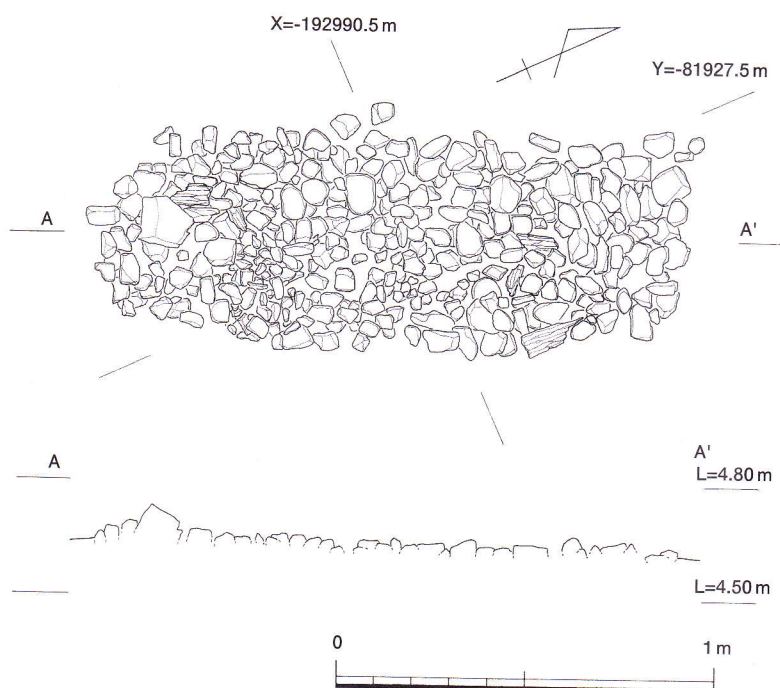
SX-1は、第1区の東側において検出したもので、南北約1.6m、東西約0.6mの範囲に3～15cm大の石を敷き詰めたものである。使用されている石材は、主として砂岩の玉石であるが、結晶片岩・チャートが少量みられる。平面プランについては、現状では南側が楕円状であり、北側は矩形を呈し、その主軸はN-24°-Eの方向性をもつ。

さらに遺構の性格としては、SX-2との位置関係から何らかの埋葬施設と考えられるが、上部が削平を受けておりその構造については明らかにできなかった。ただ、礫床をもつということから土坑状のものではなく、四壁をめぐる構造の埋葬施設と考えられる。

築造時期については、上部から遺物は出土しなかったが、SX-2と同じ方向性をもつことや位置関係から同時期のものとみられる。

[SD-1] (第6図)

SD-1は、第2区のほぼ中



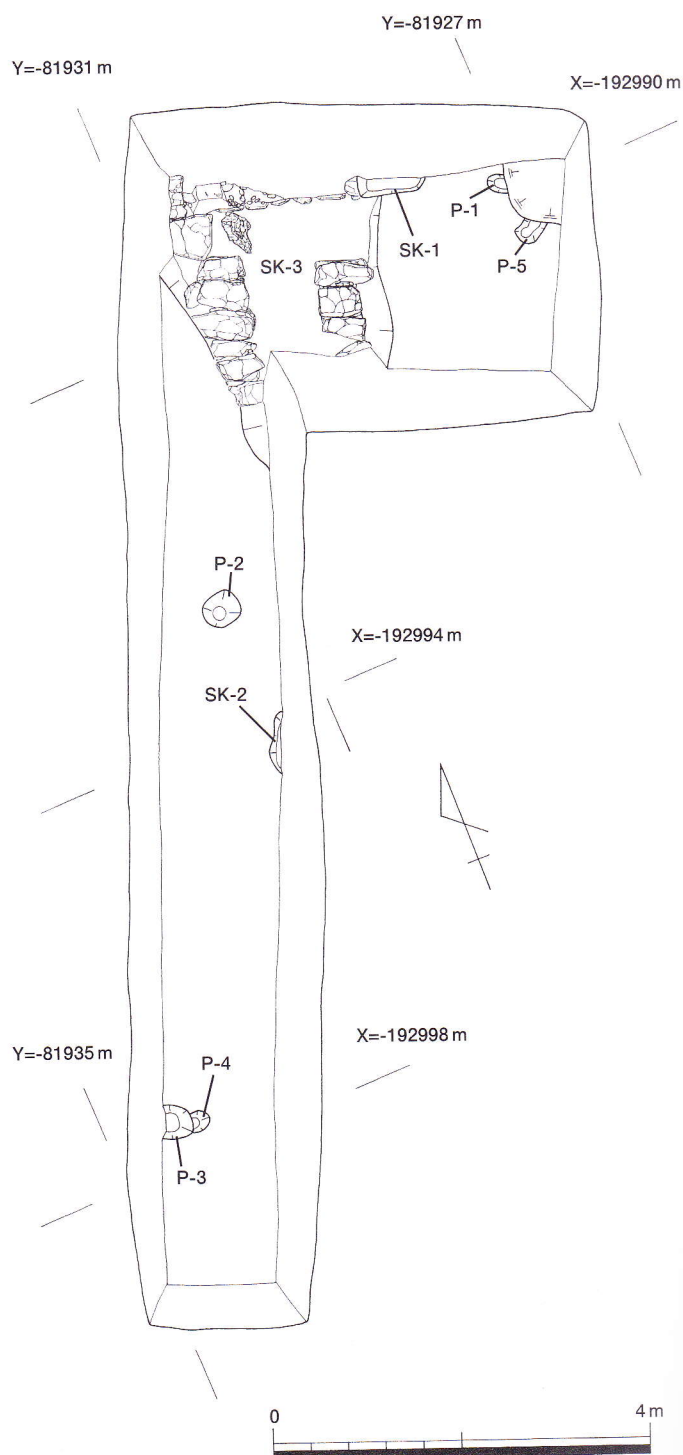
第8図 SX-1遺構平面図及び断面図

中央部において検出したもので検出長約 1.6 m、深さ約 5 cm を測り、平面プランは、やや弧を描くものである。覆土は単一で遺物は全く出土しなかった。層位的にみて古墳時代の遺構と考えられ、SX-2 との位置関係から石室に伴う古墳の周濠の可能性はある。

(2) 第1遺構面検出遺構 (第9図、図版28)

[SK-3]

SK-3 は、第1区西側において検出したもので、掘削の結果、SX-2 の盗掘坑と考えられるものである。北及び南側については調査区外へと続くため平面プランについては分からないが、ほぼ石室ホリカタのプランと重複することや、第1区北壁土層断面の観察から玄室内部まで続くものと考えられ、明らかに石室石材もしくは副葬遺物の採取を目的としたものであるとみられる。また覆土は、単一で石室石材と考えられる砂岩及び結晶片岩が大量に含まれていた。遺構の時期については、出土遺物に瓦器が含まれることから鎌倉時代のものと考えられる。また、TK-209 ~ 217 型式に編年される須恵器杯身1点及び杯蓋3点(第10図、2~5)が覆土の上部から出土した。これらは SX-2 の第2次埋葬に係わる遺物と考えられ、SK-3 が掘削された際、石室床面が削平されたことを示す遺物として注目される。



第9図 第1遺構面遺構全体平面図

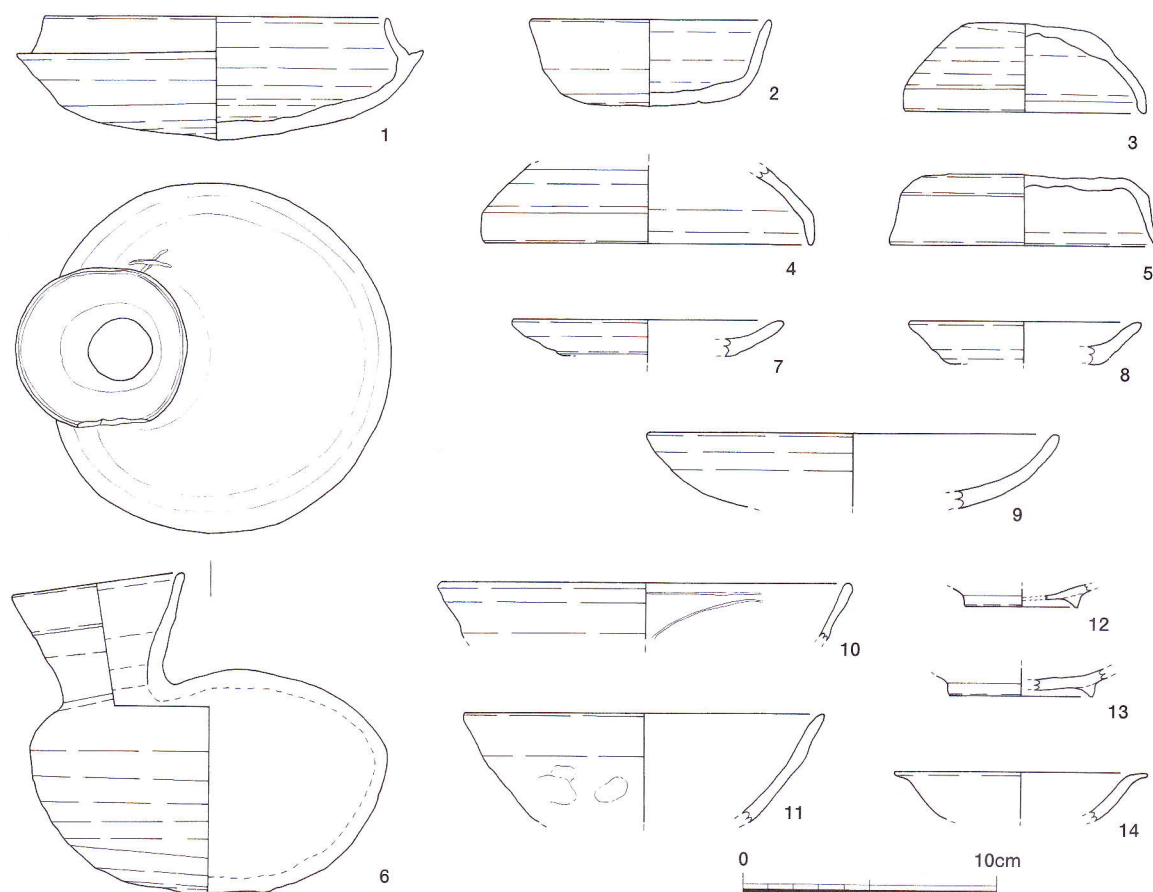
6. 遺物

遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器、金属器、人骨などがある。これらの遺物は、SX-2などの遺構の覆土及び、第3・4層などの各遺物包含層から出土したもので、その時期は主に古墳時代後期から江戸時代にかけてのものである。以上の遺物は、コンテナに約2箱を数える。以下、主要な遺物について述べる。

(1) 古墳時代の土器 (第10図1～6、図版33)

1～6は須恵器である。これらは、すべてSX-2に副葬されていたものとみられる土器である。

1・2は杯身で、1は口径13.4cm、器高4.9cmを測る。口縁部の立ち上がりはやや外反しながら内傾するもので、受け部は斜め上方にのびるものである。外面の調整は、体部上半及び受け部、口縁部の調整にはヨコナデがみられ、体部下半の調整にはヘラケズリ後のヘラケズリがみられる。内面の調整はヨコナデである。また外面のほぼ全体に自然釉が付着しており、窯詰めの際、口縁部を下にして置かれたものと考えられる。色調は灰色を呈し、胎土には1～2mm大の石英・黒色粒を含む。2は口径9.3cm、器高3.4cmを測る。口縁部がやや外反しながら直線的にのびるもので、底面をヘラケズリによって作り出すものである。外面の調整は、体部をヨコナデによって調整した後、底部付近をヘラ切り後ヘラケズリによって調整する。内面の調整はヨコナデである。底部のヘラケズリは丁寧に施されており、接地面を意識したも



第10図 遺物実測図 1

のと考えられる。色調は明灰色を呈し、胎土には1～3mm大の石英・白色粒を含む。焼成はやや軟質焼成である。

3～5は杯蓋で、3は口径9.5cm、器高3.5cmを測る。口縁端部内面を丸く肥厚させるもので、天井部はヘラケズリにより平坦に仕上げられる。外面の調整は、天井部をヘラケズリした後、口縁部にかけてヨコナデを施すもので、内面の調整はヨコナデである。また、外面の器表面が滑らかに磨滅している状況が観察できた。これは手ずれによるものと考えられる。色調は灰色を呈し、胎土は1～3mm大の石英・黒色粒を含む。4は口径13.0cm、器高3.1cmを測る。口縁部を屈曲させるもので形状は3に似るが、口縁端部内面を丸く肥厚させないものである。外面の調整は、天井部を欠失するがわずかにヘラケズリの痕跡がみられ、口縁部にかけてヨコナデを施す。内面の調整はヨコナデである。色調は灰色を呈し、胎土には1～2mm大の黒色粒を含む。5は口径10.5cm、器高2.8cmを測る。天井部は平坦に仕上げるもので、口縁部はやや外反しながら斜め下方にのびる。外面天井部の調整は、ヘラ切り後ヘラケズリを行い、さらに全体にヨコナデを施す。口縁部及び内面の調整はヨコナデである。色調は、淡灰色を呈し、胎土には1～2mm大の石英・黒色粒がみられる。

6は横瓶である。口径6.6cm、体部最大径14.0cm、器高12.8cmを測り、肩部に「X」印のヘラ記号がみられるものである。また口縁部の下方には削り出しの突帯がめぐる。外面の調整は、体部下半から底部にかけてヘラ切り後ヘラケズリを行い、体部上半から頸部及び口縁部にはヨコナデがみられる。内面の調整はヨコナデである。体部外面の一部には、火を受けたと思われる剥離痕がみられる。色調は灰色を呈し、胎土には1～3mm大の石英・黒色粒を含む。

これらの時期については、杯身では1がTK-43型式に、2がTK-217型式に比定でき、杯蓋では3・4がTK-209型式に、5がTK-209～217型式に比定できるものと考えられる。また、6についてはTK-209～217型式のものとみられる。出土位置については、1がSX-2玄室の敷き石直上から出土したもので石室築造当初のものとみられ、また6は、同じくSX-2玄室の玉石直上から出土したもので2次的な埋葬に伴うものと考えられる。さらに、2～5についてはSK-3から出土したものである。

(2) 鎌倉・室町時代の土器 (第10図7～14、図版34)

7～9は土師器の皿である。7は口径10.6cm、残存高1.4cmを測るもので、底部に糸切り痕が確認できるものである。調整は、内外面ともにヨコナデが施される。色調は乳褐色を呈する。8は口径9.0cm、残存高1.7cmを測る。7と同じく底部に糸切り痕を残すもので、調整についても内外面ともヨコナデを施す。色調は淡褐色を呈する。9は口径16.2cm、残存高3.0cmを測るもので、口縁部はゆるやかに内彎しながら立ち上がるものである。口縁端部はわずかながら面をもつ。外面の調整は、口縁部にはヨコナデがみられ、体部下半には指オサエがみられる。内面の調整は、ナデ調整である。色調は乳褐色を呈し、胎土にはごく細かな赤色粒がみられた。

10～13は瓦器碗である。10は口径16.4cm、残存高2.2cmを測るもので、外面の調整には強いヨコナデがみられ、内面の調整はヘラミガキの暗文が施される。11は口径14.0cm、残存高4.3cmを測る。体部はやや内彎しながら立ち上がるものである。外面の調整は、口縁部にヨコナデが施され、体部下半には指オサエがみられる。内面は磨滅しており、調整については明瞭に観察できない。12・13は断面三角形の高台をもつもので、12は高台径4.6cm、残存高0.9cm、13は高台径5.6cm、残存高1.1cmを測る。

14は、中国製白磁の皿である。口径9.8cm、残存高1.9cmを測る。ゆるやかに内彎する体部から口縁端部を外方へ折り曲げるもので、色調は白濁色を呈する。内外面には、貫入がみられる。

これらの土器の出土位置は、7・10・11・12が第3層、8・13は第4層上面、9はSK-3から出土し、14は表採資料である。

7. まとめ

今回の調査地は遺跡の南東部分にあたり、県文化財センターが行った第5次発掘調査地の南西約30m付近にあたる。県文化財センターの調査では、第3次調査において1基、第5次調査において4基の合計5基(西庄1～5号墳)の古墳が検出されている。これらのうち5号墳については削平のため石室の構造については不明であるが、2・4号墳が横穴式石室、3号墳が小型の竪穴式石室を埋葬施設に採用している。このように調査地周辺では古墳の検出例が多く、いずれも出土遺物から古墳時代後期の築造である。

このなかで、4号墳の横穴式石室は、玄室幅1.65m、玄室長2.1m、羨道長約3.0mを測るもので、石室の構造は袖石が内側に突出し玄室前道基石を備えている石室である。玄室床面には3時期の床面が確認されており、第1次床面には扁平な板石が敷かれ、第2次床面と第3次床面には3～5cm大の玉石が敷かれていたようである。また玄室内から20体以上の人骨と副葬された土師器・須恵器が約8個体出土しており、遺存した人骨のなかに指などの比較的小さい骨が遺存していない状況から、一度埋葬されていた人骨を再度埋葬した再葬墓として位置付けられている。この4号墳の石室は、その石室形態から岩橋千塚古墳群の横穴式石室との関わりが指摘されている。

今回検出したSX-2は、玄門部の袖石に結晶片岩を用いてやや内側に突出させ、玄室前道を作り出すもので、玄室幅などの法量や築造時期なども含め上述の4号墳の石室と共通する要素を有する。また玄室床面は少なくとも2面確認でき、第1次床面に敷石がみられ、第2次床面に玉石が用いられる構造も4号墳と類似するものとして注目される。以上の検討結果から判断すると、SX-2は、県文化財センターの調査で検出された一連の石室群とともに、西庄遺跡南東部を中心とする西庄古墳群を構成するひとつと考えられる。よって、西庄遺跡のなかでは県文化財センター検出の古墳に続き6号墳として把握すべきものと考えられる。

さらに、SX-2では、出土した須恵器の型式から7世紀初頭に追葬行為がみられる。この追葬行為が、県文化財センターの調査でみられた再葬行為にあたるかどうかは、玄室内部が調査区外のため調査できなかったことから判断できないが、4号墳と床面の構築方法が類似することは同一造墓集団の埋葬行為であると考えられるため、今回検出した埋葬遺体は再葬された可能性がある。また、このような埋葬方法は、西庄遺跡における古墳時代後期の石室利用の在り方を知る上で重要な視点を与えてくれるものと考えられる。

次に、古墳の墳形については、SD-1がSX-2を中心にやや弧を描くことから古墳の周濠とみられ、県文化財センターの調査ですでに検出されている古墳の墳形及び築造時期などから判断すると円墳と考えられる。また墳丘規模については、SD-1とSX-2の玄室南端中央部とを結ぶ線を半径として復原する

と径約 16 m となり、石室及び墳丘規模とも考え合わせ、今回検出した古墳は古墳群の盟主墳的な存在と理解したい。

最後に、墳丘には SX-1 が SX-2 と近接して構築されていた。これは、SX-1 の構造が明らかでないが、横穴式石室と小竪穴式石室をセットとして同一墳丘内にもつ岩出町船戸山古墳群などと共通する特徴とみられ、いわゆる終末期古墳の形態を有するものと考えられる。

以上、今回検出した横穴式石室について検討してきたが、石室形態やその構造、埋葬方法などが県文化財センターの調査によって検出された石室と類似するものであること、また墳丘利用の在り方も含め紀ノ川南岸に所在する岩橋千塚古墳群、及び岩出町船戸山古墳群の横穴式石室と類似するものであることが指摘できる。さらに、今回の調査地で古墳の存在を確認したことは、古墳群の範囲がさらに南へ広がるものとして注目される。

今回の調査は、和歌山県内では検出例の少ない古墳時代後期から終末期にかけての古墳の検出例である。よって、その石室構造や埋葬行為の特徴を明らかにして、砂堆に築造された古墳群の性格と製塩遺跡との関わりを検討していくことが今後の課題となろう。そこで、古墳群の性格を考えるための検討材料として、今回の調査地からは製塩土器が全く出土しなかったということをあげておきたい。このことは従来から指摘されているとおり、遺跡内での土地利用の在り方として遺跡の東側が墓域、中央部が住居域、西側が作業域であったことを裏付けるものとして理解でき、また土地の使い分けが行われているという視点から、製塩集落と古墳群が同時期に存在していたことを示す現象として特筆すべきことと考えられる。

【参考文献】

- 和歌山県史編纂委員会『和歌山県史』考古資料編 和歌山県 1983年
和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991年
『西庄遺跡発掘調査Ⅰ』（財）和歌山県文化財センター 1995年
『西庄遺跡発掘調査Ⅱ』（財）和歌山県文化財センター 1999年
『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1995年
『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1996年
『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1997年
『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1998年
『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 1999年
『和歌山県文化財センター年報』（財）和歌山県文化財センター 2000年
『西庄遺跡現地説明会資料』（財）和歌山県文化財センター 1997年
『西庄遺跡発掘調査現地説明会資料』（財）和歌山県文化財センター 1998年
『西庄遺跡第5次発掘調査—現地説明会資料—』（財）和歌山県文化財センター 2000年
『船戸山6号墳発掘調査概報』（社）和歌山県文化財研究会 1974年

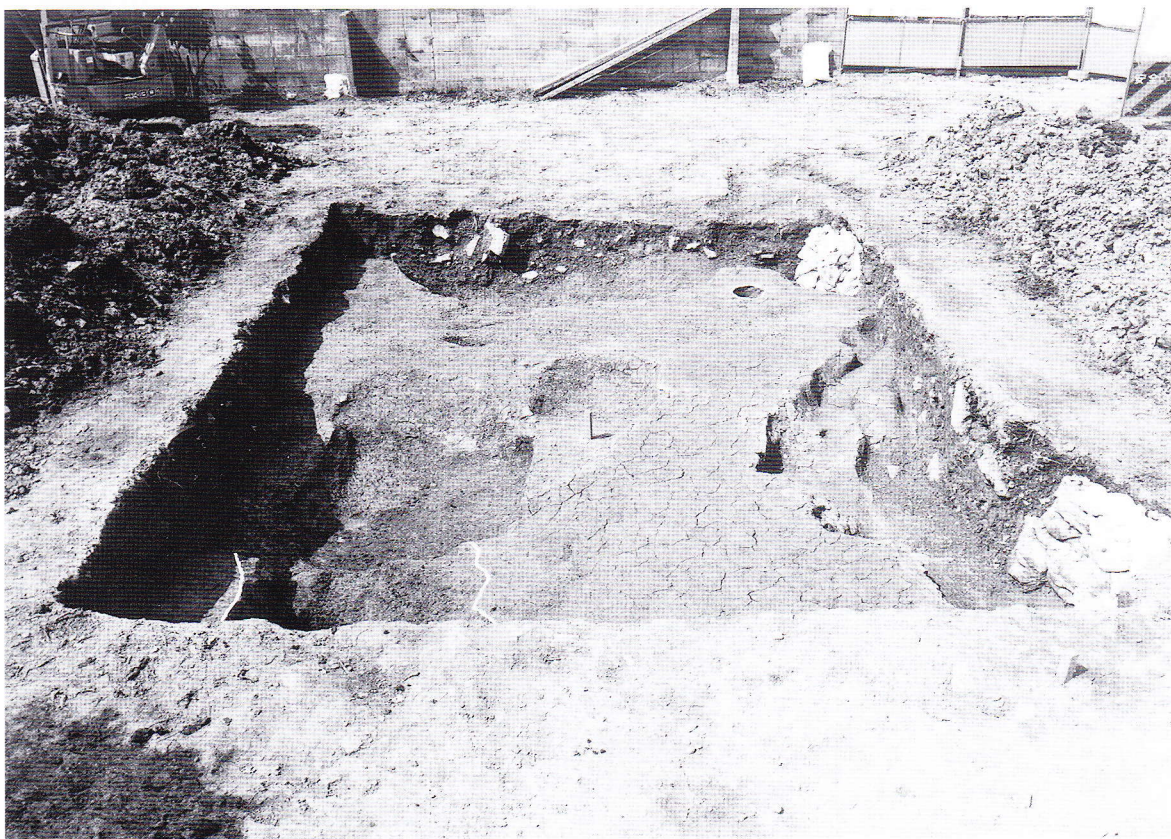
版 圖



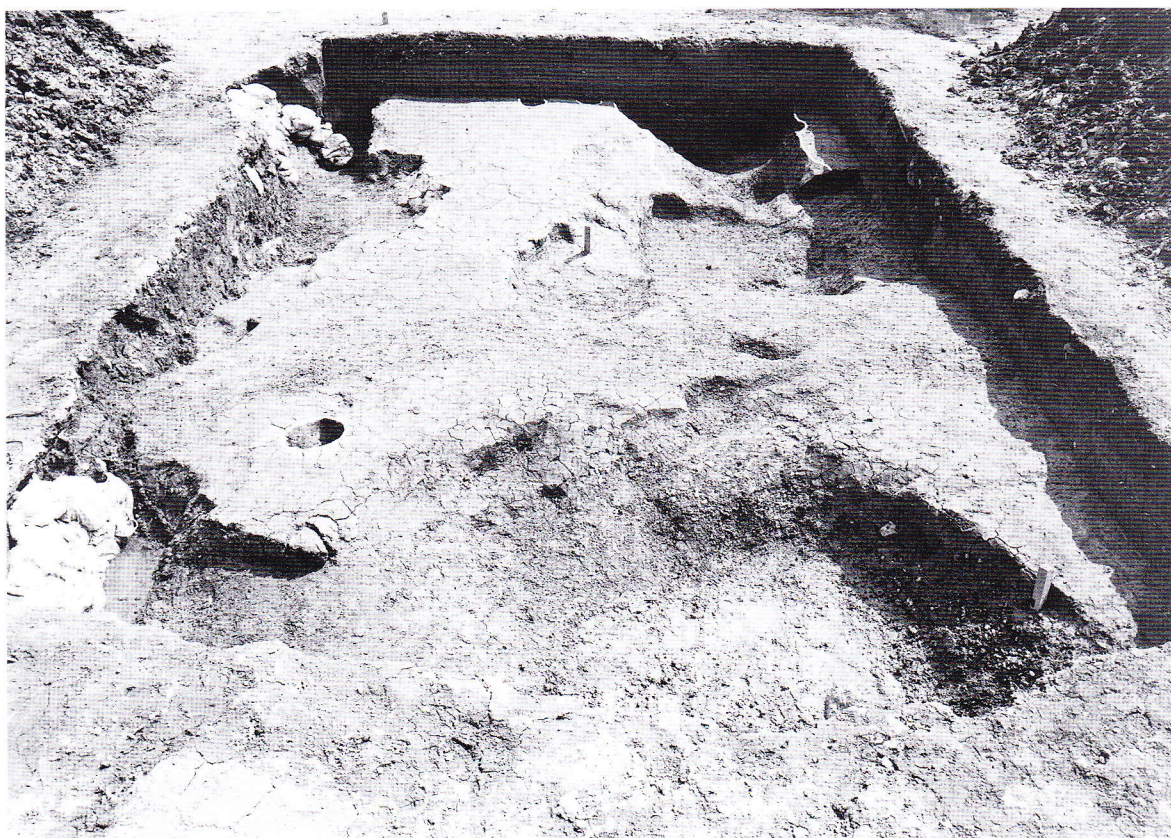
調査地遠景(大谷古墳から)



調査前の状況(南東から)



第2遺構面全景(南から)



第2遺構面全景(北から)



SK-2 (北から)



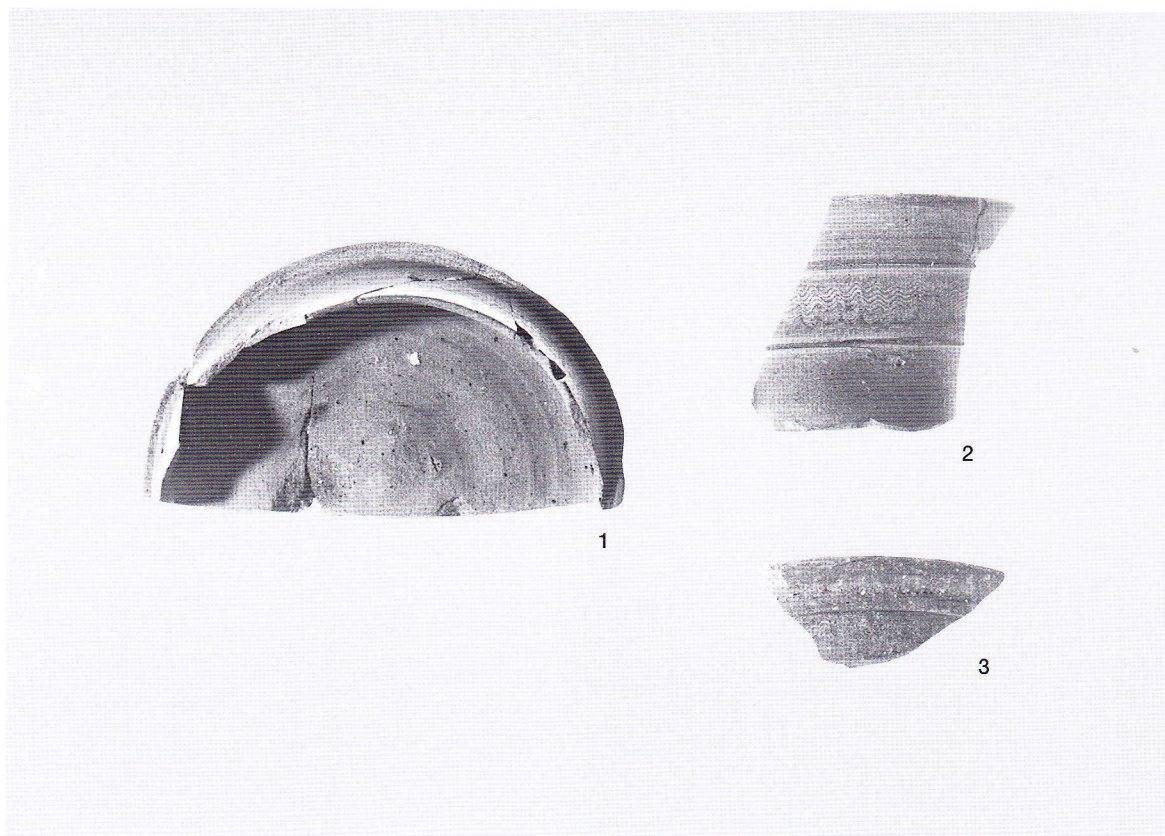
SK-2 土層推積状況 (北から)



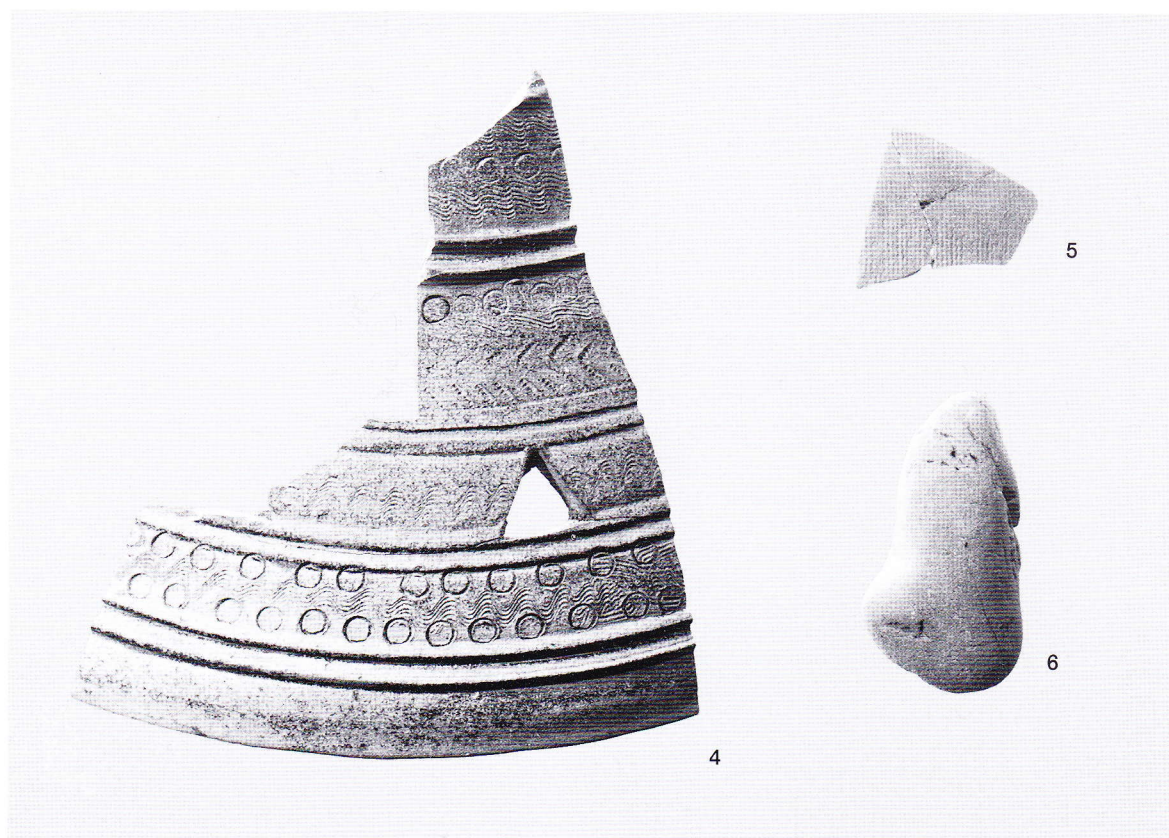
調査区西壁土層推積状況(東から)



調査区南壁土層推積状況(北から)



初期須恵器 1 杯身、2 直口壺、3 甕



初期須恵器 4 器台、陶質土器 5 甕、石器 6 叩石



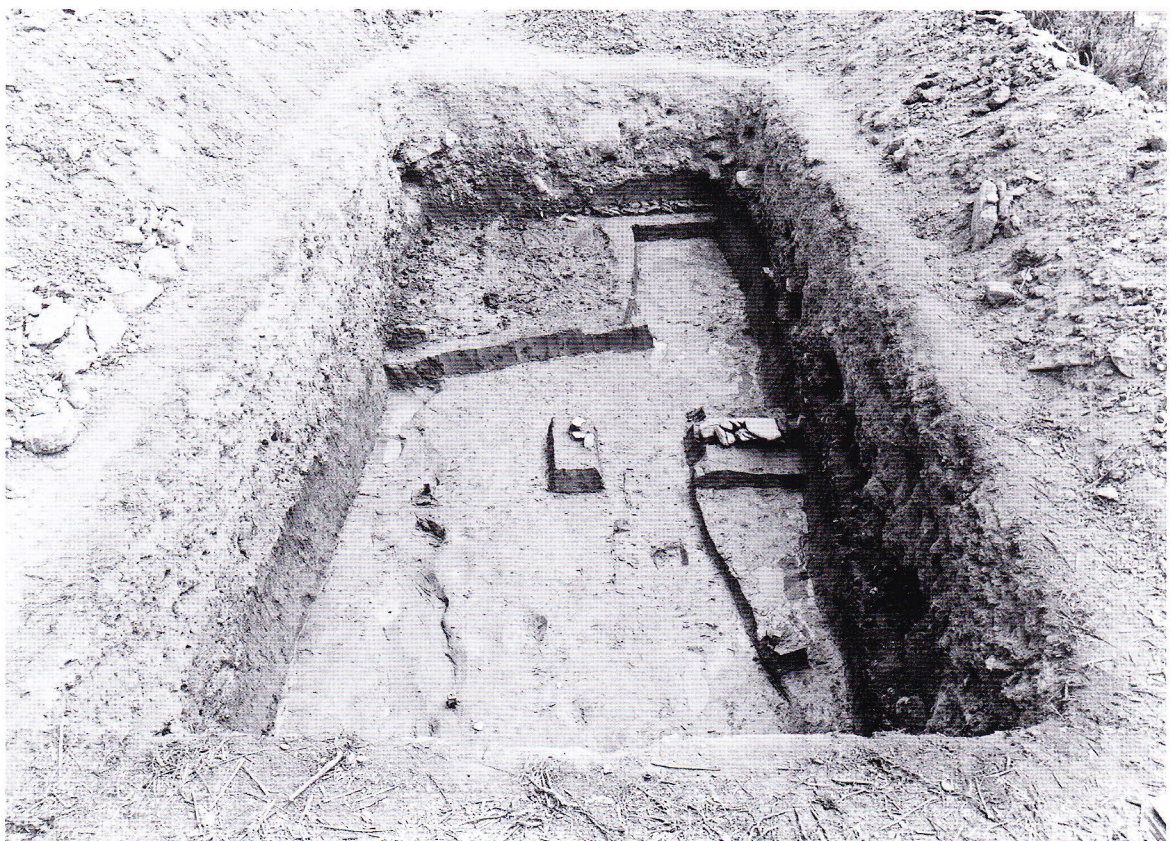
調査地遠景(南東から)



調査前の状況(北東から)



調査区全景(東から)



調査区全景(西から)



SX-1 ・ 2 (北から)



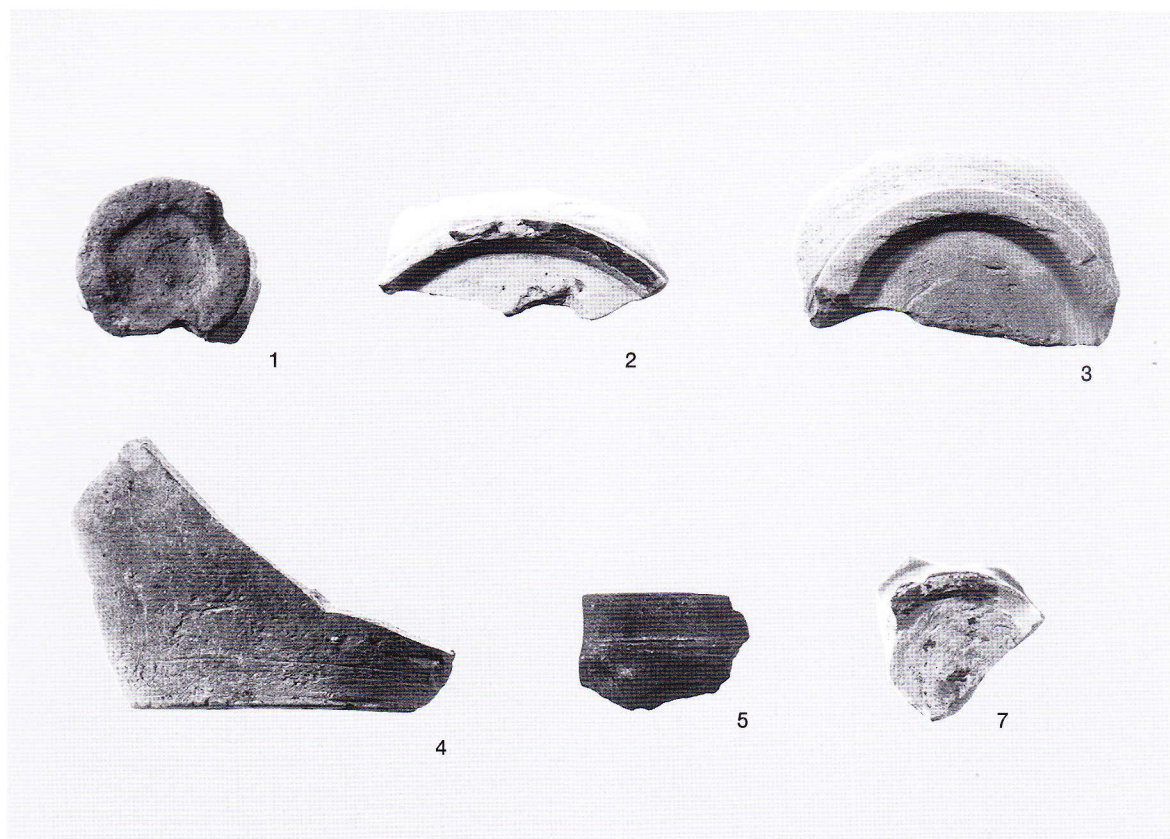
SX-2 (北西から)



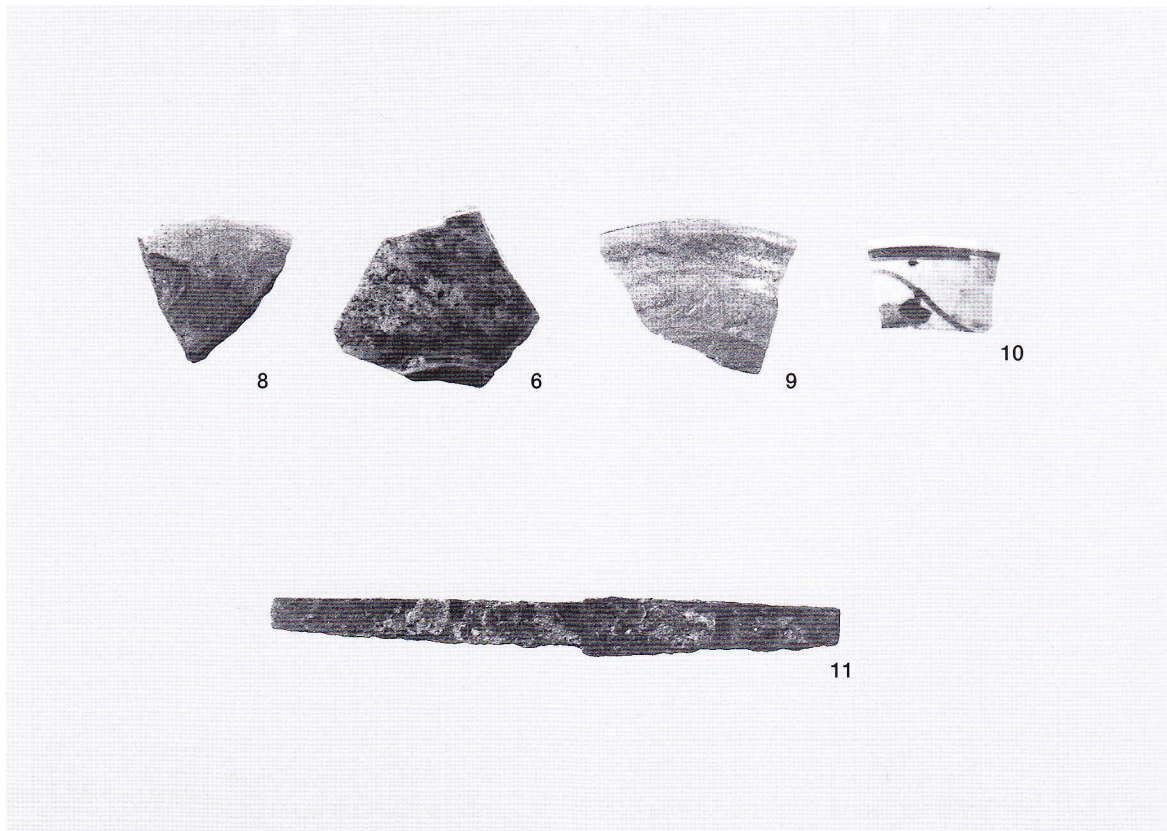
調査区北壁土層推積状況(南から)



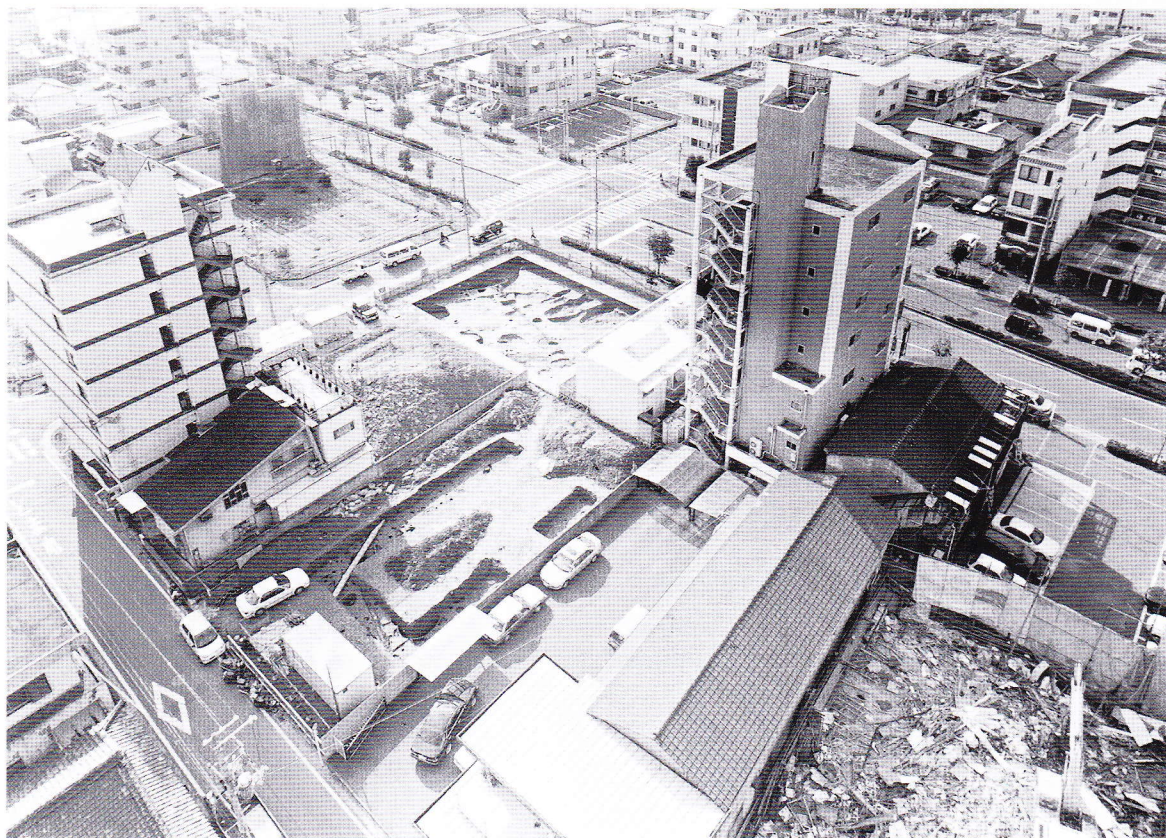
調査区南壁土層推積状況(北から)



第3層出土土器 弥生土器 1 底部、須恵器 2 杯身 3・4 壺、黒色土器 5 B類碗、中国製青磁 7 碗



第2層出土遺物 土師器 8 皿、瓦器 6 碗、肥前系陶器 9 唐津皿、肥前系磁器 10 染付小碗、金属器 11 鉄製刀子



調査地近景(北東から)



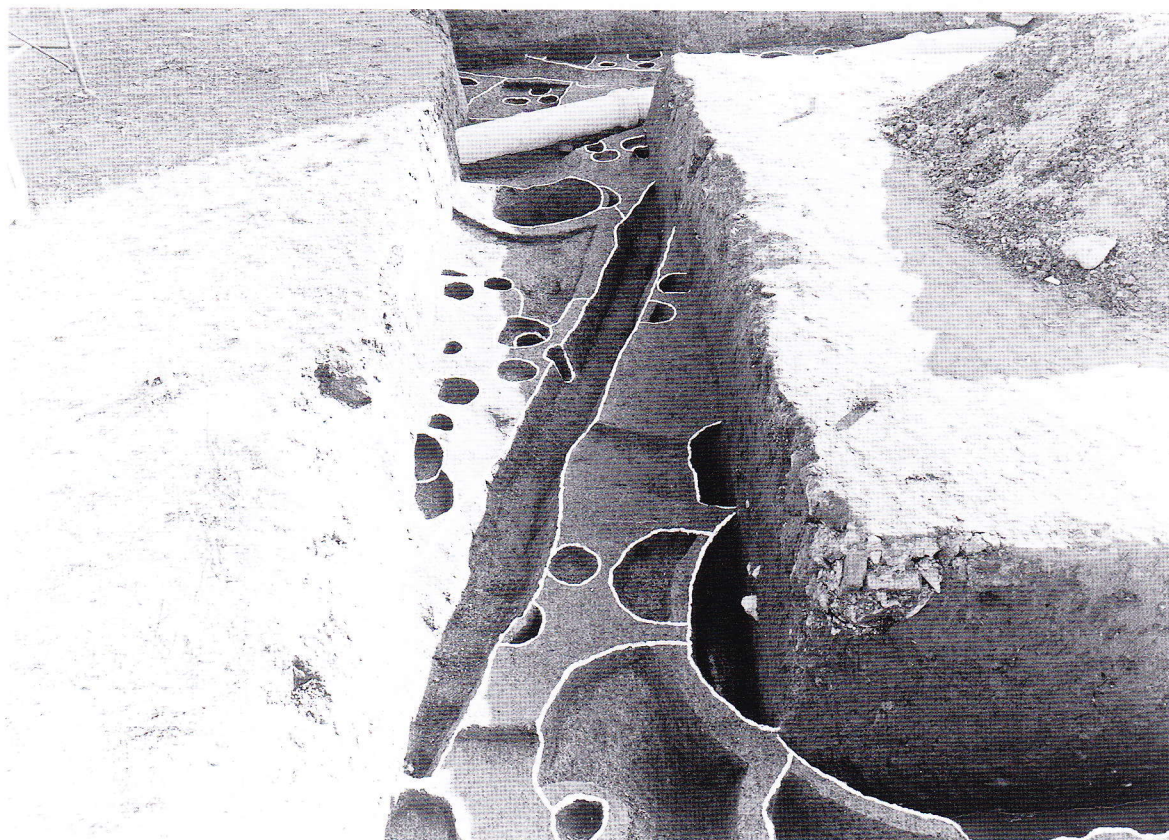
調査前の状況(南東から)



第2遺構面全景(東から)



第1区 第2遺構面全景(東から)



第2区 第2遺構面全景(北から)



第3区 第2遺構面全景(西から)



SK-23(西から)



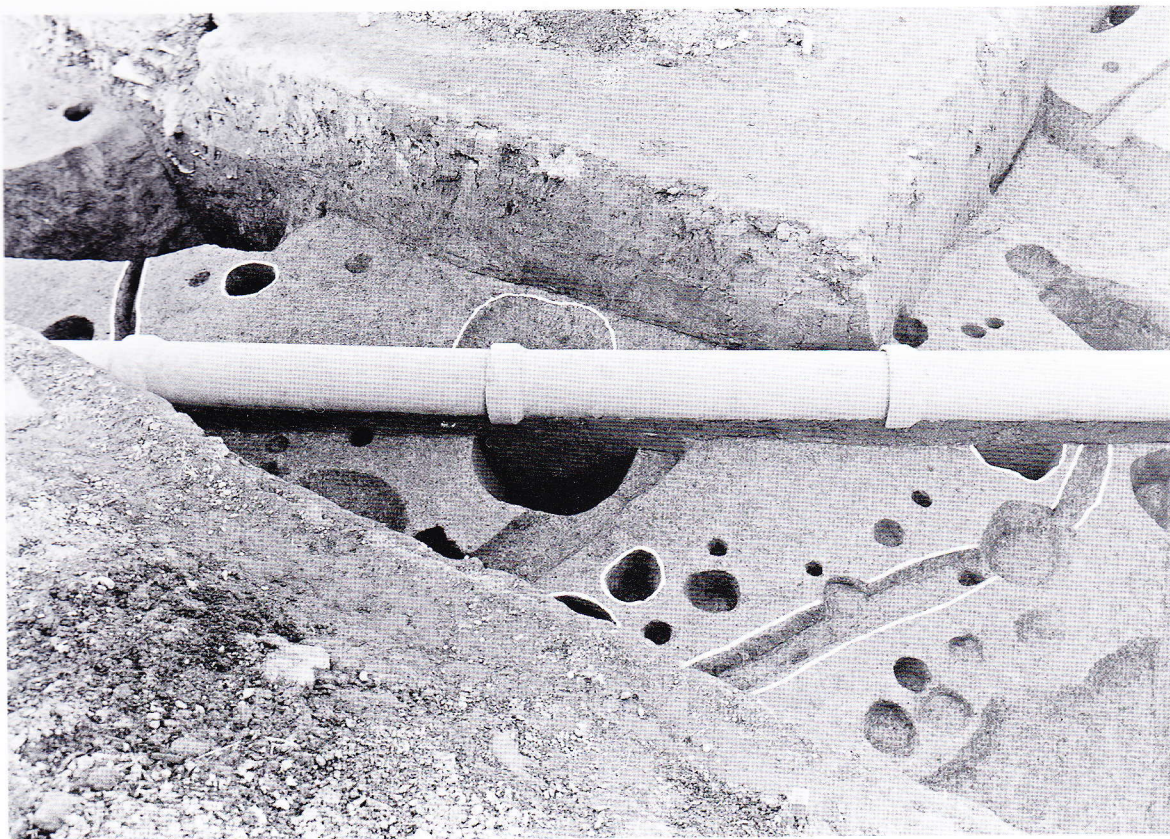
SK-25(北東から)



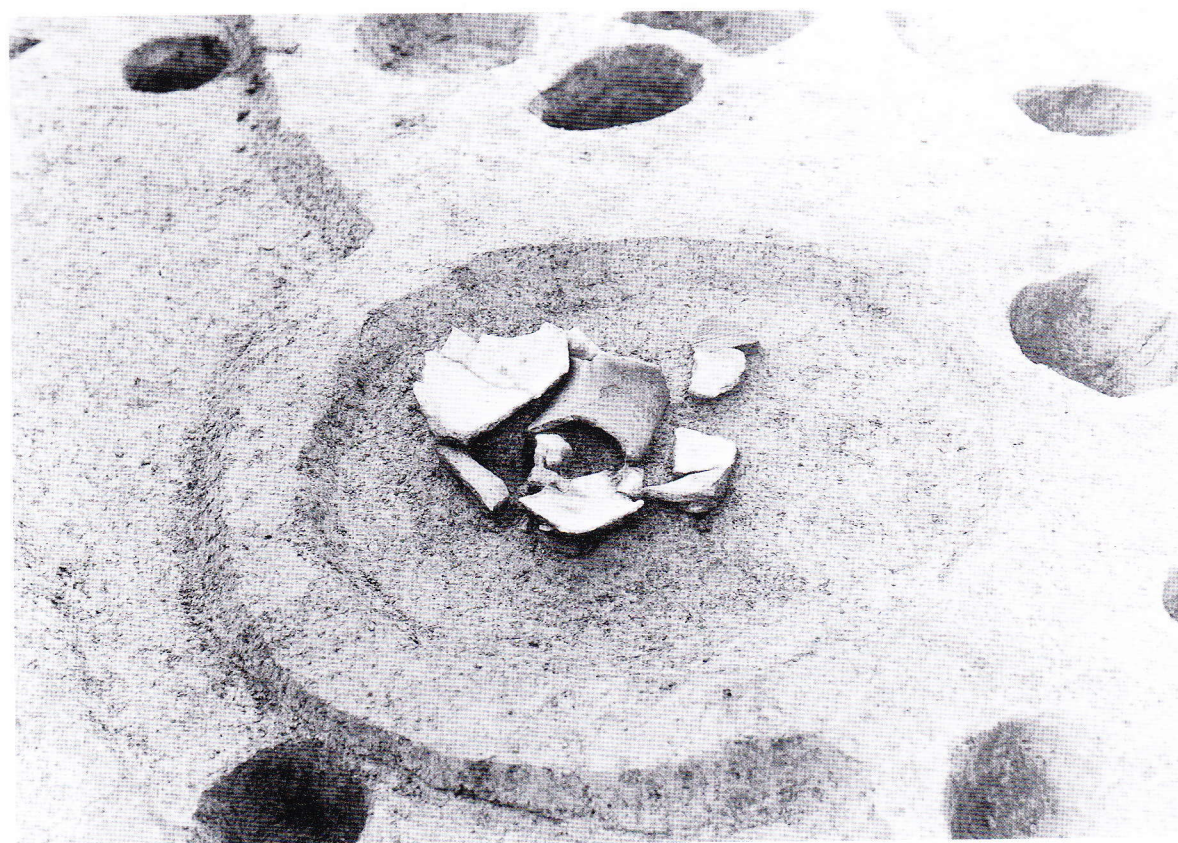
SK-20(南西から)



SK-20土層推積状況(北西から)



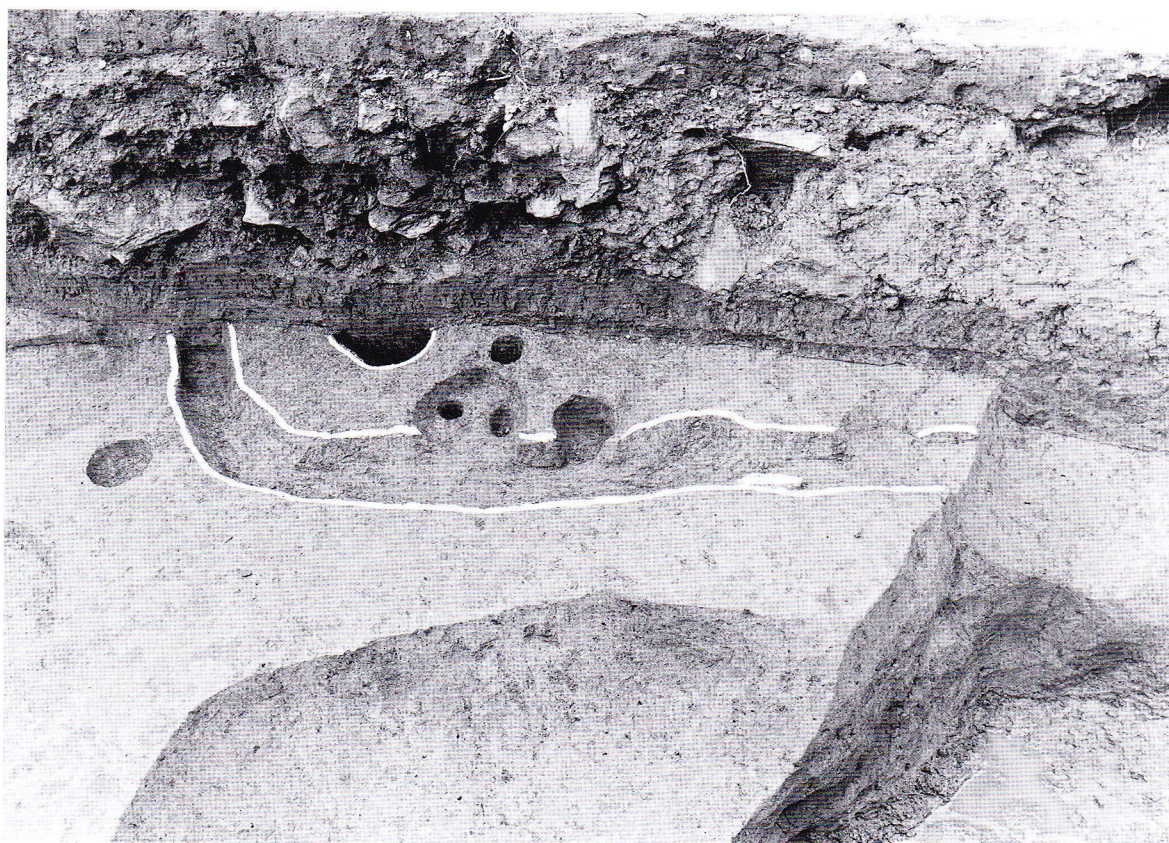
SB-2 (南東から)



P-96 (東から)



SK-8・15(南西から)



SB-1(北から)



SK-5 (西から)



SK-7 土層推積状況(南東から)



第1区 北壁 Y=-73934m付近土層推積状況(南から)



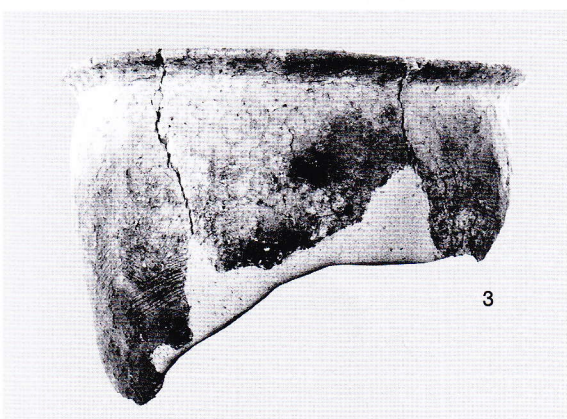
第3区 南壁 Y=-73920m付近土層推積状況(北から)



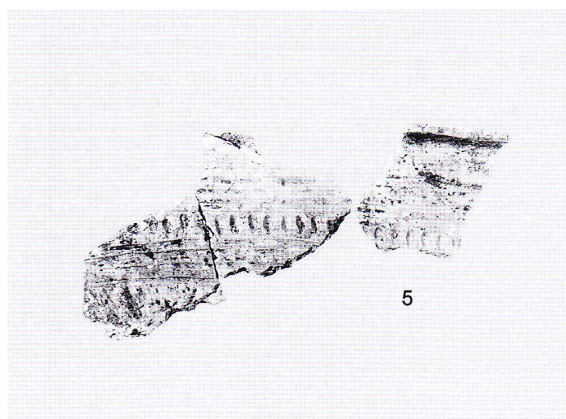
SK-23出土土器 弥生土器 1 壺



SK-23出土土器 弥生土器 2 甕



SK-23出土土器 弥生土器 3 甕



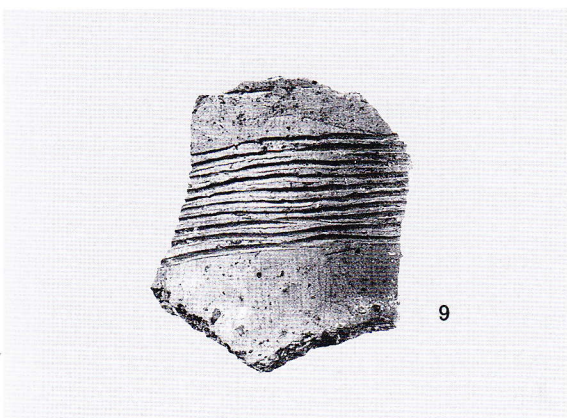
SK-23出土土器 弥生土器 5 甕



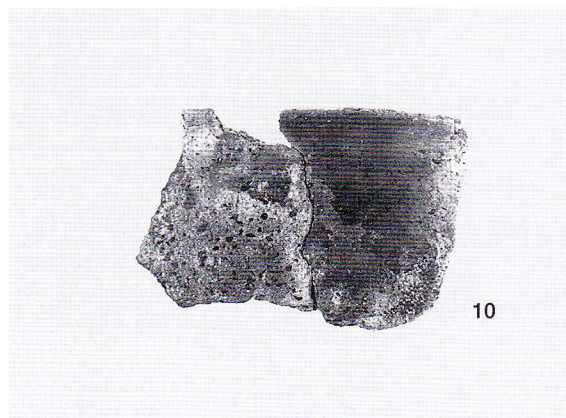
SK-23出土土器 弥生土器 6 鉢



SK-23出土土器 弥生土器 7 壺底部



SK-25出土土器 弥生土器 9 壺



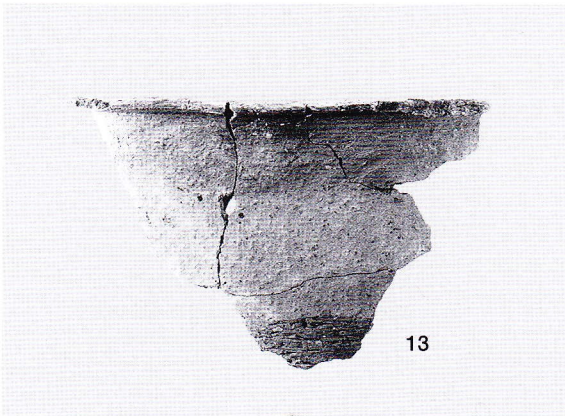
SK-25出土土器 弥生土器 10 鉢



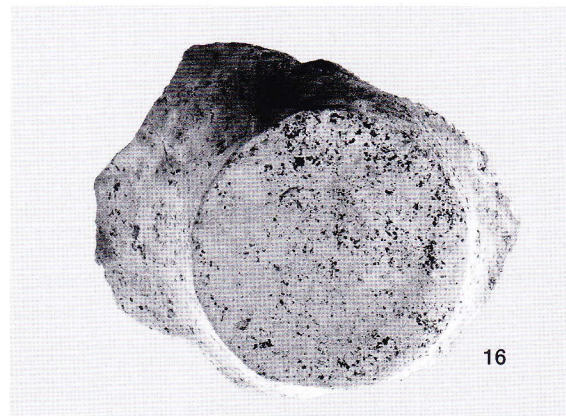
SK-24出土土器 弥生土器11壺



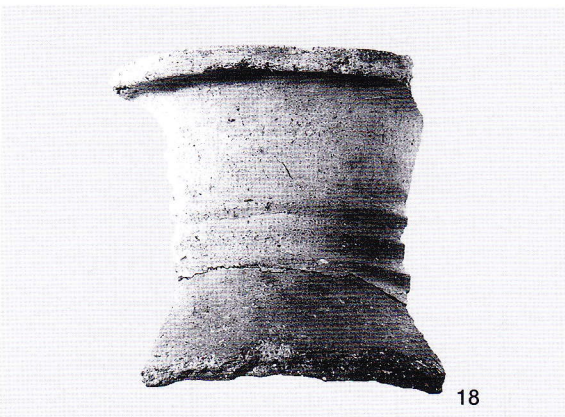
SK-24出土土器 弥生土器12壺



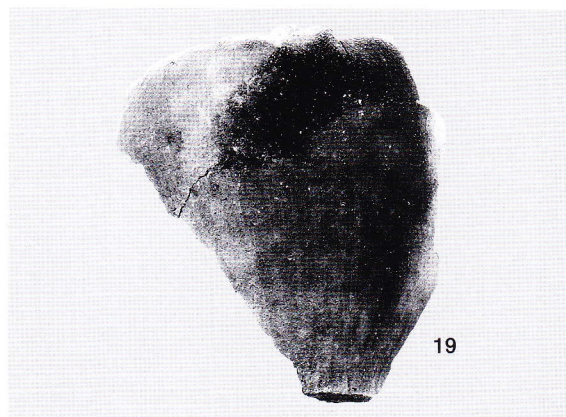
SK-24出土土器 弥生土器13甕



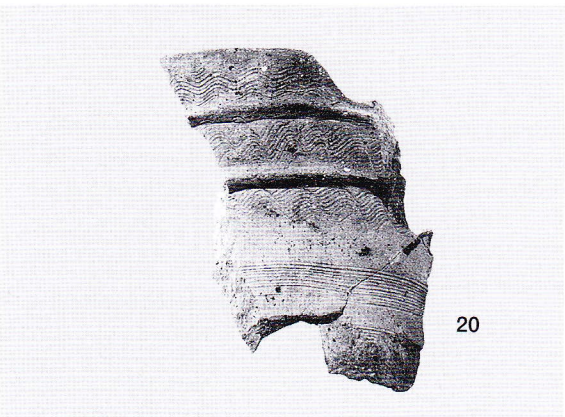
SK-20出土土器 弥生土器16壺底部



P-96出土土器 弥生土器18壺



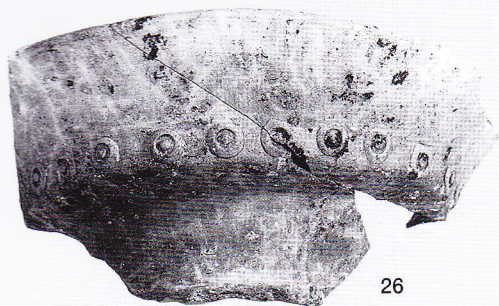
P-96出土土器 弥生土器19壺



SK-3出土土器 弥生土器20壺

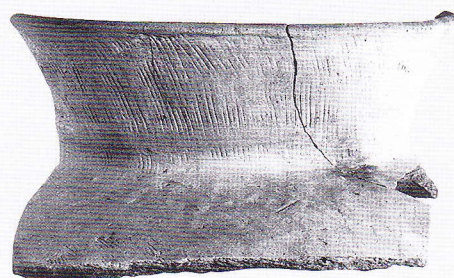


SK-15出土土器 弥生土器25甕



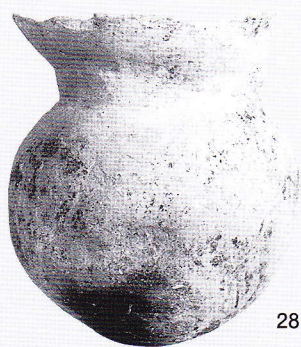
26

SK-8 出土土器 土師器26壺



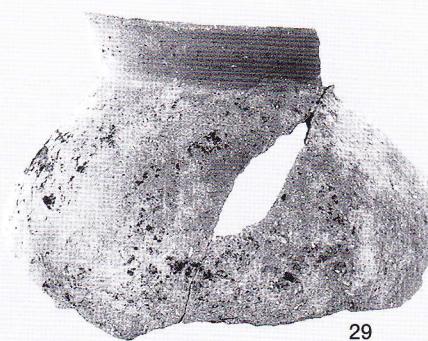
27

SK-8 出土土器 土師器27壺



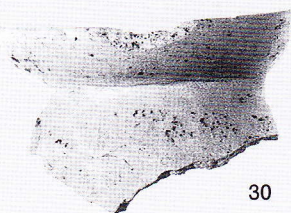
28

SK-8 出土土器 土師器28壺



29

SK-8 出土土器 土師器29甕



30



31



32



34



33



35



36

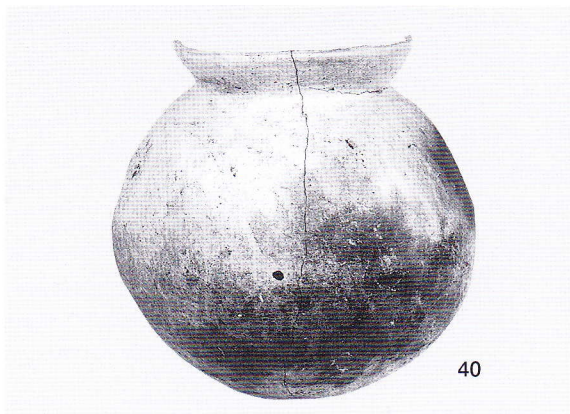


37



38

SK-8 出土土器 土師器30甕、31・32高杯、33鉢、34~38製塩土器



SK-5 出土土器 土師器40甕



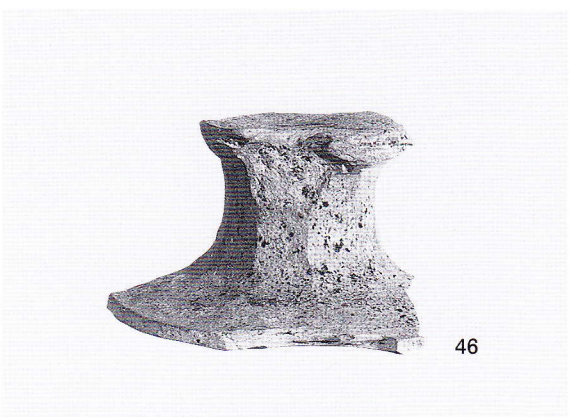
SK-5 出土土器 土師器41高杯



SK-5 出土土器 土師器42高杯



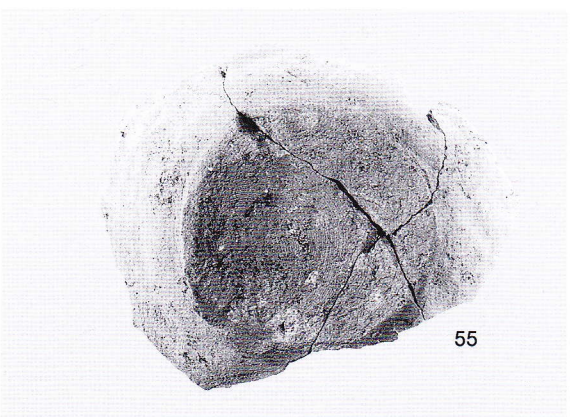
SK-7 出土土器 土師器45鉢



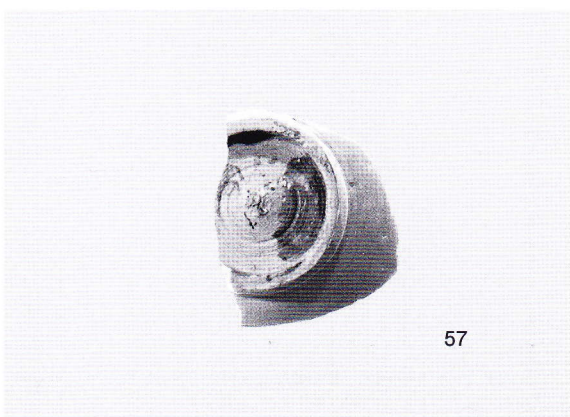
第2層出土土器 土師器46高杯



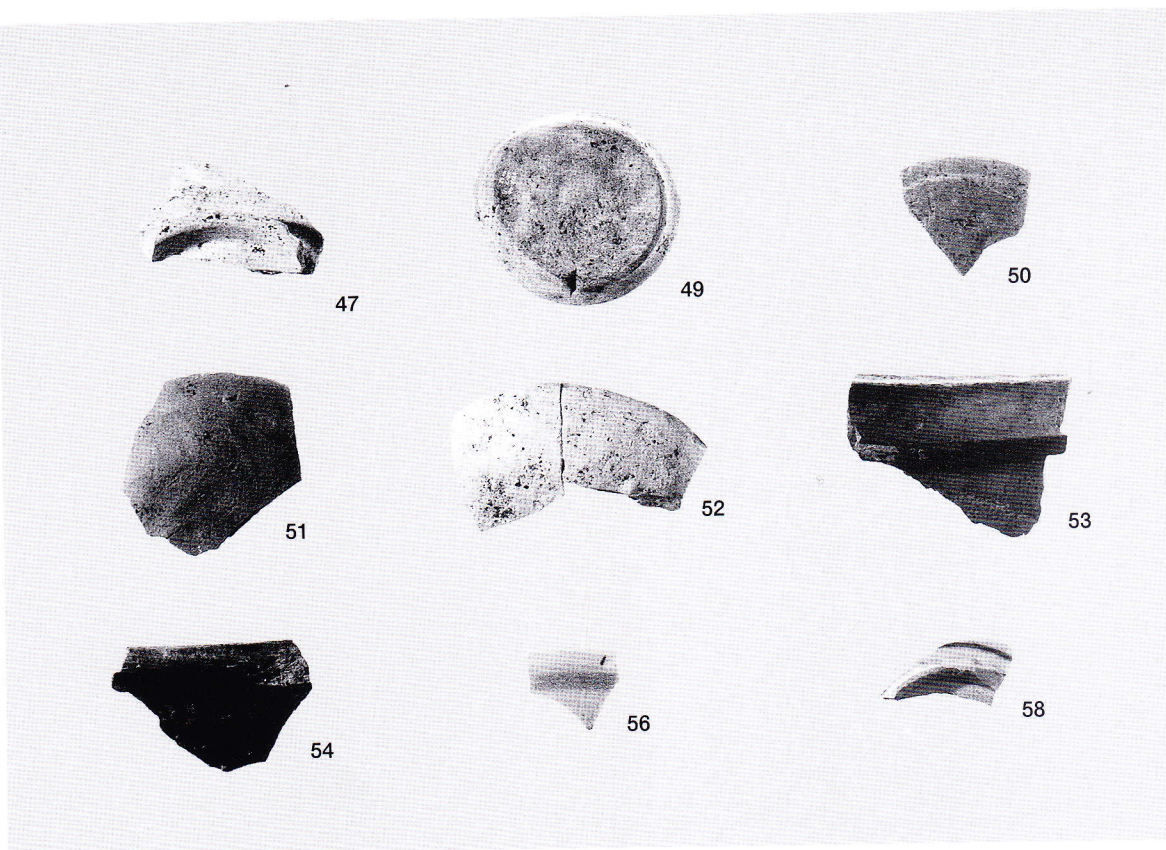
第2層出土土器 須恵器48円面硯



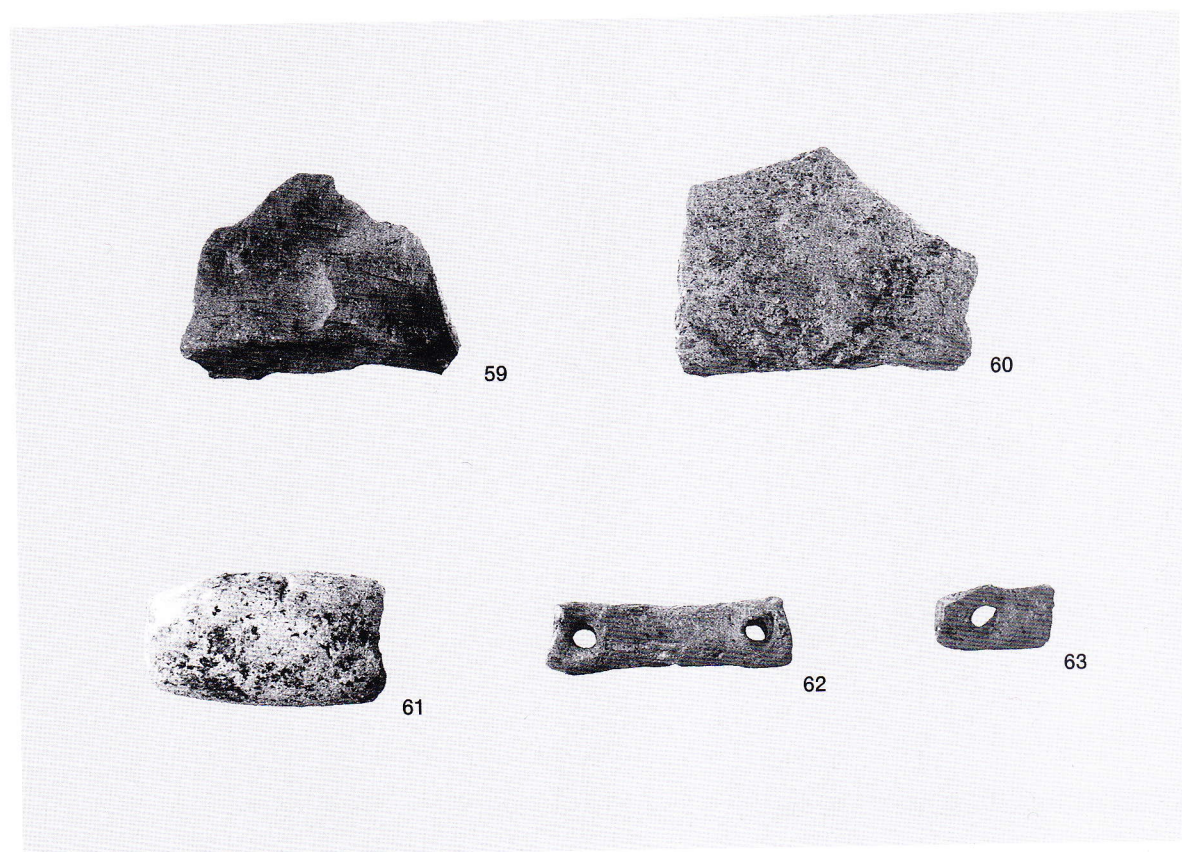
SK-2 出土土器 東播系須恵器55こね鉢



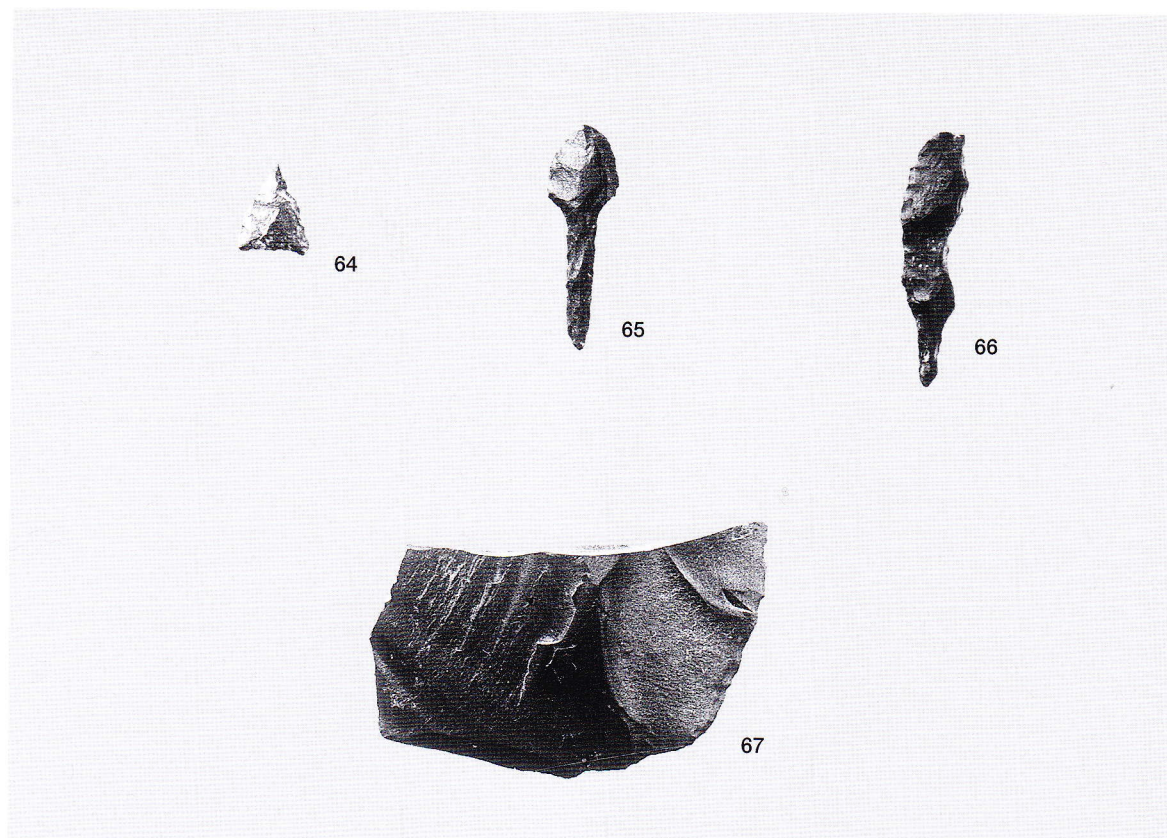
第3層出土土器 中国製青磁57碗



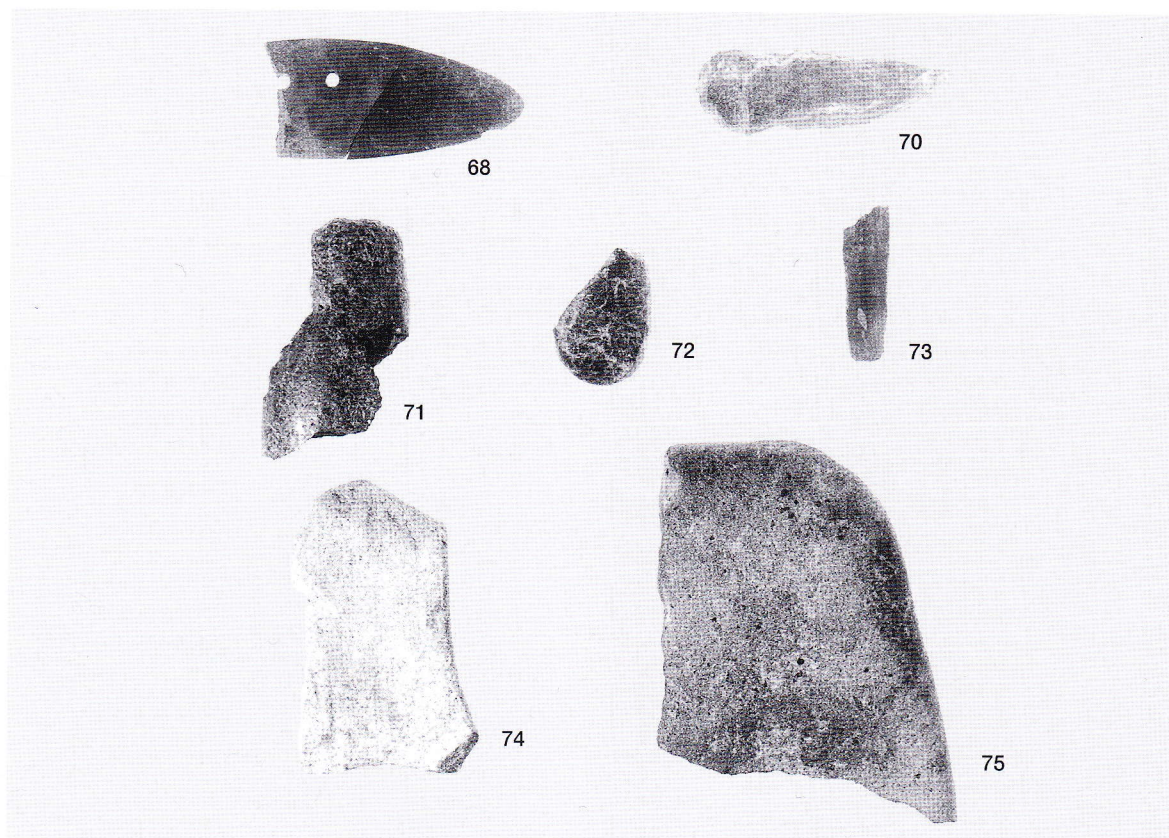
黒色土器 47碗、土師器 49～52皿、53・54釜、中国製白磁 56碗、中国製染付 58碗



59・60 カマド、61 管状土錘、62・63 有孔土錘



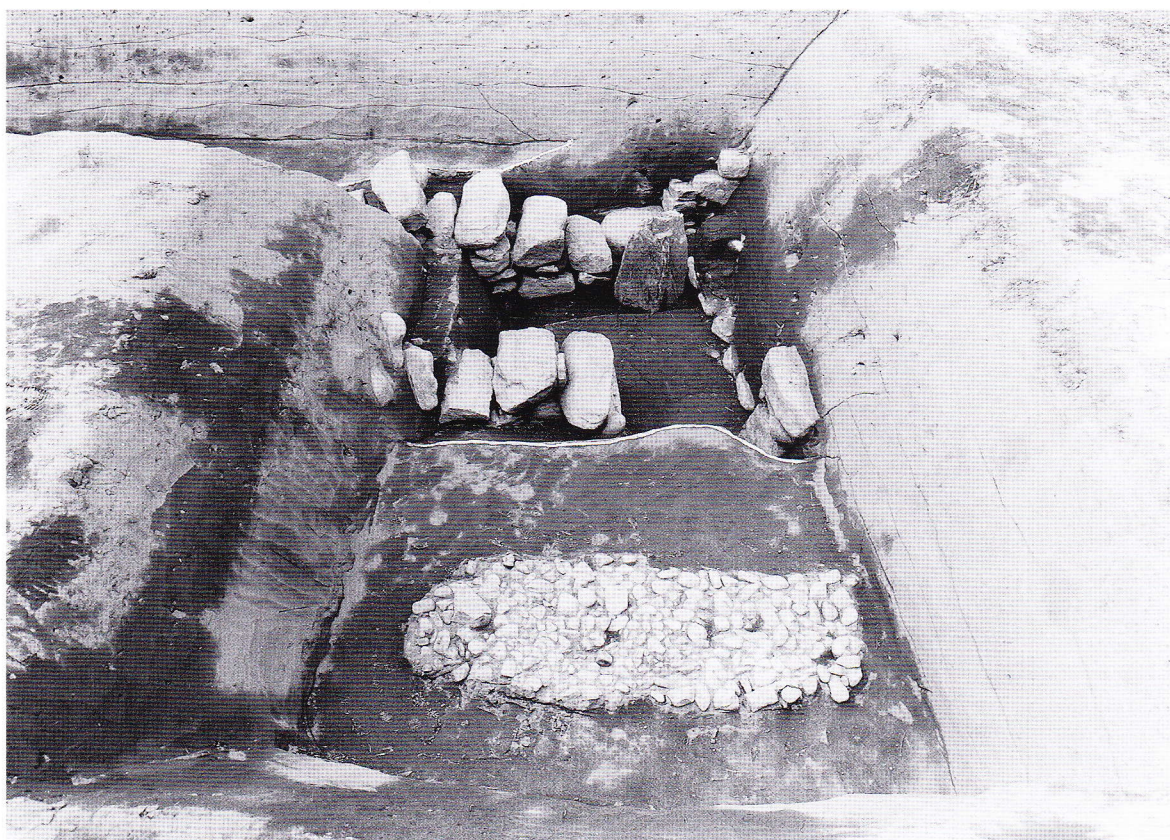
打製石器 64平基式石鏃、65・66石鏃、67スクレイパー



磨製石器 68石庖丁、70石鏃、71太型蛤刃石斧、礫石器 72・73叩石、74・75台石



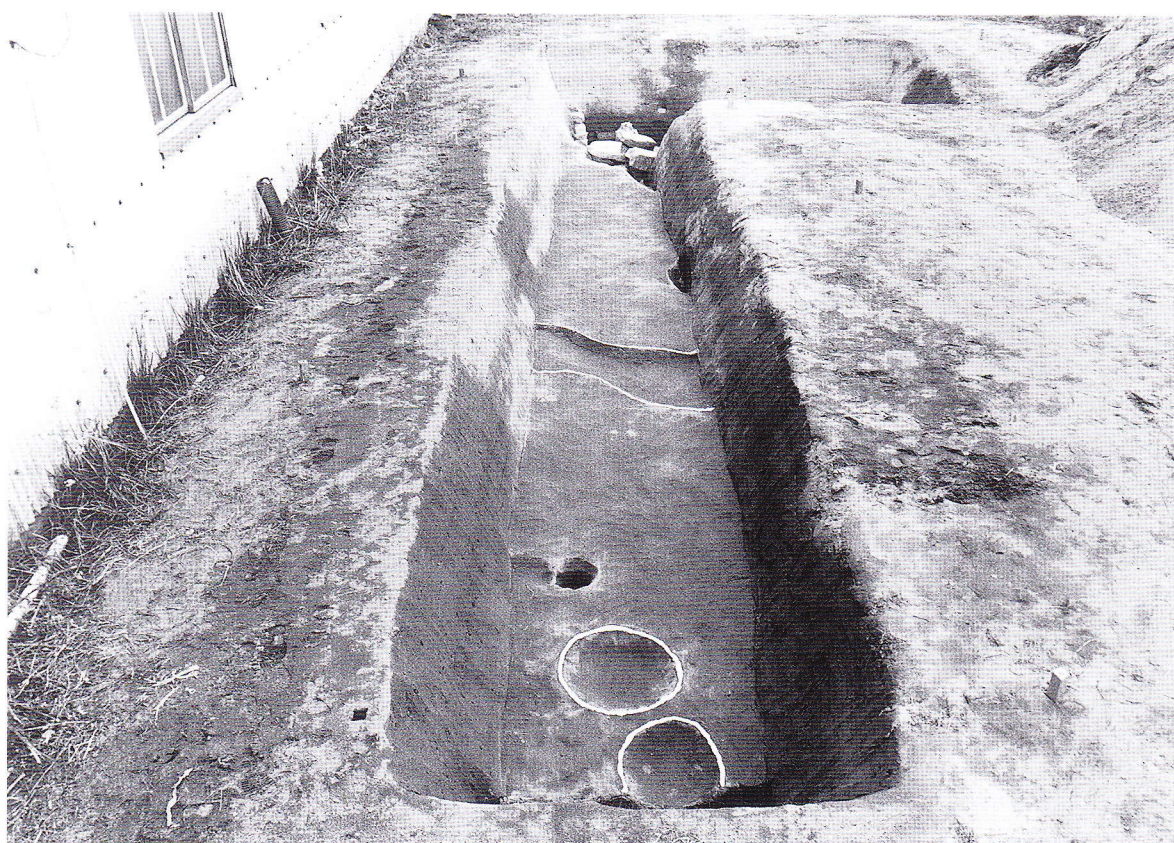
調査前の状況(南から)



第1区 第3遺構面全景(東から)



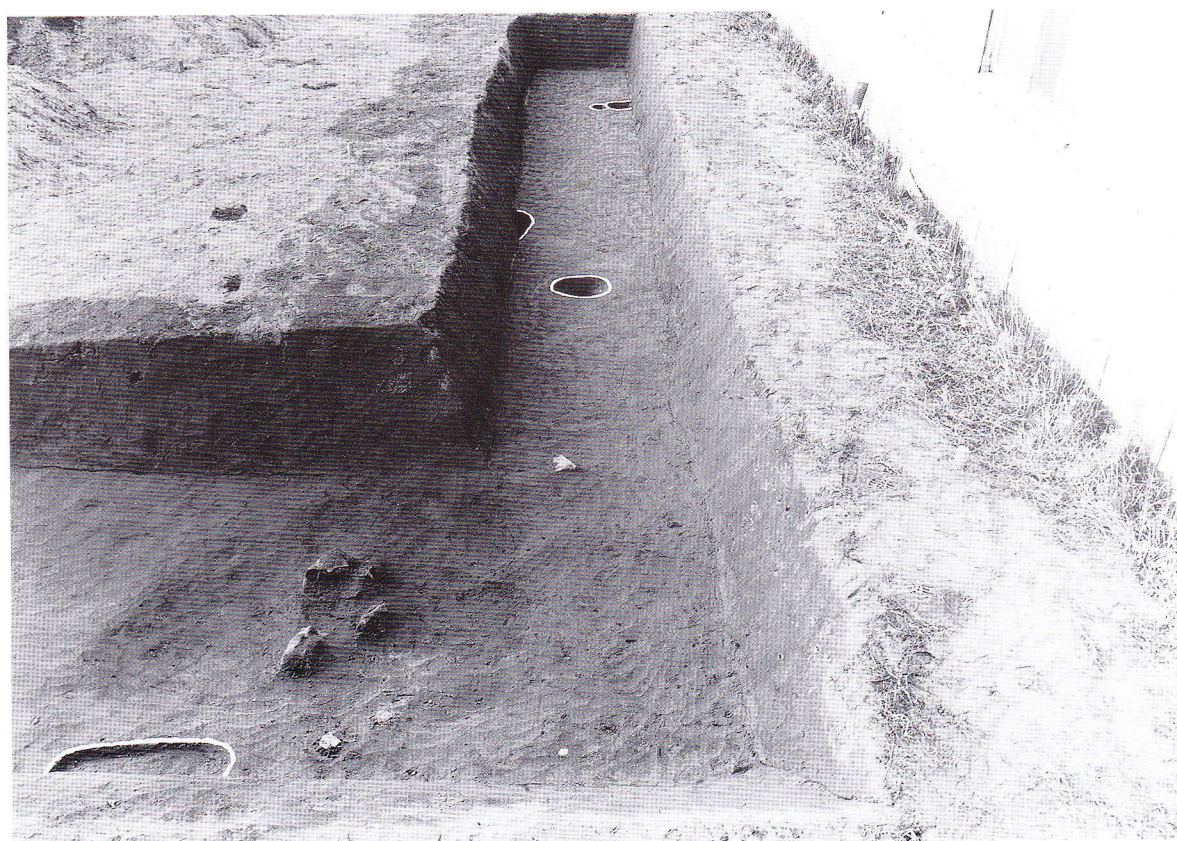
第1区 第3遺構面全景(西から)



第2区 第3遺構面全景(南から)



第1区 第1遺構面全景(西から)



第2区 第1遺構面全景(北から)



SX-2 (北から)



SX-2 (南東から)



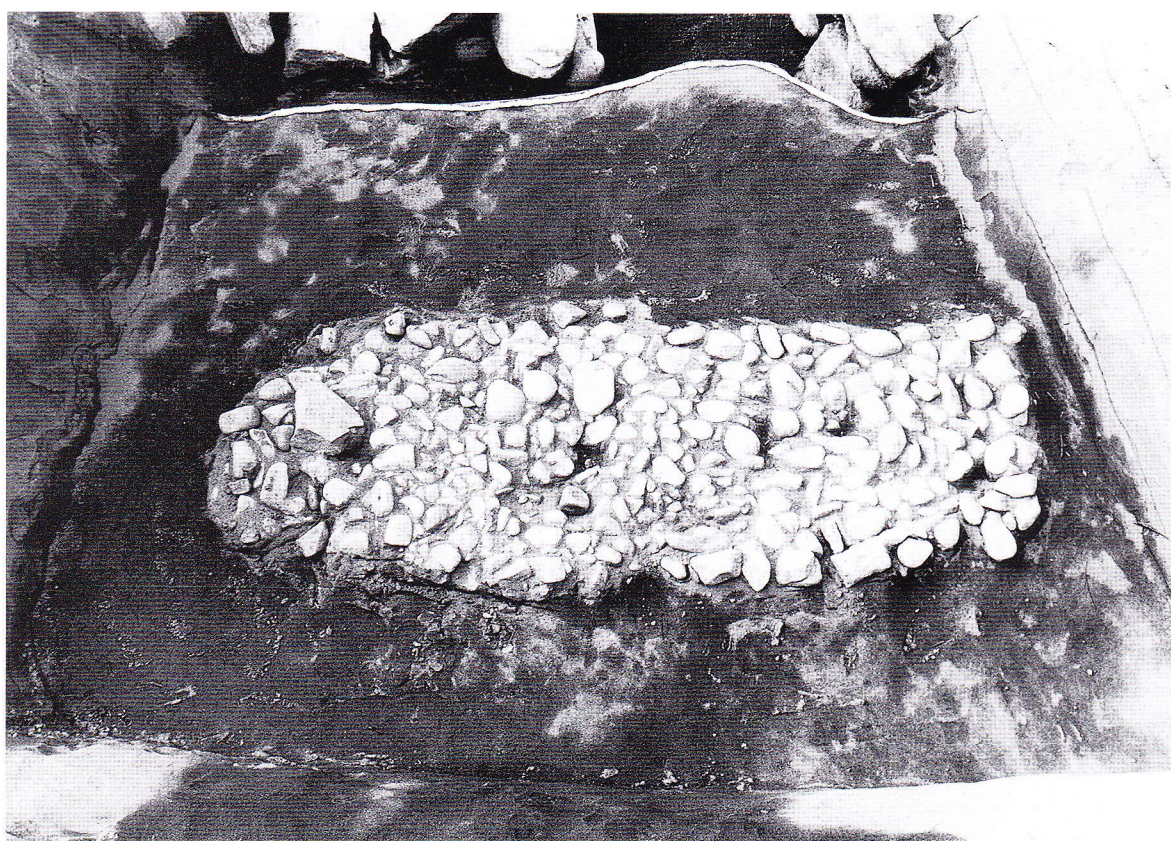
SX-2 西側壁石積状況(北東から)



SX-2 遺物出土状況(南から)



SX-1 (北から)



SX-1 (東から)



第1区 北壁土層推積状況(南から)

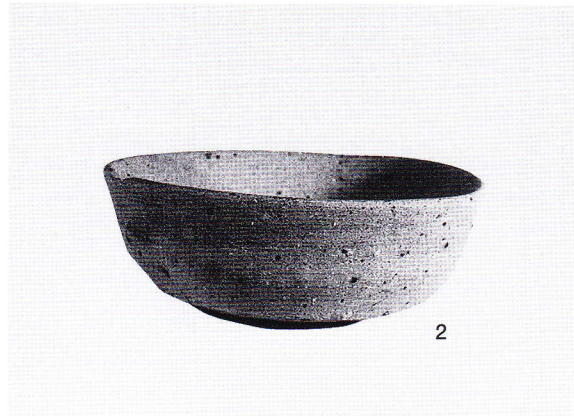


第2区 西壁土層推積状況(東から)



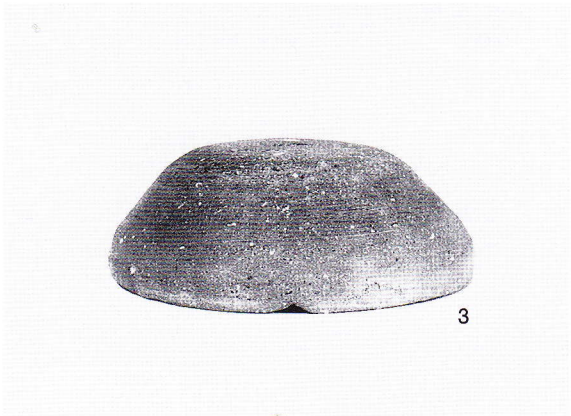
1

SX-2 出土土器 須惠器 1 杯身



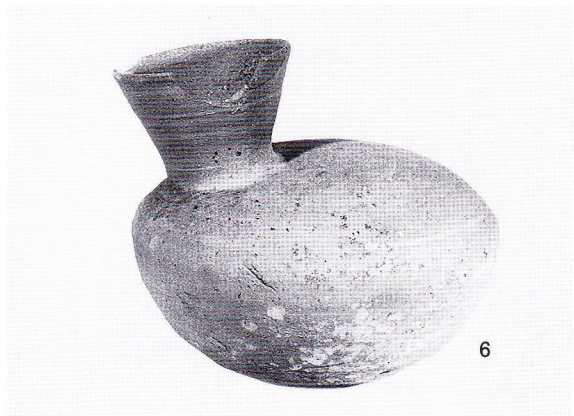
2

SK-3 出土土器 須惠器 2 杯身



3

SK-3 出土土器 須惠器 3 杯蓋



6

SX-2 出土土器 須惠器 6 橫瓶

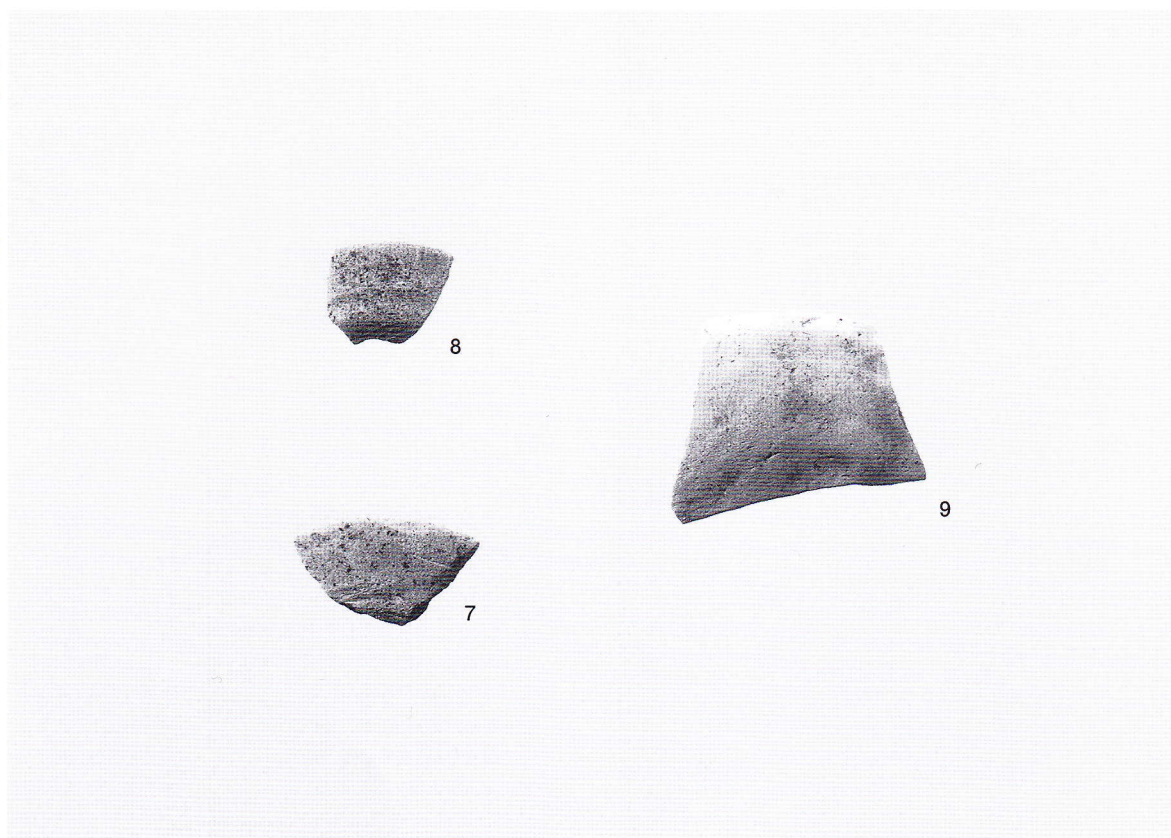


5

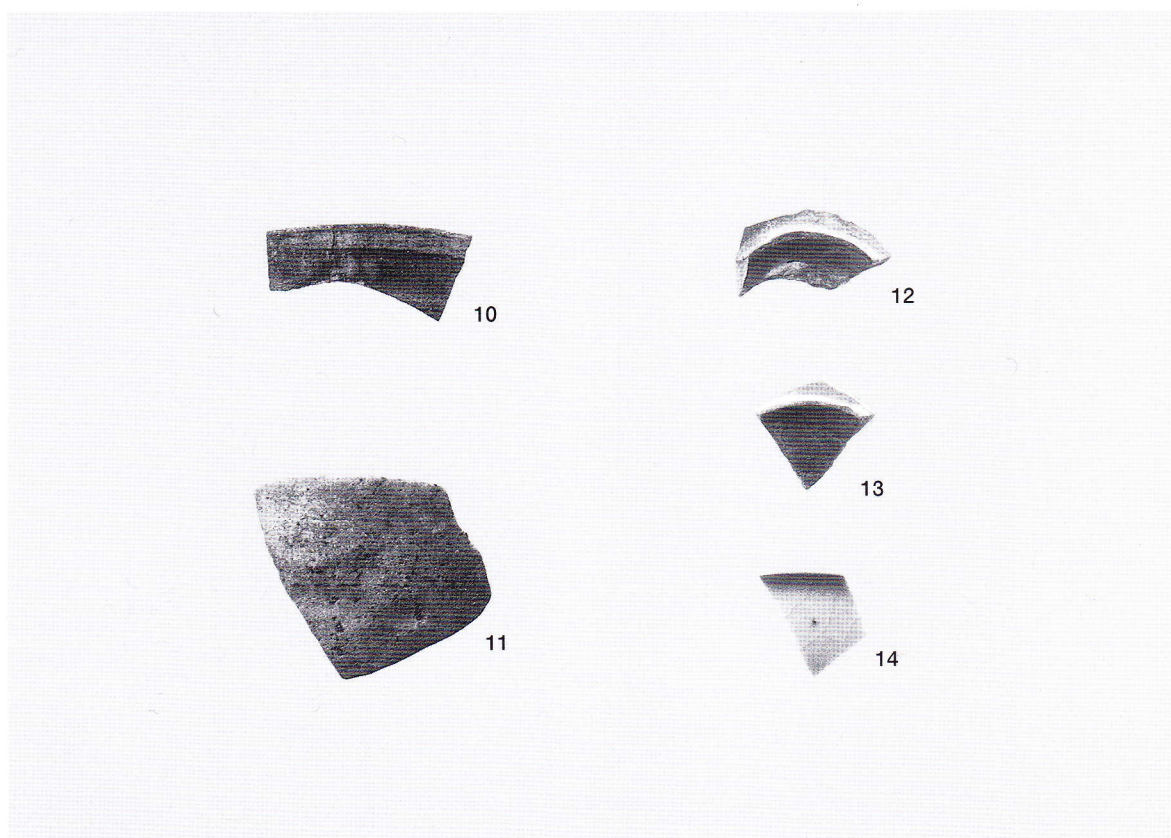


4

SK-3 出土土器 須惠器 4・5 杯蓋



土師器 7～9 皿



瓦器 10～13 椀、中国製白磁 14 皿

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちょうさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成12年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	井馬好英・藤薮勝則・川口修実
編集機関	和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市文化体育振興事業団
所在地	☎640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 ☎640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 073-435-1195
発行年月日	西暦 2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
くすみ いせき 楠見遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 おおたに 大谷	3020150	70	34° 15′ 50″	135° 10′ 40″	20000615 20000622	35	遺跡 確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
楠見遺跡	散布地	古墳時代	土坑	初期須恵器・陶質土器・ 石器	遺跡の範囲が北西 方向に広がることを 確認。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
いわせ に いせき 岩橋Ⅱ遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 いわせ 岩橋	3020150	381	34° 13′ 33″	135° 13′ 49″	20000821 20000831	36	遺跡 確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩橋Ⅱ遺跡	散布地	室町時代 江戸時代	石列	須恵器・黒色土器・瓦器・ 輸入磁器・鉄製刀子	南北方向にのびる 石列2条を確認。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
おおだ くろだ いせき 太田・黒田遺跡	わかやまけん 和歌山県	3020150	327	34°	135°	20001107	90	遺跡 確認
おおだじょうあと 太田城跡	わかやまし 和歌山市 おおだ 太田		356	13′ 39″	11′ 51″	20001214		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田・黒田遺跡 太田城跡	集落跡 城館跡	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	竪穴住居・ 井戸・溝・ 土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・ 須恵器円面硯・瓦器・ 中世土師器・輸入磁器・ 土製品・石器	弥生時代前期の 土坑、古墳時代の 竪穴住居や平安 時代の須恵器円 面硯などを確認。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
にししょう いせき 西庄遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 にししょう 西庄	3020150	38	34° 15′ 35″	135° 6′ 25″	20001108 20001124	35	遺跡 確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西庄遺跡	散布地	古墳時代	横穴式石室 礫床	須恵器・瓦器・輸入磁器	遺跡南東部の古墳 群を構成する新たな 古墳1基を確認。

平成14年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成12年度 —

編集 (財)和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29

発行 和歌山市教育委員会
和歌山市七番丁23

印刷 株式会社 高木プリント

© 和歌山市教育委員会 2002